
愛優記

佐藤泰邦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛優記

【Nコード】

N8616P

【作者名】

佐藤泰邦

【あらすじ】

孤独だった男が愛と優に恵まれ、死後も家族を愛しつつ、こともあろうに神様をも泣かせた物語。

子を授かった妻が夫に是非読ませたいNo. 1の父親教育（洗脳）書？

国際結婚で幸せな家庭を築きたいと願う中年男に、夢と希望と勇気を与える応援の書

序章 神様？ 人の世

目覚め

チーン、チーン、チーン。

その音で俺は目覚めた。

俺はどれほど眠っていたのだろうか？

藤川君からもらった睡眠薬がよほど効いたのかもしれない。

それに、ここはどこだろうか？

遠くに高い山がそびえ立っているが、あれは故郷の岩木山である。左に神社が見え、右にりんご畑が広がっている。ということは、ここは俺が生まれ育った部落の共同墓地に違いない。

俺はクアラルンプールから遺骨となって帰国したようだ。

目の前にりんごやバナナやお菓子やジュースが置かれている。私の好物の柿ピーもある。

小太りの男が鈴りんを打ったらしい。手を合わせて顔を伏せている。

男が顔を上げると、それは弟の春男だった。白髪が目立ち、しわが増え、60歳前後の老人に見える。

(どうした、お前、そんなに老けこんで)

春男の表情に変化がなく、どうも俺の声が聞こえていないようである。

あれっ！春男の脇にいる女性はJumではないか。Jumは顔が少し痩せて見え、ベージュの防寒コートを着て寒さに震えている。

Jumの隣で花束を持った女の子がJumに話しかけている。タ
イ語である。

別の女の子が俺の背後に回り込んで、墓石を観察している。

女の子二人は似たような顔つきで同年代に見えるが、親戚の子だろうか？

20歳前後の見知らぬ女性が毛糸の手袋を外して、何かを私の目

の前に差し出した。

「泰ちゃんはどうら焼きが大好きでしょう」

「よく知っていたね？」

と春男が彼女に顔を向けると、

「私のお父さんから聞いたの」

「藤川さんは元気？」

「余り体調がよくないの。もう60だし」

えっ！俺は60という数字に驚かされた。

自分の死は既に納得しているが、まさか10年間も眠っていたとは思わなかった。

すると、そこにいる二人の女の子は愛花と優花に違いない。

俺は慌てて立ち上がろうとしたが、自分の足が無いことに気づいた。

どちらが愛花で、どちらが優花だろうか？

二人を最後に見たのは生後5ヶ月だったが、俺には直ぐに見分けられた。

ぽっちゃりとして、Jumに寄り添っている子が優花に違いない。

愛花は10年前と変わらず、独りでそわそわ動き回っている。

二人ともJumよりも俺の顔に似ているように見える。俺の娘だと分かれると、目も鼻も口もまゆ毛も指も全てが愛おしい。

（愛ちゃん、優ちゃん、大きくなったね）

やがて俺の目が潤んで、愛花と優花の顔が霞んで見えなくなった。手で涙を拭いていると、

「お父さん」

という声が聞こえた。

誰の声だろうか？俺の背後から聞こえた気がする。

お線香が煙いためか、俺は涙が止まらなくなった。

（愛ちゃん！愛ちゃん！優ちゃん！優ちゃん！）

俺は10年前と同じように、大きな声で何度も何度も呼びかけた。

神様

何故、俺は10年後に人の世で目覚めたのだろうか？

人の世でまた苦勞するよりも、天国で柿ピーを食べながらゆったりと過ごしていたい。

Jumも愛花も優花もいずれはこちらに来るのだから、将棋を楽しみながらのんびりと待っていればいい。天国には責任も病氣も嘘も暴力もない。

それに比べたら、人の世はまるで地獄である。そこに戻るなんてまっぴらご免だ。

ただ、俺の宝である家族がいじめられていたら、俺は神様に直訴して助けに戻りたい。

「その逆じゃよ」

と神様がお言葉をかけてくださった。

「お前の娘の誰だったか？周りの子どもをいじめて皆が迷惑してる」

（あなた様はどちらの神様ですか？）

「お前は何を言っているのじゃ」

（Godとか、アラーとか、シヴァとか…）

「馬鹿者、邪道に惑わされてはいかん」

（恐れ入ります。先ほどのいじめている娘とは、愛花のことでしょうか？）

「親の教育が全くなつたらん」

（申しわけございません）

「謝るだけなら猿でもできるわ。何とかするのじゃ」
と俺は神様にこっぴどく叱られた。

「実はもう、裁判官たちの10年間の審議の末、お前に地獄行きの審判が下ったのじゃ」

（うっそおう！）

「身に覚えがないとは言わせんぞ。神は全てをお見通しじゃ」

（もしかして、あれ？それともあれかな？）

「だが、お前に一度だけチャンスを与えよう」

（うまくやれば天国に行けるのですか？）

「結果次第じゃのう。最後はわしが決める」

（チャンスをください）

「よからう。試験期間20日間、受験料50万円。その期間に娘を改心させられたら合格じゃ」

（50万円？）

「お前が死んだ時、アパートのたんす預金にそのくらいあったはずじゃ」

（そうでした。出しましょう）

「ここだけの話だが、もう10万円上乗せしたら、合格の基準を緩めてもよいぞ」

（それは賄賂ですか？）

「馬鹿者、余計な疑念を捨てるのじゃ」

（失礼しました。出します）

「天国は酒がうまいし、ねえちゃんも綺麗じゃぞ。はっ、はっ、はっ、はっ」

（もしも不合格だったらどうなるのですか？）

「鬼の棲む地獄に落ちるか、それとも人の世でもう一度地獄を味わうか、どちらかじゃ」

（人の世の地獄だけは勘弁してください）

序章 神様？ 故郷

作戦

今日はいつだろうか？

春男がスポニチ新聞を持っている。相変わらず競馬やオートに熱中し、パチンコにはまり込んで、ジャンボ宝くじに人生の運を委ねた独身生活が続いているのだろう。

新聞の日付は「2020年12月12日」。俺は10年前に死んで、今日が命日のようなのである。

試験期間は今日から20日間だから、大みそかまでに課題をやり遂げなければならない。

神様は「改心させられたら合格」とおっしゃったが、「子どもをいじめて」いる愛花をどうやったら「改心」させられるのだろうか？

10年前、俺は愛花や優花に礼儀を身に付けてもらうために『愛優記』を書いた。それを読ませれば、愛花は「改心」してくれるかもしれない。

俺のノートパソコンやメモリーは、10年前のクアラルンプールでの災害で消滅した。

俺は16話の途中まで『愛優記』を書き、10話までをJumに送信したが、Jumはそれらをパソコンに保管しているはずである。

そして、10話の中で家族の10年後、50年後を夢想した。

それと日本語の原文をタイ語に翻訳した文は、確か1話から6話までだったと思う。

『愛優記』の前半部分だけでも愛花が読んでくれたら、教育的効果はあるに違いない。

ただ、10年前のことであり、『愛優記』の原稿が今でも存在する保証はない。

それに今思えば、『愛優記』の中で俺が厳格で真面目腐った父を

演じたのは作戦ミスだった。間抜けで親しみやすい父親の方が、愛花には受け入れ易かったかもしれない。

厳しい父親が説教じみたことをくどくど語っても、子は聞く耳を持たないだろう。

本当は厳しい父ではなく、俺は世界の誰よりも優しい父になりたかったのである。

人の世は学校も職場も社会も地獄のようである。その上に父親も厳しかったら、娘たちが可哀そうではないか。

(Jumさん、愛ちゃん、優ちゃん、苦しくないですか?)

もしも俺が生きていれば、娘たちは現実の優しい父と、『愛優記』の中の厳しい父との両方を見ることができた。両面を見せることで娘たちが父に甘えながらも、素直で礼儀正しく、人に優しい娘として育つ、と俺は考えた。

ところが余りにも突然の死で、俺の作戦は完全に失敗した。

二人に生身の優しい父を知ってほしかったが、今となっては叶わぬ夢である。

(愛ちゃん、優ちゃん、ご免よ)

愛花は『愛優記』の中の役者の父を読み解いて、本当の俺の姿を見抜けるだろうか?

それには父親が子に対して威厳を示す心理や意図と、汚れた世の中と、男の性^{さが}とを理解する必要がある、10歳の愛花には解読できない。推理小説の傑作『Xの悲劇』の謎解きよりも難しい。

何はともあれ、『愛優記』を探し出し、愛花に読んでもらうことが先決である。

故郷

俺には足は無いが、どうやら墓から出ることができる。

俺は新たな作戦を遂行するために人の世への扉を開けた。

昼間なのに冷たい北風が吹いて、肌身に凍みる。

とりあえず、俺は家族のあとを追うことにした。そして春男が運転する車にこっそり乗り込んで、家族の荷物を探ってみた。

ノートパソコンも『愛優記』も見当たらず、俺は車のトランクにも移動してみたが無い。Jumがホテルに荷物を置いてきたのかもしれない。

もしもJumが『愛優記』を保管していたら、愛花はそれを既に読んでいるに違いない。その場合、俺は作戦を変更し、他の手を打たなければならない。

それに「改心」ということだから、愛花の心を知ることが肝心である。そのために俺は家族の様子や会話を観察することにした。

（愛ちゃん、優ちゃん、何か話してごらん）

優花はタイ語の言葉で内容は分からないが、母譲りのおしゃべりで、笑顔が多い娘である。Jumと俺との良いところ取りで、素直に明るく育ったようだ。

問題は愛花である。一度も笑顔を見せないし、言葉もほとんど発しない。

藤川君の一人娘のさくらが愛花に気遣いの問いかけをしても、

「Yes」

と答えただけで、会話にはならない。

俺は愛花の落ち着かない視線や爪を噛む癖が気になった。

Jumは愛花のことで気苦労しているのかもしれない。痩せ細って、眉間のしわが目立つ。

「正面の山が岩木山。10数年前に兄貴とJumさんと私で8合目まで車で登ったね」

と春男が紹介した。

（Jumさん、Do you remember?）

雪化粧をした岩木山は10年前と、いや42年前に故郷を出た時と何も変わらず、どっしり身構えている。横綱白鵬のように強く逞しい姿である。

俺は故郷に帰って岩木山を見るたびに『動かざること山の如し』

の境地にいたいと思ったが、神様は多くの試練をお与えになり、俺は何度も何度もくじけてしまった。

人生は辛く苦しいものだづくづく思う。でも、Jumと暮らした3年間は心が和み、幸せな日々を過ごした。人生最後で神様からご褒美を頂き、俺は神様に深く感謝申し上げたい。

（神様、ありがとうございます）

「礼には及ばぬ」

とご返事が聞えた。

春男は娘たちに直接話しかけることはなく、彼が言った日本語をさくらが英語に訳してJumや娘たちに伝えている。愛花も優花も日本語を知らないようである。

俺は娘たちに日本語の教育を受けさせなかったJumを責めるつもりはない。俺の死が全ての計画や夢をご破算にしてしまったのである。

車は岩木川に架かる吉川橋を渡った。直ぐの交差点を左折すれば、俺の母校の東目屋小学校および中学校に近い。

「泰ちゃんの学校の成績はどうだったの？」

とさくらが春男に聞いた。

「さくらさんと違って英語は駄目だったね。よく海外赴任できたよ」

「日本の英語教育は昔から遅れていたわね」

「でも数学と将棋は1番だったから大先生、略して大先って呼ばれていたよ」

「It's great. 愛ちゃんも算数が得意らしいから遺伝かしら」

俺は幼児の教育について、脳内神経のネットワークを発達させるために算数の練習を優先させ、英語や外国語は後からでも遅くない、とJumに話し、『愛優記』にも書いた。

それをJumは実践し、愛花は算数が得意になったのかもしれない。

さくらが家族に英語で説明すると、車外を眺めていた愛花が視線

を変えた。数学が得意だった俺のことが気になったようだ。

昔は俺も無口でおとなしい性格だったから、俺と愛花とはよく似た親子かもしれない。

子どもの頃は学習塾が無く、自宅で勉強や読書をした記憶も無く、悟や勝や部落の子どもたちと毎日夕飯時までよく遊んだ。

川や沼に釣りに行ったり、沢に蟹取りに行ったり、森の中に秘密の基地を作ったり、スキーや雪合戦をしたり、野球をしたり、トラップや花札をしたり、ロケット花火を打ち上げたり、鳩小屋を作ったり、ねぶたを製作して寄付金を集めたり、わらび採りで小使いを稼いだり、何をやっても愉快だった。

それにりんごもスイカもぶどうもさくらんぼも、お金が無くても好きなだけ喰えた。

故郷では貧乏でも無口でも教養が無くても愉快に過ごせたのに、どこから人生が変わってしまったのだろうか？

愛花は小学生で既に苦しい思いをしている。

何故、人の世は辛く苦しいのだろうか？50歳、いや60歳？の俺にも謎は解けない。

第二章 誕生 ? 命名

俺は娘たちのために『愛優記』に何を書いたのか？

2010年7月～9月に書いた1話～10話はJumに送信した。
その一部を思い出してみることにした。

誕生

2010年6月18日（金）、マレーシアの赴任生活7年で50歳になった私は、ひと月前にタイへ里帰りした妻のJumから写真を受信しました。Jum本人の大きなおなかの写真です。

2週間後の7月2日（金）、私は再びJumの写真を受信しました。私は巨大なおなかに驚きました。将来、愛花や優花がこの写真を見たら、母に手を合わせておじぎをし、母には一生逆らえないと思うに違いありません。

16歳年下の妻のおなかに苦痛や異変がないかと、私は大変心配しました。

おなかの中では愛花と優花とが活発に動き、Jumを蹴りつけていました。そしてJumは睡眠を妨げられ、血液の循環が悪化し、足がむくんで歩行も不自由で、楽な生活ではなかったようです。あなたたちの母は肉体的にも精神的にも苦しんでいました。

あなたたちのおばあちゃんがJumの話し相手になり、そして日常生活や体調管理のためにJumを助けてくれました。

そのおばあちゃんは5人の子供を立派に育てました。そしてJumの愛情や優しさは、おばあちゃんやおじいちゃんによって育てられたのです。

おばあちゃんや母のお陰であなたたちは誕生し、これから何よりも大切に育てられます。おばあちゃんや母に比べれば、父があなたたちにしてやれることはほんの少しです。父への気遣いは不要です

が、二人への感謝の心を忘れてはいけません。

あなたたちが物事の分別ができるようになったら、二人のためにお手伝いをしてください。そして母の誕生日には綺麗な花を贈り、おばあちゃんは誕生日が不明なので、いつも肩や足をもんでやりなさい。

私はあなたたちの成長記録を書くつもりです。娘に何も語る事ができなければ、私は人生に悔いを残すと思い、父の責任としても『愛優記』を書き残すことにしました。

出産予定日の7月20日が近づくにつれ、私は通勤中も仕事中でも睡眠前にも、父としてあなたたちに伝えるべき内容や『愛優記』の書き出しについて構想していました。

7月8日（木）、その日も私は『愛優記』を構想しながら工場で働いていました。そこにJumから異変を知らせる電話が来ました。「昨夜、破水して出産したよ」

（なに！）

「愛ちゃんも優ちゃんも元気です」

「産まれた！Jumさん、あなたは元気？」

「出血してパワーがないけど、大丈夫」

（ん、大丈夫じゃないかも）

私は航空券の予約なしにクアラルンプールLCC空港へ急ぎ、緊急の異変に対応しました。

ところが飛行機のトラブルで出発が遅れ、バンコク空港に到着したのが夜22…00となり、私はその日に病院に行くことができませんでした。

私はチョンブリ県の定宿の安いホテルに泊まりました。

次の日の朝、私はおばあちゃんとJumの弟と一緒にシラチャの病院へ向かいました。

Jumはガラス張りの小部屋が密集する集中治療室（ICU）で、鼻穴に酸素のホースを入れられ、ベッドでぐったりと横になっていました。

おばあちゃんがドアを開けるとJumは目を覚まし、私に気づきました。私が右手を横に振って合図すると、Jumは恥ずかしそうな笑顔になりました。

「出産は楽じゃないよ。次は泰ちゃんが妊娠してね」

私はその言葉に産みの苦しみを感しました。

実際、Jumはかなり出血したらしく、独りでは歩けないほど衰弱していました。

対面

私は妻を苦しめた暴れ者たちと対面するために、おばあちゃんと一緒に新生児集中治療室（NICU）へ行きました。

愛花は7月8日AM1…13に生まれ、体重2,700gでした。あなたはミルクを飲む時に呼吸停止の障害がありました。それは親に心配をかけて、愛情を自分に向けさせる戦術ですか？

優花は7月8日AM1…15に生まれ、体重2,595gでした。あなたは小顔で額が広く、賢くて活発な娘になると感じました。

7月10日（土）、愛花の呼吸障害は改善されず、肺などの検査が行われましたが、幸いにも異常はなく、私は安堵しました。

愛花は他の赤ちゃんよりも物覚えが少し遅いだけです。早い遅いよりも何事もあきらめずに続けることが大切であり、それは愛花にとって成長の一步となる訓練です。

一方、優花は親に心配をかけない優等生のようなのですが、父の腕の中では泣きました。それは私の抱き方が下手だったからだと思いますが、実はウンチを漏らしたからでした。

乳を飲んで、寝て、ウンチやオシッコを出して、そして泣くのが赤ちゃんの仕事だと、私は実感しました。

7月12日（月）、愛花の呼吸障害は少し改善され、あなたは初めて母乳を吸いました。しかし今度は顔に黄疸が見られ、光線の治療を受けていました。多難な人生の始まりでしょうか？

私は大好きなゴルフのことを忘れ、読書もせず、愛花のことが心配で寝不足になりました。

7月13日（火）、幸いにも愛花の顔色がよくなり、母子3人が揃って退院することができました。しかし愛花がなかなか目を開けず、私は心残りのままにマレーシアへ戻りました。

愛優花

「愛花」と「優花」の名前について書いておきましょう。

Jumが妊娠して6ヶ月の頃、愛情深く優しい人になってほしいという願いを込めて、私が命名しました。

「愛」と「優」との漢字の中心には「心」という字があります。辛抱強い「心」や弱い人に優しい「心」を身につけ、そして相手の「心」を察する目を磨いてください。

「花」は自然が創り出した美の結晶ですが、虫や動物はその外見の美しさを堪能しているわけではありません。外見を目印に甘い蜜を食べるために「花」に集まります。

それなのに人間は外見に目を奪われ、中味や本質を見逃しがちです。

外見を着飾るよりも中味を蓄えてください。中味が潤うと外見も美しく見えます。

初めてJumに会った3年前、私は「心」の良い人だと感じ、作業着姿で飾り気のないJumが桜のように美しく見えました。やはり私の目に狂いはなく、私は人生最良の選択をしました。

母の美しさには及ばなくとも、「心」が「花」のようにきらめいてほしい。父の願いです。

第二章 誕生 ? 泣き虫

障害

マレーシアに戻った私は、なかなか目を開けない愛花のことが気がかりでした。

そこでタイで愛花と優花を養育するJumに、目を開けた愛花の写真を撮ってほしいと依頼しました。

2010年7月15日（木）、私はJumから愛花の写真を受信しました。愛花は青いマットの上で仰向けに横たわり、目を大きく開けていました。

愛花には呼吸障害があり、私は酸素不足によって脳に異常があるのではないかと心配していました。愛花の頭部の形や表情は優花と違い、私には違和感があったからです。

他にも愛花には、肌が黄色くなる、おならが極端に多いのにウンチが5日間も出ない、いつも不機嫌で大声で泣くなどの脳障害を思わせる異常がいろいろありました。

私は愛花の写真を見ましたが、その心配を解消することができませんでした。

一方、優花は健康で活発で、シャワーもあまり嫌がらず、心配無用の優等生でした。

7月17日（土）、私はそれまで口にできなかったことをJumに思い切って言いました。

「優ちゃんは普通の顔で可愛いけど、愛ちゃんの頭や顔は少し違和感がある」

私の貧弱な英語の言葉がJumには、

「愛ちゃんは可愛くない」

と聞えたようです。

自分の子を夫から「可愛くない」と言われたら、妻はショックを

受けるに違いありません。

J u mは言葉を詰まらせ、やがて電話の向こうで泣きだしました。J u mも内心では愛花に対して何かを感じていたのかもしれない。

私は余計なことを言ってしまったのでしょうか？

そうかもしれませんが、思ったことを言わないのは相手を信頼していないことにもなります。言葉は不適切でしたが、私は言ったことをあまり後悔していません。隠し事をしないで何でも納得するまで話し合う。それは私たち夫婦が決めた基本方針だったからです。

「愛ちゃんも優ちゃんも同じく可愛い。愛ちゃんは泰ちゃんに似ていると母も妹も言っている」

と、J u mは愛花をかばうように泣きながら反論しました。

私は愛ちゃんが可愛くないのではなく、逆に可愛くて心配で夜も眠れないのです。後できちんと説明すればJ u mは分かってくれる、と私は信じていました。

口が半開きで不安げな表情の愛花の写真を、私はじっと見つめました。

クラシック

7月18日（日）、前日泣いたJ u mからメールを受信しました。「娘たちは元気です。心配はいりません。私はとても幸せです」

J u mが明るさを取り戻し、私はほっとしました。

私は子育てのアイデアとして育児の部屋に音楽を流すように提案しました。『天才脳をつくる0歳教育』（久保田競著）を読んでも音楽の効果については書いていませんが、音楽を聴けば母は心を落ち着かせ、そして幼児の脳を刺激して脳力を高めると考えたのです。J u mはラジオで音楽を流していましたが、私はモーツァルトを聴かせるように勧めました。

私は子供の頃に音楽を楽しんだ記憶がなく、音感やリズム感を鍛

える機会がありませんでした。楽器を上手に演奏する人や音楽に合わせてダンスをする人を羨ましく思います。

ただ、私は大人になってカラオケを楽しみました。いつか『心の旅』で歌唱力の勝負をしましょうか？

そういえば、クラシックコンサートに行ったのはいつだったでしょうか？

30年ほど前、小澤征爾氏の指揮で新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏を聴いたような気がします。

コンサートは孤独な人には行きづらい場所です。父の人生は多くの人に支えられながらも、ある面ではずっと孤独でした。孤独に耐え、47歳にして天使に救い出されたのです。

その天使もあなたたちも双子として生まれ、人生で孤独を感じる事が他の人より少ないと思いますが、いつか孤独の絶望感を体験するはずです。それに耐え抜く力を鍛えるために、時々父は厳しい教育者になります。

愛花や優花が苦しい場面であえて父は助けず、谷底に落とすこともあるでしょう。谷底から独りで這い上がった時、人は獅子のように強くなるからです。

孤独な時、母とともに聴いた音楽を流してみてください。あなたたちを癒してくれるはずです。

近々、天使を連れてクラシックコンサートへ行くつもりです。大勢の個性が心一つに奏でるクラシック音楽の素晴らしさと、子育てへの有効性を天使に実感してほしいからです。

その時、愛花と優花はおばちゃんと一緒にモーツアルトを聴いて待っていてください。

将来、あなたたちが勤め先から初任給を受け取ったら、天使への誕生日プレゼントとしてコンサートのチケットを検討願います。父も天使に付き添って行きます。

父としてはドヴォルザークの交響曲第9番『新世界より』が希望ですが、モーツアルトやベートーベンでもいいと思います。

泣き虫の天使にはチケットと一緒にハンカチも2枚渡してください。1枚は父が使います。

父は今、天使や愛花や優花がいつも心の中にいて、孤独ではありません。ありがとうございます。

覚悟

7月23日（金）、私は10日ぶりにあなたたちと再会しました。その日、病院で体重を測定したら、愛花が3060g、優花が2780gで、それぞれ360gおよび185g増えていました。

逆にJumはほっそりとして、むくんでいた大根足がカモシカの足へと回復していました。育児のストレスで痩せたのかと思いましたが、Jumは家事や育児があまり苦にならず、むしろ楽しいと言います。とても我慢強い母です。

母の生活力や得意のおしゃべりが家族を幸せに導く力になるでしょう。

優花は母のように我慢強く、しっかり者との評判でした。

「お父さんですよ」

と話しかけたら、優花は私に微笑んでくれました。お利口ですね。

一方、念のために血液検査を受けた愛花は、静かに寝ていました。検査結果は正常でしたが、注射の時には奇声を発したとのことでした。

「愛ちゃん、元気ですか？」

私の声に驚いた愛花は大声で泣き出し、私も驚かされました。

私は愛花を落ち着かせるために、

「ハイ、ハイ」

と言って、小さな頭を撫でてやりました。

すると愛花が泣くのをやめて表情を和らげ、五体を活発に動かしたので、私は安心しました。

表情豊かに身体を動かした愛花に何か障害があったとしても、父も母も鍛えられていますので、あなたを守り抜く覚悟ができていま

す。何も心配は要りません。

でも、いつか父が遠くへ行ってしまったら、愛花が優花と協力して泣き虫の母を守ってあげてください。

私は愛花を腕に抱き、その顔をJumに向けて、

「可愛いですね」

と言って、Jumの表情を見ました。

「愛ちゃんはまゆ毛が薄いけど、他は泰ちゃんに似ています」

「そうですか。まゆ毛をメイクアップすれば美人になるね」

と私が返事すると、泣き虫は微笑んで潤んだ目をきらりと光らせました。

第二章 誕生？ 絆

ウンチ

J u mはおばあちゃんとの共同作戦でウンチと闘っています。

2010年7月25日（日）以降、愛花の便秘が改善され、二人とも毎日のようにウンチをしていました。ただし、愛花はウンチが硬すぎて肛門が詰まり気味で、大きな声で泣きました。出産時から病院で飲ませていたカナダ製のミルクが合わなかったのかもしれない。

病院の医師からの助言により、カナダ製からアメリカ製のミルクに替えました。すると、黄色の柔らかいウンチになりました。

J u mは優花にもアメリカ製のミルクを与えてみました。数日は順調だったのですが、その後、ウンチが硬くなり、今度は優花が肛門の詰まりで泣くようになりました。

J u mが硬いウンチに触てみると、脂っこくて石鹸で手を洗っても落ちづらかったそうです。

硬いことや脂っこさは何を意味しているのでしょうか？

私はウンチの状態を記録するために、J u mに写真を撮るように頼みました。早速、優花のウンチの写真を受信しましたが、ちょうど夕食中だったので吐きそうになりました。

俳優の渡辺徹氏は、娘のウンチを味見して健康点検をしたそうですが本当でしょうか？

J u mはどのミルクを与えたらよいのかを迷っていました。夫婦で相談した結果、当面はJ u mのアイデアを採用して、アメリカ製とカナダ製との混合のミルクを与えることにしました。

実はJ u mの双子の妹のJ i mさん夫妻からカナダ製のミルクをプレゼントされ、J u mはそれを使い切りたいと考えていました。

J u mのもったいない精神はおばあちゃん譲りの筋金入りですが、

その精神は育った環境と深い関係があります。

J u mが生まれ育った家はマンガー畑の中の小さな家でしたが、そこに親子7人で質素に暮らしていました。家の二方に壁が無く、暴風雨の時は家の中が水浸しになったそうです。

時々、J u mは子供の頃の話を書きますが、J u mの両親は豚肉や卵などのご馳走を自分たちは口にせず、子供たちだけに食べさせることが多く、その貧しい生活の中でもつたない精神が養われたのだと思います。

貧しくとも一生懸命に生きていれば、何も恥ずかしいことはありません。裕福でも弱い人をいじめれば、人間としてとても恥ずかしいことです。貧富で人を差別してはいけません。

ところで、J u mの子供の頃にウンチはどのように処理されていたのでしょうか？

捨てるのがもつたいないので、畑の肥料として利用していたと思います。いつか、母に問うてみてください。

話は戻りますが、私は乳児の硬いウンチについてインターネット上で調査し、

「粉ミルクに対してお湯を大目に加え、水分不足を補ったかどうか？」

とJ u mに助言しました。

素人の浅知恵だったでしょうか？

私は内心、『明治乳業』などの日本製のミルクに替えた方がよいと考えましたが、まずは医師やJ u mの考えを尊重しました。

まもなく、おばあちゃんがウンチ対策のために炭酸水を買ってきてくれました。

おばあちゃん

そのおばあちゃんには5人の子（1男4女）と、愛花や優花を含めて10人の孫（5男5女）がいます。

おばあちゃんに育てられた子供たちは、挨拶やお手伝いがよくできます。そしておばあちゃんは、人や物を大切に作る心や病気にならない知恵を教えてください。

おばあちゃんの言うことをちゃんと聞けば、愛花も優花も母のようになんか心身ともに健康に育つはずなんです。そして母の話を聞けば、おしやべりが上手になります。

でも、いつまでも赤ちゃんのつもりでおばあちゃんや母に頼りっぱなしでは駄目です。物心がついたら自分で考えて、自分の手足を動かし、時々はお手伝いをしてください。それが人として一人前になるために必要な訓練です。

そしてウンチの世話をしてくれたおばあちゃんに、

「いつまでも元気に長生きしてね」

と言って足をもんでやるのが、家族の一員としての愛花や優花の務めです。

おばあちゃんの笑顔は愛花や優花の喜びとなり、愛花や優花の喜びは父や母の幸せとなる。それが家族の絆です。

おじいさん

8月5日（木）、私はJumから優花の写真を受信しました。

「優花のほおが膨らみ、泰ちゃんの弟に似てきたよ」

Jumやタイの家族の印象では、愛花の顔は私に似て、優花は私の弟の春男に似ており、まゆ毛の薄さだけがJumからの遺伝ということのようにです。

愛花は長い頭であり、優花は丸顔ですが、私には誰に似ているのかまだピンと来ません。なぜか、Jumの面影も感じません。

しかしあと数ヶ月もすれば、印象は変わると思います。小顔の優花は母に似てくるかもしれません。そして愛花は私の父親、つまり日本にいるおじいさんに似てくる予感がします。

おじいさんは家族のために一生懸命に働きましたが、39年前に

妻（私の母）を亡くし、自分の夢が破れ、身体を壊し、辛く孤独な人生を過ごしてきました。いつか、愛花や優花におじいさんの「1000本のりんごの木」の夢物語を語って聞かせるつもりです。

来月で80歳になるおじいさんは、全盲のために愛花や優花を見ることができません。でも、私は愛花や優花にはおじいさんの顔を記憶してほしいと望みます。なぜならば、おじいさんの表情や手の感触や人生の軌跡から、人が産まれ、生き、死ぬ、ということの意味を感じてほしいからです。そして、家族の絆を再び結びたいのです。

おじいさんは愛花や優花の誕生をまだ知りません。

（オッチャ、やすくにだ。オッチャの孫、産まれだよ）

今月末、私はおじいさんの耳元で伝えるでしょう。

そして来年、私は最後の親孝行と思つて孫を抱かせるつもりです。愛花も優花も私の親孝行のためにお手伝いをしてください。

第二章 誕生 ? オツチャの夢

儀式

2010年8月17日（火）、愛花と優花が産まれて40日が経過しました。タイでは生後ひと月以降に赤ちゃんの頭髪を剃り、爪を切るという儀式を行うそうです。

おばあちゃんは伝統や慣習を重んじています。

「慣習に従いたい」

というJumの意向に対して、私は認めました。

仏教では剃髪は身体飾りを捨てて、世俗から離れるといった意味があるようですが、私は心身ともに健やかに育ってほしいという願いとして受け止めました。儀式は家族や組織などの共同体の絆を深めるために人間が考えた知恵なのかもしれません。

早速、私は愛花と優花の剃髪前後の写真をJumから受信しました。私は愛花も優花も髪が無くても可愛く見えますが、私の弟の春男は愛花が男の子みたいだと言います。

仏壇や神棚の前には料理や果物などが供えられ、親戚の皆さんが集まって二人の誕生や健康を祝ってくれました。

意外にも日本の慣習と違って花は飾られていませんが、愛花と優花との二つの花があれば十分ということなのでしょうか？

仏壇にはおじいちゃんの写真が置かれています。Jumは父であるおじいちゃんを尊敬していますが、おじいちゃんは一生懸命に育児をしている娘の姿を見守り、

（母として妻として立派だね）

とJumを褒めているに違いありません。

帰国

8月18日（水）、私は愛花と優花の戸籍や健康保険などの手続きのために一時帰国しました。

成田空港に到着して飛行機から降りると、日本の夏はマレーシアよりも暑いと感じました。

到着したその日、埼玉県の富士見市役所で愛花と優花の戸籍手続きを済ませ、二人はタイと日本との二重国籍を得ることになりました。

タイ国籍よりも日本国籍を選んだ方が社会保障や厚生などの面で有利だと思いますが、二十歳までにどちらかの国籍を自分で選んでください。

日本国の子ども手当ての手続きにより一人13,000円（2011年4月から増額）、会社の家族手当てにより一人2,000円が9月から毎月支給されます。

健康保険制度により、出産育児一時金として一人390,000円が支給され、二人分として780,000円を受け取れます。又、出産の医療費の7割も後日返済されます。

それらは私が日本国籍だから得られる収入です。20年後にはタイ国籍でも充実した社会保障を受けられるのでしょうか？

8月19日（木）、元上司で学校の先輩でもある村本さんの60歳定年退職ご苦労さん会に参加しました。

私も10年後には定年退職ですが、その時に愛花と優花はまだ9歳と7ヶ月です。あなたたちの養育費や学費を稼ぐために、私も村本さんと同じように定年後も働き続けるつもりです。

8月20日（金）、富士見市の友人である武田さんのお宅を訪ねると、武田さんの奥さんが手作りの縫いぐるみを用意していました。愛花や優花のために作ってくれた贈り物です。

純白のうさぎさんたちは二人が物心つく頃には汚れているかもしれません、うさぎさんから人の優しさを感じ取ってください。

8月21日（土）夜、私と春男は記録的な猛暑の埼玉を出発し、故郷の弘前に向かいました。そして次の日の朝、地元に着し、岩

木山の山麓にある『いわき荘』の露天の温泉に浸かりました。

私の故郷は津軽平野を潤す岩木川に隣接し、りんご畑に囲まれた山里です。

昔、実家はりんご農家でしたが、私の父は毎年冬になると神奈川や千葉などへ出稼ぎに出ていました。りんご栽培だけの収入では家族を養えなかったからです。

その父の夢は1000本のりんごの木を持つ農家になり、新しい家を建てることでした。

私の母が存命中は夢の実現に向けて順調でしたが、母が死んでから父は苦勞し、夢は道半ばで挫折してしまいました。

父は酒で乱れ、毎日のように祖父と言いつ争っていました。そんな父の姿を見て、私は父が弱い人間だと見下していました。

しかし、父が病気で倒れてから、私の見方が変わりました。農業、家事、出稼ぎなど、あれほど一生懸命に働いた人はそうはいません。私の父は家族のために必死に生きた人です。

『はたらけど はたらけど猶わが生活くらしにならざり ちっと手を見る』

父を想う時、私は石川啄木のこの歌を心で詠み、父より苦勞が足りない自分の手を見ます。

オッチャ

私の父、つまり愛花や優花のおじいさんに会うために、私たちは藤崎町の特別養護老人ホーム『さんふじ』を訪れました。

おじいさんはベッドで寝ていましたが、ホームで働く人に車椅子へ乗せてもらいました。体力的にかなり衰えた印象であり、私は覚悟をしておく必要があると感じました。

認知症のおじいさんは自分から語ることはありません。対話が困難であり、こちらの問いに対して一言返すのがやっとです。

「オッチャ、ワ、ダダバ? (お父さん、私は誰ですか)」

「ん…」

「息子の名前、オンベデルベ？（覚えているでしょう）」

「やすくに…」

「去年は私の名前を思い出せなかったのに、今年は意外にも覚えていました。」

二週間前、『愛優記』1〜4話をマレーシアから『さんふじ』に郵送していたので、ホームの人がおじいさんに双子の誕生や私の名前などを繰り返し伝えていたようです。

「オッチャの孫、産まれダよ」

「ンダナ（そうですか）」

「孫の名前は、愛花」

「ん、あいか…」

「それがら、優花」

「ゆうか…」

おじいさんははっきりとした声で二人の名前を言ってくれました。

「来年は二人の孫、つれデくるよ」

「ンダナ」

私は家族の絆が辛うじてつながっていると感じ、指で目頭を押さえました。

（来年まで間に合ってほしい）

と私は祈り、父の苦労が刻まれた手を握りしめました。

その日の午後、私と春男は墓参りをし、愛花と優花の誕生を私の祖父、祖母、母にも報告しました。そして親戚のお宅でご馳走を頂き、親戚の皆さんから祝福されました。

帰路のアップルロード沿いには、りんご畑が延々と続いています。

1000本のりんごの木とは、どの程度の広さの畑に相当するのでしょうか？

私は父の夢の大きさを測りながら、故郷を後にしました。

第二章 誕生？ 楽園

バンコク

2010年9月17日（金）、私はエアアジア航空AK742便にてバンコク空港に到着しました。格安便なので食事が有料でサービスが無く、バスに乗っていた感じでした。

私はJimさん（Jumの双子の妹）の夫であるKomさんが運転するトヨタHILUXに乗せてもらい、車の中で優花を抱いたJumと再会しました。

Jumは泣き虫で大声の愛花ではなく、落ち着きのある優花を連れて来ました。

「優ちゃん、お父さんですよ」

優花は周りの景色が気になってか、それとも視野が狭いためか、私になかなか目線を合わせてくれません。まもなく、優花は紙おむつにウンチをしました。

私が優花を初めて抱いた時もあなたはウンチをしましたが、それが父に対する優花の挨拶ですね。2日ぶりのウンチとのことであり、優花は私が来るまで溜めこんでいたようです。

私たちは車内でウンチの匂いを嗅ぎながら、バンコク市内のグラントタワーホテルに向かいました。

ホテルのバスルームでお尻に着いたウンチを洗い流し、私は新しいおむつを付けた優花を抱き、Jumとともに電車に乗って、スクンビット通りソイ24近くの北京ダックのレストランに向かいました。

私は首のすわらない優花を気かけ、腕や腰が疲れましたが、娘を抱いて幸せな気分でした。

レストランで菅沼さんと待ち合わせをし、そして彼の紹介で翻訳の仕事をしている日本人の人に会いました。

その萩原氏はタイのチェンマイにて日本語教師を経験し、13年間タイに滞在してタイ語を習得した勉強家です。現在はバンコクにてF社のManaging Directorとして活躍されています。

萩原氏が翻訳した『愛優記』3話のタイ語版をJumに読んでもらったら、

「とてもいいです」

という評価だったので、私は今後、萩原氏に翻訳を依頼することに決めました。

その日、私は『愛優記』6話までの翻訳代を前払いしました。

「翻訳した文はどなたが読むのですか？」

「妻や彼女の家族です」

私は子どもの教育に関する私の考えを家族に知ってほしいと思います。愛花や優花を恥ずかしくない人間に育てるためには、家族との意思疎通や協調体制が大切だと考えるからです。

最終的には愛花や優花に読ませますが、おそらくそれは小学校高学年の頃でしょうか？

「将来、娘が有名人になったら『愛優記』が話題になるでしょう。

私は20年後のベストセラーを狙っています」

その20年後、私は仕事から引退し、収入が年金だけでは心細いので、『愛優記』の稼ぎで墓石を購入できたら幸運です。宝くじで一等賞を当てるようなものです。

菅沼さんには3,530バーツ／1万円の交換レートにて日本円とタイバーツとの両替をお願いしました。1米ドル85円前後の円高の昨今、菅沼さんはタイバーツよりも日本円を持っている方が安心で安全だと思っています。

私も菅沼さんも老後を心配する年齢になったということです。

その日、Jumはうま味が凝縮した煮豚を饅頭（中国式蒸しパン）に包んで食べて満足し、そして食事後に幼児服やお菓子などを買いい、一泊のバンコク旅行で気分転換ができたようです。

贈り物

9月18日(土)、私たちはバンコクのホテルからチョンブリ県に向かいました。ホテルのリムジン車を使うと2,200バーツ(6,250円)ですが、Jumが一般タクシーと交渉し、1,000バーツ(2,840円)に値切りました。

Jumはおばあちゃん譲りの節約家であり、お金の使い方が上手です。愛花も優花も母を見習って節約家になりなさい。浪費家では幸せになることができません。

私たちはおばあちゃんへの贈り物を買うためにチョンブリ県のセントラルプラザへ行き、金製の腕輪を選びました。それは愛花と優花の育児を手伝ってくれるお礼です。

贈り物が安過ぎても高過ぎても恥ずかしいので、私はJumと相談して決めました。

私たちはJimさん家族と一緒にコーチャン郡サタポン村のおばあちゃんの家に行きました。

私がおばあちゃんに、

「コップンカップ(ありがとう)」

と言って贈り物を渡した時、Jumが涙を流し、おばあちゃんも頭を下げて目を潤ませていました。

不覚にも私の目にも涙が溢れ、私は恥ずかしくて顔を横向きにし、愛花の顔を見つめました。

その日の夜中、体温37.1℃の微熱の愛花は、ベッドで大きな声で泣きました。母乳を与えても泣きやまず、おばあちゃんにあやしてもらいました。

愛花は優しいおばあちゃんが大好きですね。ベッドにおばあちゃんの代わりに見知らぬ人がいたので驚いたのでしょうか。

いつになったら、私は愛花や優花に父として認めてもらえるのでしょうか？

ゴム園

9月19日(日)、私はおむつを付けていない優花にオシッコをかけられました。それが優花の朝の挨拶でした。

私たちはJimさんや近所の人に子守をお願いし、おばあちゃんの畑に出かけました。

畑ではゴムの木とバナナの木とが交互に規則正しく植えられ、雑草が少なく、整然と手入れされていました。

おばあちゃんは作業者とともにバナナを収穫し、Komさんがそれを手伝いました。

私とJimはJimが産まれた昔の生家に入り、現在そこに住む作業者の老いた両親と語り合い、そして採り立てのココナツジュースを飲んでのどを潤しました。

畑にはその他にパイナップルやドラゴンフルーツや様々な果物や野菜が栽培されています。家族は好きな時にそれらを採って食べています。

その中で、私は1本の木にたくさんのパイヤが実っているのに興味を持ちました。青森りんごと同じように実の一部を摘果すれば、格別に甘いパイヤを生育できると思いますが、タイでは自然に任せ、摘果の手間をかけないようです。

タイ農業の将来性はどうなのでしょう？

最近、タイでは農産物の盗難が多く、おばあちゃんの畑でもバナナが盗まれ、農業が人災や天災でリスクの高い仕事になっているようです。

4～5年前、おばあちゃんは元々マンゴーの畑にゴムの木をたくさん植えました。植林から樹液の収穫まで5～6年かかるので、ゴム園から収入を得るのは来年以降です。

おばあちゃんは10人の孫たちが希望通りに教育を受け、生計で困らないようにと願い、ゴム園に家族の未来を託しています。

盗難被害を防ぎ、天然ゴムの価格が高値で安定すれば、数年後には家族の暮らしが楽になるかもしれません。おばあちゃんは毎月のようにお寺に出かけ、家族皆の幸せを祈っています。

おばあちゃんは農作業や育児で忙しい毎日ですが、優れた生活力や豊富な育児経験を持っています。私はこの地が愛花や優花にあって育児の樂園であると確信しました。

第二章 誕生 ? 使命

サワディーカップ

2010年9月20日(月)、私が泣き虫の愛花を抱くと、あなたは珍しく笑顔を返してくれました。私は愛花に父として認めてもらえた気分になって、あなたを高々と持ち上げました。

「愛ちゃん、あまり泣かないでね。さよなら」

マレーシアに戻る私は、愛花に別れの挨拶をしました。

優花はオシッコやウンチで驚かす相手が帰るためか、寂しそうな表情をしていました。

「優ちゃん、お父さんを忘れないでね」

Jumは畑で収穫した3種類のバナナや豚肉の甘焼きなどを私のバックに詰めてくれました。

私は愛花を抱くおばあちゃんや近所の人に、

「サワディーカップ(さようなら)」

と手を合わせて挨拶し、サタポン村を離れました。

バンコク空港まではKomさんの車で送ってもらい、Jumが付き添ってくれました。

「ホームタウンは育児にいい所だね」

私はおばあちゃんやJumに育児を任せていれば安心だと思いつつ、仕事や現在の生活を捨てて娘たちの所へ戻り、一緒に暮らしたいという衝動に駆られました。

私の心を察してか、Jumは娘たちをマレーシアに連れて行く計画を語りました。

「来年1月、娘たちをマレーシアに連れて行きたい。その時、お姉さんを同伴させたい」

「それはいいアイデアだね」

「給料はどのくらい払える？」

「お姉さんの今の給料の2倍、いや3倍でどうだろう？ 交通費は別で」

「家族で相談してみるよ」

飛行機の中で私は、愛花や優花の表情を思い出しながら、マレーシアでの新しい生活やこれからの人生の夢を描いていました。

執筆方針

マレーシアに戻った直後、私はせきや鼻水が出て、身体がだるくなりました。

私はおばあちゃんのゴム園で蚊に4か所も刺されたので、デング熱を心配しました。

「佐藤さん、クリニックに行きましようか？」

「少し様子を見るよ」

「デング熱だったら、水分を多量に補給しないと」

私は生産課長のJohnさんからの助言に従い、工場でお茶をたくさん飲みました。

私は体調不良でも『愛優記』を書くのに熱中し、そして執筆方針について改めて考えてみました。

『愛優記』の中で私は、未だに本当の自分をさらけ出していません。私は人との対話が苦手で、無知ゆえに多くの失敗を繰り返し、不器用に恥ずかしい人生を生きてきました。それに厳格な人間ではなく、いつも楽な道を選んでしまう怠け者です。

そして、私は血圧が高く、運動不足であり、Jumの助けなしには食事の管理ができない、意志の弱い人間です。余り長生きはできないかもしれません。

愛花や優花を抱けない所へ行く前に、私は父親として悔いを残さないように『愛優記』を書いていきます。

その執筆に当たり、私は道理や礼儀に厳しい父を演じようと考えました。なぜならば、余り情けない父親では愛花や優花に対して教

育的効果が低くなると思ったからです。

いずれ、私は愛花や優花に有りのままの父をさらけ出すつもりですが、『愛優記』の中では二人の教育者として、厳格そうな父親をしばらく演じ続けるつもりです。

幸運にも私が長生きしたら、愛花や優花は私の実態を知ることになるでしょう。その時、二人は既に教育が行き届いた娘に育っていると信じています。

「お父さん、だらしないわよ」

と、逆に私が二人から教育を受けることになるでしょう。

余談ですが、『愛優記』の執筆と同時並行で、私は自分のずっけ話や恥ずかしい裏話を書いた『愛優記こぼれ話』を書き残すことにします。それを読んだ愛花や優花が、

「こんな頼りない父親じゃあ、自分たちがしっかりするしかない」
と思ってくれたら、私は本望です。

50年後

閑話休題。私は執筆方針を考えながら、10年後や50年後のことを夢想しました。

愛花や優花が『愛優記』を読むのは、おそらく小学校5年生（10歳）くらいでしょうか？

それを想定して、『愛優記』の完成予定を約9年半後の私の60歳定年退職日とします。

愛花や優花が10歳の時、『愛優記』を読んで礼儀を身に付けることができるでしょうか？

15歳の時、人生の夢を描き、学問を志すきっかけになるでしょうか？

20歳の時、人や物事を見抜く洞察力を鍛えられるでしょうか？

30歳の時、家族や組織の絆を守る知恵を学べるでしょうか？

40歳の時、権力、名誉、財力の野心で惑わされないでしょう

か？

50歳代の時、人生を賭ける使命が見つかるでしょうか？

60歳代の時、心身の健康を保ち、人生の夢を実現できるでしょうか？

70歳代以降、私欲を捨て、社会に奉仕できるでしょうか？

どの年齢で読んでも教訓がある『愛優記』を書き残したいものですが、私の知力や筆力が足りません。私はこれから精進するつもりです。

10年後、『愛優記』が未完に終わらず、私も愛花も優花も賢く成長しているといいですね。

愛花や優花が成人するまでに『愛優記』などによって知恵や勇気を与えられたら、私の親としての使命は完結します。そして成人した後も、『愛優記』が生き方の参考になれば幸いです。

愛花や優花が今の私と同じ50歳になった時、父に対して何を思うのでしょうか？

冷淡な人々や組織を相手に、50年間生き続けることは楽なことではありません。『愛優記』が苦しい人生の中で役に立ち、それを書いた父に感謝してくれるでしょうか？

50年後、私の墓石に花が飾られていたら、それは私が親としての使命を果たした証です。

私はその献花を観賞しながら、

(よく頑張ったね)

と愛花や優花を褒めてやりたいと思います。

そこには老いたJumもいますね。優花はJumの身体を支え、愛花は青森りんごや栗どら焼きや柿ピーを墓前に供えてくれますか？もしかしたら、他に家族がいるかもしれませんね。

私はいつも愛花や優花のそばにいて、二人のそれぞれの夢を応援し、元気に暮らしている様子を見守っています。家族の笑い声を聞くのが私の幸せですが、もしも悲しかったら、我慢せずに泣いてください。父は人生が甘くないことを知っています。だから、『愛優

記』を書くのです。

愛花と優花の幸せを見届けるまで、父は安らかに眠ることができません。

J u mと結婚して間もなく3年ですが、J u mと語り合うだけでも幸せなのに、双子の娘たちに恵まれ、私は最も幸運な男になりました。それはJ u mのお陰です。ありがとうございます。

私は頼りない父親ですが、J u mのために、そして愛花や優花のために、残りの人生を賭けて生きてゆきます。

（第二章 誕生 完）

第三章 家族？雪

桜吹雪

車は母校とは反対方向に交差点を右折し、岩木川沿いを弘前市内方面に向かっていく。

市内に行けば弘前城や五重の塔があるが、この季節は桜の花がないので見応えがない。

（愛ちゃん、優ちゃん、弘前城の桜は日本一、いや世界一綺麗だぞ）弘前城と桜を背景にして、きもの姿の親子で写真を撮るのが俺の夢だったが、その夢も他の全ての夢も10年前に散ってしまった。俺と娘たちとの夢は二度と咲くことはない。

俺は視線を車外に向けて涙が落ちるのをこらえた。

「アライナカ（何ですか）？」

優花が車の外を指差した。

「あっ！雪だわ。It's snow」

とさくらが答えた。

故郷に粉雪が舞い始めた。

（桜の代わりに粉雪。神様の粋なお計らいですか？）

「サービスじゃ」

神様は俺の問いに直ぐにお答えになる。「全てをお見通し」は本当らしい。

「It's snow like falling cherry blossoms」

とさくらが桜吹雪のような雪と説明した。

「Snow、Snow！ユキ、ユキ」

と優花がはしゃいでいる。

「来月になれば雪が1mほど積もるよ。この季節は親父が千葉に出稼ぎに出ていたね」

と春男が言った。

「親子が離ればなれで寂しかったでしょう？」

とさくらが応えた。

「生活のためだから仕方ないよ」

愛花は何も言わないが、首を左右に振って雪に興味を示している。

（お父さんはこんな寒い所で育ったのか）

とも思っているのだろうか？

俺は愛花の心を知りたい。病んだ心を癒してあげたい。

もしも俺が生きていれば、

「愛ちゃん、お父さんに何でも話してごらん」

と、一緒に散歩しながら愛ちゃんの話し相手になれた。

俺は孤独な愛花が可哀そうでならない。俺の人生と同じじゃないか。

（愛ちゃん、独りじゃないよ、優ちゃんもお母さんもいる。今はお父さんもいるよ）

灰色の空の津軽は、これから銀世界の冷たく厳しい冬を迎える。

愛花は人生の厳しい冬をお父さん不在でも乗り越えて行けるのだろうか？

（神様、愛花を助けてください）

「…」

ご返事は無かった。

家族の絆

車の行き先は弘前市に隣接する藤崎町の特別養護老人ホーム『さんふじ』だった。

オッチャ（親父）は生きているのだろうか？

俺は墓の中でオッチャに会っていない。

オッチャは俺より先に天国に行っているかもしれない。だとすれば老人ホームでは禁酒だったし、久しぶりの酒に天国で歌えや踊れ

やのドンチャン騒ぎをしていることだろう。オッチャのしわくちやの笑顔が俺の脳裏に浮かぶ。

オッチャは久しぶりに会ったオカチャ（母）とうまくやっているのだろうか？

酒を飲み過ぎて、オカチャをほったらかしにしているかもしれない。

神様は「天国は：ねえちゃんも綺麗」と言っていたが、俺も酔った気分で興奮してきた。

おっと！余計な想像をする前にオッチャの所在を確認するのが先である。

それと10年前、俺はオッチャに孫を抱かせる約束をして、それが最後の親孝行になると予感したが、果たしてオッチャは愛花や優花を抱いたのだろうか？

家族やさくらはホームを訪れ、『翌檜』あすなろという名の部屋に入った。俺もそれに続いた。

想像に反して、オッチャはベッドで寝ていた。

俺はオッチャがまだ人の世の地獄にいたことが気の毒に思う。

（オッチャ、天国に行って俺と酒盛りするべ）

と俺はオッチャを誘ったが、オッチャは何も応えない。

10年前、痴呆症で全盲のオッチャは、俺の問いに一言だけ返事をする事ができた。今は話が全くできない様子である。

愛花がオッチャのベッドの横に寄り添って、両手でオッチャの右手を持って手のひらを見つめた。そしてその手を握って、今度は自分のほっぺたをオッチャの右手の指にくっつけた。

優花がベッドの反対側に行って、同じように左の手のひらを見て、ほっぺたをオッチャの左手の指にくっつけた。

これはいったい、何の儀式だ？

Jumはオッチャの肩や腕をさすり、顔をオッチャの耳元に近づけ、

「コンニチワ！ワタシワJumデス」

と大きな声で挨拶した。

そしてオッチャの右腕に触って、

「コレガ愛花デス」

オッチャの左腕に触って、

「コレガ優花デス」

と言って、娘たちを紹介した。

きっと、母子でリハーサルをしてきたのだろう。

俺が『愛優記』の中で書いた「おじいさんの表情や手の感触や人生の軌跡から、人が産まれ、生き、死ぬ、ということの意味を感じてほしい：そして、家族の絆を再び結びたい」という内容をJumは覚えているに違いない。それに石川啄木の歌を知っているのだろうか？

Jumは母親として強く逞しく成長している。

(Jumさん、ありがとう)

俺は「人生最良の選択」が「桜のように美しい」Jumを選んだことだと再認識した。

(愛ちゃん、優ちゃん、お母さんを困らせないで、お母さんを守ってくれ！)

俺の涙が部屋の床に落ちた。

オッチャの手を握って、ほっぺたをくっつけてくれた愛花がいじめをするなんて、俺には信じられない。神様は愛花の名前も知らなかったし、誰かと間違えたのかもしれない。

「神は絶対じゃ」

と神様がそれを否定された。

さくらが身をかがめて、俺の涙で濡れた床をちり紙で拭いた。

あれ！俺の涙は人に見えるのか？

俺は愛花とつながる手掛りを得て、家族の絆を10年ぶりに結び直そうと思った。

一輪の夢を咲かせて、天国に行きたい。

第三章 家族？涙

涙

優花はオッチャの耳元に顔を移し、

「オジイサン、優花デス」

と日本語で言って、オッチャの顔を大きな瞳で覗き込んだ。

（オッチャ、メゴイ孫ダベ（可愛い孫でしょう））

オッチャの全盲の両目は閉じられたままだったが、口が少し動いたように見えた。

優花は顔も身体も少しふっくらとして、俺というより春男によく似ている。

10年前、俺はおしっこを引っかけられたが、優花はJumの血を継いで優しい娘に育った。優しいだけではなく、明るく愛くるしいから男の子が放っておかないだろう。

もしも俺が生まれ変わったら、優花と結婚したいなあ。でも、親子だからそれはまずいか。だとすれば、優花の子どもとして産まれてきたら最高に幸せかもしれない。優花のそばにいる人は皆が幸せになれる気がする。

（優花は凄いね）

優花と会えてオッチャもきつと喜んでいる。笑って天国に行けるよ。

（優ちゃん、ありがとう）

俺はこらえ切れずに床に再び涙を落とした。

それをさくらが見逃さず、

「愛ちゃん、優ちゃん、Your father is here
と言うと、優ちゃんは大きな瞳を見開いて、

「さくらさん、What do you say now？」

と聞き返し、『あすなろ翌檜』の部屋の中を見渡した。

部屋の中にはオッチャ以外に2人のご老人がベッドで休んでいる。
(優ちゃん、そっちはお父さんじゃないぞ)

「ほら、ここを見て」

とさくらが指差すと、床が濡れていた。

家族の視線がそこに集中し、優ちゃんがタイ語で、

「アライナカ(何ですか)?」

と言って不思議そうな顔をした。そして、ニコツと表情を変えた。

オッチャの右手を握っていた愛花がそっと手を離し、その濡れた床に近づき、右手の人差指で俺の涙に触った。

そして、人差指を自分の目に近づけて、

「お父さん」

と小さな声でつぶやいた。

それは俺が墓で聞いた声である。

愛花は記憶にないはずの俺のことをお父さんと呼んでくれた。

(愛ちゃん、ありがとう)

俺が愛花と最後に別れたのは、確かバンコクの日本大使館にパスポートの申請をした次の日だった。ホテルからバンコク空港に向かう途中、Komさんが運転する車の助手席で、俺は初め優花を抱いていた。優花は落ち着いていて、そのうち眠った。

「泰ちゃん、You want to hold 愛ちゃん?」

Jumは別れの前に、俺に愛花を抱いてほしかったようだ。

俺は優花をJumに渡し、そしておばあちゃんから愛花を受け取って抱いた。

「愛ちゃん、愛ちゃん」

と俺は泣かれないように小さい声で呼びかけた。

まだ生後5ヶ月に満たない愛花は、いつものように身体をそわそわ動かした。俺は愛花が動くたびに抱き方を変え、愛花に逆らわないように、そして泣かれないように、

「ハイ、ハイ」

と愛花の機嫌を取りながら、恐る恐る愛花を抱いていた。

十数分間、俺が抱いても愛花は泣くことなく、やがて俺の腕の中に静かに収まった。

俺は初めて愛花と仲良くなれ、お父さんとして認めてもらえたと感じた。

あれから10年が過ぎたが、愛花が俺のことを覚えているはずはない。

今、愛花の心の中にいるお父さんはどんな人物だろうか？

愛花が『愛優記』を読んだとすれば、厳格で真面目腐った、幻想の俺かもしれない。

J u mは俺のことを娘たちに何と伝えているのだろうか？

逃がした魚は大きい。おしゃべりのJ u mは俺を巨大魚として粉飾していると思う。

俺を父親として思いっきり持ち上げて、

「優しく、賢く、楽しく、とってもハンサムなお父さん」

と、「桜のように美しい」人は涙を流して娘たちに伝えていることだろう。

風

「泰ちゃんの涙よ」

とさくらが断言した。

「泰ちゃん、Y o u a r e t h e r e ? 」

とJ u mが両腕を前に伸ばして俺に近づいて来たが、俺の身体を通り抜けて行った。

(J u mさん、I ' m h e r e . h e r e . h e r e)

と俺は何度も返事したが、やはり俺の声は人には聞こえない。

「兄貴はいつも家族を見守っているよ」

と春男が言って、

「死ぬ前の晩、兄貴は死んだ後の娘たちが心配と言っていたよ。今も心配で近くにいると思う」

と皆を落ち着かせた。

優花がJumの身体に寄り添って、タイ語で何かを言っている。
するとJumが、

「Yes, お父さんalways is with us」

と答え、指で目頭を押さえた。

(ご免よ)

俺は歌詞のように風や鳥になってお前たちのそばにいるわけではない。実際、俺は10年間もお前たちを見ていなかった。そして、20日後には遠い天国で過ごそうと思っている。

神様や裁判官たちは俺を10年間も審議しやがって、仕事が怠慢すぎる。せめて数年で審判を下すように行政改革をしてもらわないと困る。人の身になってほしいものだ。

(失礼しました。神様、愚か者の独り言です)

「気持ちには分かる」

俺もせめて娘たちが物心つく頃までは家族を見守っていたかった。俺は20日間しか家族と一緒にいられないと思うと寂しい。でも神様に逆らうことはできないし、短い期間だけでも家族を見守って、そして愛花を改心させることにする。

しばらくして、家族はオッチャに別れを告げ、老人ホーム『さんふじ』を離れた。

(オッチャ、もう頑張らネステもいいんだよ。天国で酒用意してお
グガらな)

第三章 家族？ 仏壇

座右の銘

雪はやみ、太陽が顔を出している。

次に家族が向かった先は、弘前市内の寺院が密集する禅林街にある『陽光院』である。

そこで俺が供養されているに違いない。

5年前、いや15年前、院の建物を新築するに当たり、俺も檀家として給与3ヶ月分程度を納めた。

院内の二階にある佐藤家の仏壇の中には、オド（祖父）、アバ（祖母）、オカチャ（母）、俺の4人分の何かが収められている。その何かが魂なのか、お札なのか、信心が足りない俺にはよく分からない。とにかく、そこで和尚さんが死者を供養してくれている。

山上和尚さんは俺が東目屋中学校に通っていた時の担任の恩師だが、教師を退職し、曹洞宗の僧侶として家業を継いだ。今は息子さんが後を継いでいるはずである。

和尚さんは中学校最後の成績通信簿の中で、

『われ以外みなわが師』

という言葉俺に与えてくださった。

それは俺の生涯の座右の銘になった。有り難い教えであり、皆から学び、皆を大切にすることが人の道である、と俺はそう考えて人生を全うした。何度もうけはしたけれども…。

そういえば、俺は『愛優記』の中でそれを書いただろうか？

俺にはうまいものをあとに残す癖があり、それを書いていなかったかもしれない。

だから愛花は「いじめて皆が迷惑しておる」ということになっているのだろうか？

推理としては幼稚で短絡的だが、山上和尚さんの教えを俺から娘

たちに継がせなければ、俺の一生の悔いになる、ということは確かである。

そうか、神様がお与えになられた試験とは、このことだったのかもしれない。

リーン、リーン、リーン。

春男が鈴^{りん}を打ち鳴らした。

「愛ちゃん、優ちゃん、Please do like me」

さくらが畳の上で正座の仕方を愛花と優花に教えている。

二人はピンクと赤の靴下をそれぞれ履いているが、小さい足が可愛い。

「お父さん、サムイデスカ？」

とJumが仏壇に向かって俺に話しかけている。

俺はJumの隣にいるが、足が無いから正座はできないし、靴下も履いていない。

俺はJumの耳元で、

(ちょっと寒いから、Jumさんにくつついちゃうよ)

と言ってJumに身体を寄せて、昔の結婚披露宴の時のように彼女の背中に右手を当てた。

俺は目を閉じて、Jumの温もりや愛情を指に感じた。

おっ！息子が起きた。そうか、まだ元気だったのか。

でも、ここではまずいぞ。俺は興奮を鎮めるために、

(ナムアミダブツ)

と念仏を唱えた。

曹洞宗の念仏はこれでよかったのか？

とにかく念仏の効果で何とか煩惱を鎮め、俺は仏壇の中を覗き込んだ。

オドもアバもオカチャもない。20日後には天国で、軽くゆでた山菜やきのこの昆布煮やナス漬を用意して、俺を歓迎してくれると思う。

(ヨグ頑張ったな)

とオカチャは言ってくれるかな？

アバは、言うことを聞かずに逃げ回った悪童を許してくれるかな？

「りんごジュース飲むか？」

と春男が愛花に缶を差し出した。

「アリガトウゴザイマス」

と愛花が手を合わせておじぎをし、缶を受け取った。

（優ちゃんもほら）

「コップンカ（ありがとう）」

と優花もおじぎをして缶を受け取った。

優花が缶の蓋を開けてそれを飲むと、大きな瞳のびっくり顔になった。

（優ちゃん、おいしいですか？）

100%りんごジュースの甘さや酸味に驚いたのだろう。

Jumは俺の考えに従って、娘たちを薄味で育ててくれたに違いない。だから、優花は自然の甘さや酸味などの味覚の微妙なバランスを感じたのかもしれない。

「オイシイ」

と優花が言って微笑んだ。俺には生後5ヶ月の優花と全く同じ表情に見えた。

故郷の同級生の悟は世界一美味しいりんごを作っていると、娘たちに自慢したかったなあ。

あの時、マレーシアに戻らないでタイの田舎で娘たちと一緒にいれば、こんなことにはならなかった。神様に時間を巻き戻してもらうようにお願いしよう。

「それはできん相談じゃ」

と神様のお声が聞こえた。

仏壇

神様は俺の思想信条や慣習を認めてくれるのだろうか？

神様は全てを超越したお方だから、無知な人間の有様など気になさらないと思うが、もしかして神様から「邪道」だと言われるかもしれないので、ご機嫌を損ねないように何かおみやげを持って帰ろう。ん、その方が「邪道」か？ いや、おみやげくらいならいいと思う。

神様は「天国は酒がうまい」と言っていたが、工業用アルコールが入っている酒では「馬鹿者」と叱られそうだ。『溪流 大吟醸』を持ち帰ることにしよう。飲んだことはないけれども、うまいのかな？

「ねえちゃん綺麗」とも言っていたが、『シャネル5番』を2個用意しよう。1個は神様へのおみやげにして、神様に愛しい世話役がいたら喜ぶに違いない。もう1個は選りすぐりの「ねえちゃん」に俺がプレゼントする。

ついでにあの薬もおみやげ用と息子用として、こっそり買ってしまおう。

でも、そんなことがJumに知られたら、ここをちょん切られてしまう。タイではよくある話と、タイに住む友人たちから何度も聞かされた。人の世は本当に恐ろしい。

娘たちには申し訳ないが、俺は天国で道楽して待っていることにする。

ただし、受験に合格し、神様がお認めになれたらの話ではある。「和尚さんにお金を払ってくる」と言って、春男が席を立った。

春男は俺の貯金の一部を管理しているはずだから、それで葬式や法事や年間管理料などの支払いをして、檀家として仏壇を守っているのだろう。

もしも春男がいなくなったら、佐藤家はどうなるのだろうか？

田舎の親戚の皆さんは親切だから、Jumが必要な経費をタイから日本に送金してくれたら、何とかしてくれるかもしれない。

ただ、春男はそこまでJumと言葉も心も十分に通わせていると

は思えない。不器用な男である。

仮にうまく相談ができたとしても、J u mが俺の元に来たらそれでおしまいだ。

春男が戻ってきて、先行き不透明な佐藤家の仏壇の扉が閉ざされた。

愛花が閉ざされた仏壇に向かって手を合わせ、頭を垂れてお別れをしている。

家族は『陽光院』を出て、春男の車に乗り込んだ。

車は、既に収穫済みのりんごの木が並ぶアップルロードを岩木山
の方向に進んだ。

(第三章 家族 完)

第四章 遺言？文化

俺は2010年10月～12月に書いた『愛優記』の11話～16話（最終話）をJumに送信していない。その一部を思い出してみることにした。

タイ

2010年10月23日（土）、タイの家族はKomさんの運転でチョンブリ県からお寺を経由し、私が宿泊中のバンコクのグランドタワーホテルに到着しました。

トヨタHILAXのピックアップ車からおばあちゃん、Jum、愛花、優花、Jimさん夫妻および息子の総勢7人が降り、荷台からベビーカー2台、旅行用バック3個、ベビー用品、おみやげ用バナナなどが降ろされました。

私は前日の夕方にタイ出張のアユタヤからバンコクに移動し、週末の連休を家族と過ごすことにしました。が、まさか私を含めて8人の大家族になるとは想定外であり、私は財布の中身を覗きました。その日、8人で2部屋に泊まり、朝食付きの宿泊代は1泊4,355バーツ（12,020円）でした。何とか会社支給の海外出張手当ておよび宿泊手当ての総額以内に収まり、私はほっとしました。数日前、生後3ヶ月半の愛花および優花の体重が7.2kg前後だったとのことであり、二人は家族に大切に育てられ、健やかに成長していました。

私は眠たそうな優花を腕に抱えて、

「優ちゃん、優ちゃん、お父さんですよ」

と言いながら部屋に連れて行きました。

愛花は私が抱くとロビーで泣くかもしれないので、おばあちゃんが抱いて来ました。

夕方18…30頃、私たちはスクンビット通りソイ24の北京ダックのレストランに出かけ、愛花と優花をベビーカーに乗せた状態で、煮豚など5種類ほどの中国料理を食べました。

食事後、料金2,299バーツに対して、私は2,300バーツ(6,350円)を財布から取り出しました。つり銭は1バーツ(3円弱)でした。

すると店員はタイ語と英語とが混じった言葉で、

「今回は特別に100バーツ値引きする」

と言ったように聞こえました。最初、私には何のことだか、よく分かりませんでした。

「ティップ(Tip)をどうする？」

とのJumの言葉で、私はその意味に気づきました。

つまり、その100バーツをティップにしてほしいということのようでした。

元来、タイや中国や日本にはティップの習慣が無いはずですが、タイでは西洋化の大きな波が押し寄せて、ティップの習慣が徐々に浸透しています。そこで私は西洋人が集うレストランではつり銭をティップとして渡し、つり銭が無ければ渡さないようにしています。タイで店員がティップを要求することは、恥ずかしいことではないのでしょうか？

「ティップはタイの文化ではない。だから、それは不要」

と、私はJumに不機嫌に返事をしました。

私の対応に店員は、私をケチな客だと思ったに違いありません。

私はケチだと思われても何とも感じませんが、店員に対して寛容でなかった自分を後で恥ずかしく思いました。

私はタイの人々がお金や経済のために自国の文化をなおざりにすることに苛立ったのです。

私は3年前のJumとの結婚披露宴でタイの民族衣装を着用しましたが、最近では結婚式で民族衣装を着る人が少なくなり、タイ文化が崩壊し、私は寂しく感じます。

イタリアン

次の日の日曜日、私たちはスクンビット通りのエンポリアムデパートに出かけました。

Jimさんが洋服を買うために店内を見て廻りましたが、どれも高価で買う気になれなかったようです。

私たちはデパート内で飲料水やお茶や日用品を買い、鳥や魚の観賞のイベントを楽しみました。そして昼食時、イタリアンレストランでスパゲティーやピザなどを注文しました。

パンが柔らかく、パスタのゆで具合も味も上等でしたが、ピザが脂っこく、またメニューの写真と実際の料理との見た目が違って、私は残念に思いました。

料理7品およびジュース類で料金が約2,375バーツ(6,555円)であり、私は支払い金額2,400バーツのつり銭をチップとして店員に渡しました。

節約家のおばあちゃんは高い料金に驚き、

「次は一般のレストランでいい」と額にしわを寄せました。

一般庶民の昼食代の金額は一人50バーツ(140円)前後であり、今回の出張先のY社の社員食堂では昼食代が20バーツ(55円)でした。

それに比べればイタリアンレストランでの料金は破格であり、おばあちゃんを驚かすには十分な金額です。

夕方、Jimさん家族3人はチョンブリ県に帰りました。

私たちはホテルの部屋で夕食を取ることにし、3人分のライスやおかずを屋台や惣菜屋で買いました。費用はイタリアンレストランでの料金の15分の1以下であり、スパゲティーやピザに比べて野菜が豊富で栄養バランスの良い料理でした。

「美味しいほど毒がある」

と誰かが言っていました。が、料金や見た目や味に惑わされず、身体に良い料理を食べるのが賢い生き方です。

無分別な食事で寿命を縮めている人が多いのは何故でしょうか？
学校で真理や実生活に役立つ情報を教えていないことが要因の一つですが、国民が賢くなると国として何か不都合でもあるのでしょうか？

教育にお金をかけ、日本の文化を守り、健全な若者を育てなければ、日本人の心も懐具合も貧弱になると予想されます。私は国や教師や親が子どもたちに対して、心身の健康を維持する知恵や礼儀をきちんと教える必要があると思います。

愛花や優花は塩分控えめでねぎ入り納豆ご飯を食べて、健康に育ってください。

個性

10月27日までの4泊5日間、私は愛花と優花と一緒に過ごし、二人の健康状態を把握し、そして二人の性格や個性を知りました。

優花は愛想がよく、人との対話力が優れているようなので、教師に向いていると感じます。子どもたちを賢く育てる仕事はいかがですか？何かの店の接客や経営にも向いています。

愛花は人との対話が苦手で、我が道を独りで行くタイプに感じます。でも、愛花は身体を仰向けからうつ伏せ状態に回転させるなど、優花よりも運動神経が発達しています。宮里藍プロのようなゴルフアーを目指してみますか？あるいは料理人や農業もいいかもしれません。

今回、私は優花と仲良くなりましたが、愛花には泣かれることが多く、寂しさを感じました。

障害を持った赤ちゃんは泣きやまないと聞いたことがあり、私は心配になりました。ただ、そのことは絶対に口に出してはいけなさと私の内に秘めました。

次に再会した時、私は愛花と仲良くなり、愛花の笑顔をたくさん見たいと望みます。

私はバンコク空港でJumに促され、愛花と優花のほおにキスをしました。そして優花を抱いて涙ぐむJumを見て、私はもらい泣きしそうになりながら、タイの家族と別れました。

マレーシアに戻った次の日、NHK連続テレビ小説『てっぱん』のあかりが、

「うちが産まれてきた意味は何なのか、知りたい」

と祖母に話しかけていました。あかりの祖母は、

「そんなこと、人に聞くもんじゃない。自分で探していくもんじゃ」と返事していましたが、私なら次のように答えるかもしれません。

「子は家族を元氣にするために産まれてくる。でも、自立したら自由で人生を楽しみなさい」

愛花と優花が生まれ、家族は幸せを感じています。その幸福感のお返しとして、私たちは二人の心身の健康や夢の追求を応援します。二人で助け合い、それぞれの個性を活かして未来へ進んでください。

その遠い未来に私もいられたら、私はピンクのきものを着た愛花と一緒に弘前城の満開の桜を観てみたいのです。そこに赤いきものを着た優花がJumの手を引いて現れ、お団子を口いっぱいにはおぼる姿が私の脳裏に浮かびます。

将来、私の故郷は日本の文化や美しい自然や人とのつながりの大切さを愛花や優花に教え、あなたたちの心を癒してくれると思います。

桜を観たその夜、Jumの誕生日祝いとして、何をプレゼントしたらいいでしょうか？

愛花と優花は毎年母に花束を贈ると思いますが、花見の後だけに何か工夫が必要です。

Jumは泣くに違いないので、桜の刺しゅう入りハンカチがいいかもしれませんね。

第四章 遺言？ 日本人

暴力

2010年11月2日（火）、NHK『てっぱん』のあかりの兄が職場で争い事があったらしく、家族全員が揃った夕食時、

「課長を殴った」

と言いました。

「ちゃんと謝ったの？」

と問いただす母に、

「謝る必要なんかない」

と返事して、兄は自分の部屋に引っ込みました。

その時、父親はおろおろするだけで、次の日の朝食時も暴力について何も話しませんでした。

自分の息子が暴力という卑劣な手段で争い事を解決しようとしたことに対して、何も注意しない父親の存在意義とは何でしょうか？私は暴力も体罰も認めません。そして、父親の役割が生活費を稼ぐだけで十分とは思いません。親が子の暴力に対して何も言わないというのは、親が心の病気か、あるいは家族の崩壊がかなり進んでいるか、どちらかだと私は想像してしまいます。

正当防衛であれば私も理解できるので事情を聞くべきですが、黙っていたら分かりません。

昔、ドラマの『金八先生』が涙を流しながら何度か生徒を殴ったように、特別な事情もあるかもしれませんが、それは一生に何度もあることではないと思います。

私は『愛優記』11話でも書いたように、このドラマの「作者の資質や能力に一抹の不安」を感じます。私は作者が嘘や暴力に対して、余りにも無頓着すぎると思うからです。

悪質なテレビ番組が多いので、愛花や優花には厳選された番組以

外は見せたくありません。そして番組を見せる場合には、私が番組の問題点を二人に一々解説する必要があるようです。

しかし、問題があるとはいえ『てっぱん』は、家族の絆や人とのつながりの大切さを見事に演出し、私は毎回泣かされています。

それはこの作者がプロフェッショナルとして優秀だからだと思います。

10年後、愛花や優花がこの作家のドラマを視聴する時には、私の解説が要らないはずです。なぜならば、優秀な実力者は辛口の批評に耐えて、きっと成長するからです。

NHK

海外駐在7年半の間、私は一時帰国時を除いて民放のテレビ番組を視聴していません。ただし、松本清張原作のドラマは、弟が録画した番組を帰国時に視聴しています。

私がマレーシアで視聴する日本語の放送は『NHKワールドプレミアム』だけです。『ためしてガッテン』、『プロフェッショナル仕事の流儀』、『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』、『大河ドラマ』など、NHKは良質な教養娯楽番組をたくさん放送しています。

11月3日（水）、『プロジェクトJAPAN』のシリーズ番組として、第一回『未来をつくる君たちへ』が放送されました。今回は『翔ぶが如く』（司馬遼太郎著）に登場する西郷隆盛と大久保利通の生き方を取り上げ、テーマは『夢を志へ』でした。

私は会社の同僚の佐山君から『翔ぶが如く』のお下がり本を譲り受け、読み進めているところですが、大変難解な本です。愛花や優花は成人になってから読んだ方がいいかもしれません。

鹿児島県のある中学校を訪れた歴史学者の山内昌之氏は、30名近くの生徒たちの前で、

「西郷隆盛と大久保利通、どちらが好きですか？」

と質問しました。

ほとんどの生徒は西郷が好きで、大久保を好きな生徒は2名だけでした。その二人の生徒は大久保のことを次のように評価しました。

「鹿児島のことだけじゃなく、国全体のことを考えた」

「外国からいろいろなことを学び、それらを取り入れた」

私は「情の人」西郷が大好きですが、「理の人」大久保も好きです。

大久保は「金銭には潔白で私財をなすことをせず、…公共事業に私財を投じ」た人であり、私は『翔ぶが如く』を読んで大久保の人間性や器の大きさを再認識しました。

日本の総理大臣をやらせるなら、西郷よりも大久保の方がいい仕事をしてくれると思います。

二人は近所同士の親友であり、どちらも義のため国のために私心を捨てて働いた同志です。

日本の夜明けと言われた明治維新の一番の功労者は西郷ですが、私は大久保も同等の働きをした大人物だと思います。

番組のテーマは『夢を志へ』でしたが、夢と志とは何が違うのでしょうか？

例えば、プロゴルファーや歌手やお金持ちになりたいというのは夢です。弁護士になりたいというのも夢ですが、弁護士になって多くの被害者や弱い立場の人を助けたいというのは志です。つまり、夢は私心ですが、志には人や社会のために尽くすという決意があるようです。

友人の藤川君の娘の10歳のさくらちゃんは、精神科の医師になって心を病んでいる人を助けたいという志を持っています。将来、愛花や優花も彼女に学んで、志について考えてみてください。

私の子どもの頃の夢は、「新しい家を建てて、家族が一緒に暮らす」ことでした。志は無かったわけではありませんが、自分のことで精一杯で何もできていない自分を恥ずかしく思います。

でも今週、会社の同僚で1歳上の飯田さんが日本国から黄綬褒章

を受賞したとの連絡を受け、私たちの仕事が社会に貢献していることを再認識し、私は少し自信になりました。

さて、番組に参加した中学生たちは山内氏の話を聴き、そしていろいろな人にインタビューする中で、大久保を見直し、彼を好きになったようです。そして西郷や大久保のように志を持った人間になりたいと思ったことでしょう。教育的効果が十分にあったと思います。

「西郷さんや大久保さんは社会のために何をしたの？」

と将来、愛花や優花が私に問うことがあるでしょうか？

寿命が尽きない限り、私はそれを楽しみに待っています。

その時、愛花や優花が西郷や大久保の生き様を学んで、自分の考え方や生き方の参考にしてほしいと願います。それに人生のパートナー選びの参考にもなるかもしれません。

私は山内氏の心に響く講義を聴いて、NHK受信料を払っても惜しくないと思いました。

本当は海外駐在なので受信料を払わなくてもいいのでしょうか？

日本人

ところで中国の史書『隋書倭国伝』には、「日本人は、とても物静かで、争い事も少なく、盗みもしない。性質は素直で雅風である」と記されているそうです。そして日本に初めてキリスト教を伝えた宣教師のフランシスコ・ザビエルは、「日本人は慎み深く、才能があり、知識欲が旺盛で、道理に従い、優れた素質がある。盗みの悪習を憎む」と称賛しました。

ところが最近の日本では、嘘や暴力や不正が横行し、家族や学級が崩壊し、人と人とのつながりが薄れ、雇用が奪われ、夢や希望を持てず、多くの人々が身も心も病んでいます。

世界に誇れる日本の文化や美德が失われ、私はとても残念に思います。

いつから日本は変質してしまったのでしょうか？

先週、NHKで『無縁（援）社会』をテーマに、孤独死、家族崩壊、失業、貧困などについての討論が行われましたが、解決の糸口が見つからず、私は日本の夜明けが遠いと感じました。

生きることが苦しく、明りが見えない時代であっても、愛花や優花は日本人として「道理に従い」、「争い事」を円満に収め、「素直で雅風で」「慎み深く」生きてほしいと願います。

「知識欲が旺盛」で志を持った人にこそ、幸せが近寄ってくると思います。

しかし、親ができていないことを子に求めても説得力がありません。愛花や優花が夢や志について考える頃には、私も社会人として成長していないと恥ずかしいですね。

あなたたちは私の教育者として産まれてきたようです。

11月3日（水）夜中、Jumが愛花や優花の数枚の写真を私に送信してくれました。

優花は大きく目を見開いて、いつものように奇抜なびっくり顔をしています。

一方、不機嫌になりがちな愛花は、口を小さく開けて珍しく笑っています。これなら愛花も日本人として「素直で雅風」に生きてゆける、と私は安心して眠りました。

第四章 遺言？ 遺言書

離乳食

2010年11月10日（水）、生後4か月が経過し、病院で定期検診が行われ、その時の愛花と優花との身体測定の結果は以下の通りでした。

愛花の体重7564g、身長65.5cm

優花の体重7826g、身長62.5cm

愛花はより身長が伸び、優花はより太くなりました。

愛花はよく泣き、身体を活発に動かしますが、優花はよく寝て、いつも落ち着いています。それぞれの行動の違いが身体の成長にも反映しています。

私はJumの大好物のバナナについて、

「いつからバナナを与えたらよいか、医師に相談してね」とJumに事前に伝えましたが、

「バナナを与えると甘いので、他の食べ物を受け付けなくなる。

しばらくは控えた方がよい」

と医師は答え、そして別の離乳食を始めてよいと言ったそうです。

医師の回答は私がインターネットで調べた内容と同じでした。

当初、Jumはバナナが離乳食として最適だと思っていたようですが、その考えを改めました。

次の日、Jumは愛花と優花に初めて離乳食を与えました。玉子の黄身を混ぜた、柔らかいライスです。最初、愛花も優花もそれを拒みましたが、おなかが空いてきたためか、最後には少し飲み込んだとのことでした。

その日から毎朝、Jumはライスに豆類やカボチャなどを混ぜた離乳食を二人に与えています。

私は糖分および塩分を抑えるようにJumに繰り返し伝えました。

そして愛花や優花がいろいろな離乳食に慣れてきたら、いずれはバナナを与えたらよいと思っています。

私は優花が初めてバナナを食べた時のニコツとした表情を想像しています。

タイの人々は、甘い、辛い、しょっぱい、酸っぱいなどのほつきりとした味覚を好みますが、愛花や優花は薄味を嗜好した方が健康によいと考えます。

私は塩分を摂り過ぎて、40歳代半ばから高血圧になりました。このままでは長生きができません。

現在、食生活を改善中ですが、単身赴任生活では食事の管理が困難です。私にはJumの助けが必要であり、私はJumが愛花と優花を連れてマレーシアに戻る日を待っています。

I & YOU

愛花や優花がマレーシアに来るためにはパスポートが必要です。

二人のタイ人パスポートについては既に申請し、受け取りましたが、そのパスポートではマレーシア滞在がビザ無しで1ヶ月以内に制限されます。

一方、日本人パスポートであれば、ビザ無しでも3ヶ月間滞在することが出来ます。

11月17日(水)、私は日本パスポートの申請書類を揃えるために帰国し、25日に日本からタイに渡り、バンコクの日本大使館にパスポートを申請しました。

後日、大使館から優花のローマ字書きについて、

「YUUKA ではなく、YUKAの間違いではないですか？」との電話連絡を受けました。

でも、それは間違いではありません。

一方、愛花のローマ字書きは「AIKA」ですが、外国人は「エイカ」と発音します。「EYEKA」なら「アイカ」と発音すると

思いますが、それは適切ではありません。

本当は愛が「I」、優が「YOU」なら素敵だったでしょうか？申請した夜、私は友人やタイの家族と一緒にスクンビット通りソイ33のレストランでピザやスパゲティを食べました。

70歳になる友人の広田さんは優花を抱いて、

「孫がほしいなあ。自分で作っちゃうか」

と自分の元気をアピールしましたが、

「自分で作っちゃったら孫じゃないよ」

と私の同僚の佐山君からとがめられました。

友人たちは愛花も優花も父親に似ていると言います。確かに二人のまゆ毛がくっきり生えてきて、私に似てきたように見えます。

その日、泣き虫でそわそわしがちな愛花の機嫌がよく、私は嬉しくて、ビールやピザを格別に美味しく頂きました。

11月27日の夕方、私はバンコクからクアラルンプールに戻りました。

次の日、NHK大河ドラマ『龍馬伝』の最終回で坂本龍馬が刺客に暗殺されました。

龍馬は殺される直前、

「子どもがこの国に産まれて来て、本当に良かったという国を作りたい」

と中岡慎太郎に彼の志を語っていました。優しい人ですね。

そして、夢の中で龍馬は、

「I love you」

という英語を妻のお龍に教えていました。彼は妻を愛していたのですね。

私はI（愛）love（愛）you（優）と当て字を思い浮かべて、私が師範とする龍馬の死に泣きました。

ラブレター

12月3日（金）、NHK『てっぱん』のあかりの実母が遺した手紙の封が切られました。家出中の娘が子を授かり、死の直前に何を書き遺したのでしょうか？

遺言書と思われたその手紙には、

『あかりと、お母ちゃんのお好み焼きをたべたい』

と、たった一行の短い文が書かれていました。

産まれた我が子連れて、「お母ちゃん」の元へ帰りたいかったですね。

その手紙は母から子への、そして子から母へのラブレターだと、私は感じました。

母を想う娘の心情が切なく、そして私の母の顔が浮かび、私は涙をこらえ切れませんでした。

将来、愛花や優花は母や父にラブレターを書いてくれるでしょうか？

子の教育には退屈な長文やくだい説教が要らないのかもしれないかもしれませんが。私は『愛優記』を書き遺すことにどれほどの意味があるのかを考えさせられました。

そして、私が愛花や優花に遺したい文は、

（愛花と優花と、そしておしゃべりのJumと、どら焼きを食べて夢を語り合いたい）

それだけで十分ではないかと思いました。

しかし、15分間の番組が終了した時、私は思い直しました。

（人生はそんなに甘くない）

『泥流地帯』（三浦綾子著）を読んで私は、懸命に生きていても自然や社会は家も家族も恋も夢も全てを押し流してしまうことがあるということを学びました。

いざという時のために親が子に伝えておくべきことがあるはずであり、それを怠れば、愛花や優花は世の中の泥水に流されて溺れてしまう、と私は恐れます。

それに私は、龍馬が作りたかった国がいまだに実現していないよ

うに感じます。

幸いにも愛花や優花が心身ともに健やかに育ってくれたら、私は『愛優記』を無理に二人に読ませる必要がないと思っています。しかし、J u mや家族の手に負えない何か起きた時、それが役に立つことがあるかもしれません。

それに、私に残された時間が長いとは限りません。仕事よりも何よりも私にとって、人生最高の宝は愛花や優花や家族であったということを、私は残りの人生や『愛優記』にしっかりと刻みつけたいのです。

それはラブレターとしては長すぎますが、父の遺言書でもあります。

第四章 遺言？ 審判

パスポート

2010年12月7日（火）、愛花と優花が産まれて5ヶ月があとという間に過ぎました。

この日、Jumは愛花と優花を連れて、バンコクの日本大使館に行きました。二人の日本人パスポートを受け取るためです。

バンコクから日帰りで戻ったJumは、二人のパスポートを『skype』という無料ビデオ電話で私に見せてくれました。

先月、その『skype』を藤川君から教わり、Jumと毎晩のように交信しています。

最初、私はビデオ電話が無料だとは信じられませんでした。どうやら本当のようです。

それを知ってから、私の国際電話の利用時間が大幅に減りました。月に数万円の経費削減になっているかもしれません。私は無知だと大損する時代になったと思いました。

さて、愛花や優花のパスポートを受領し、二人をマレーシアに連れてくる準備が整いました。

私はJumと相談し、来年早々の1月10日出発の航空券を予約しました。

育児の世話役として、Jumの姉のPuさんも同伴します。Puさんは夫と子供3人との5人家族であり、自宅近くの会社に勤めています。退社してマレーシアに来ることになりました。

Puさんがマレーシア滞在中、夫や夫の親戚の方が子どもたちの面倒をみるということです。

家族に助けられて、愛花も優花もJumも私も幸せ者です。

12月9日（木）、マレーシアの格安航空会社のエア・アジアXが羽田ークアラルンプール線の就航を始めました。来年、この航空

便で日本へ行って、私の父であるおじいさんに愛花や優花を抱かせるつもりです。

最後の親孝行になるかもしれません。間に合ってほしいと祈っています。

結婚記念日

2010年12月11日(土)、愛花や優花との新しい生活まで残りひと月となりましたが、この日が私とJum との丸3年になる結婚記念日です。

私はJumに、

「You are very good wife for me.
And you are very good mother
for our daughter」

とメールを送信し、結婚記念として金製品をプレゼントすると伝えました。そして、私には電動カミソ리를プレゼントしてほしいと頼みました。

Jumからは次のメールが返信されました。

「YOU ARE VERY GOOD HUSBAND FOR
ME!!!! I WOULD LIKE TO TAKE C
ARE FOR YOU FOREVER. THANK YOU
FOR EVERYTHING」

いつもは英語の小文字を使うのに全て大文字であり、私はJumの嬉しさを感じました。一部単語の使い方が間違っていますが、意味が伝わるので問題はありません。

Jumは優花を抱きながら、『skype』のビデオ画面の向こうで涙を拭いていました。優花は笑ったり、ぐずったり、あっちこっちを見たり、無邪気に表情を変えていました。

寝る直前、私は3年前を振り返り、当時の回想録を読み返しました。

2007年12月11日午前、タイ国チョンブリ県のマンガー畑が広がる静かな田舎町で、私は人生初めての結婚式を執り行った。花嫁の実家へ9人のお坊さんが招かれ、私はタイの伝統的な儀式に身をゆだねた。

意味もわからず、お坊さん達から頭へ水を掛けられ、私は薄毛が目立つのではないかと少し気になった。又、正座で脚がしびれ、花嫁に支えられて立ち上がる場面が何度もあり、若い花嫁との歳の差を実感した。周囲からは温かい笑みが漏れた。

一時間余りで儀式が終わると、その場でまずは男どもが食事を始めた。儀式の準備は全て女たちが整えたが、食べるときだけは男どもが優先されるようだ。タイの女性は男どもと違って、健気によく働くと思った。

花嫁の実家の畑から採れたマンガーをデザートとして、私の弟の春男と故郷の友人の三上君との三人で美味しく頂いた。

定年退職後、妻とともに果物農場を経営するのも悪くないか、と思ったりもした。

午後、花嫁の実家を離れ、チョンブリ県シラチャ市のザ・シティーホテルへと向かった。そこがタイ 国内、日本、韓国、マレーシアからのゲストの方々を迎える、結婚披露宴の会場だった。

宴会の予定時刻が近づくと、私は午前中の地味な衣装に替えて、伝統的な民族衣装に着替えた。当初、スーツとウェディングドレスとが彼女の計画だったが、私はあえて、

「それでは面白くない」と異議をとなえた。

結局、私が民族衣装で彼女がウェディングドレスという不調和な取り合わせになったが、二人が並ぶと赤と白とで日本国旗を連想させ、自分としては気に入った。

私は憧れのタイガーウッズを真似て、勝負の時には情熱色の赤で決めることにしている。

宴会の内容や引き出物については全て彼女に任せていたが、直前になっていろいろ聞いてみると、

（ヤバイ）

と思った。

進行役はいないし、プログラムもない。単なる食事会だった。それに日本人ゲストへの引き出物として、箸とタオルだけでは粗末すぎると思った。

急遽前日、タイでは定番の『ジムトンプソン』のシルク製品を引き出物の追加として用意した。又、宴会の進行役として私が臨機応変に対応するしかないと覚悟を決めた。

ゲストの迎えや席への案内を済ませた後、プログラムが無いまま、私からのお礼の挨拶で宴会が始まった。

花嫁にもタイ語で挨拶するように促したが、恥ずかしがって遠慮されてしまった。

私はその後の進行に苦慮しながら、まずはゲストの方々へタイ食と日本食とを組み合わせたバイキング形式の食事を勧めた。その上で私たちは、各テーブルへの挨拶やゲストとの写真撮影に駆け廻った。

その後、引き出物を一人ひとりに手渡したり、ビールや水割りを勧めたりした。そして私たち二人は新郎新婦用の席を確保できずに、食事はもちろん、着席の機会さえも完全に失った。

花婿がそんなにせわしく動き廻ることになるとは、全く想定外だった。

私以上に縦横無尽に走り回っていたのが、花嫁の親戚の子供たちだった。制御不能の10人ほどの子供たちを見かねた故郷の三上君が、ホテルの近くの『セブンイレブン』から玩具やお絵描きなどを買ってきて、子供たちに与えてくれた。

「あの親切な人は誰？」

と花嫁の家族の中で話題となり、

「故郷の友だちだ。私の故郷には親切な人がたくさん住んでいる」

と私は鼻高々に答えた。

私は良き友人に恵まれたものである。私も彼のように無償の思いやりを与られる人間になりたい。

宴もたけなわを過ぎ、進行も手詰まりで、

「そろそろ帰る」

というゲストもいた。

そこで宴会のまとめを思案していたら、ちょうどよいタイミングでウェディングケーキが運ばれてきた。

二人でナイフを持ち、私はケーキの端っこへナイフを浅く入れるつもりだったが、花嫁のリードでケーキが真二つにカットされた。遠慮深さとは別に大胆な面を持つ女性であると、その時に感じた。

その感じは後に、新婚生活の中でより鮮明になった。具体的な内容はここでは書けない。

宴会の最後に花嫁は、お礼のために勇気を振り絞ってマイクを握ってくれた。満面笑顔の中に今にも溢れそうな涙があるのを、私は見逃さなかった。

花嫁の挨拶が終わると、彼女は駆け寄って来た家族に囲まれて泣いた。私は彼女の背中に右手を当てながら、これからは妻の幸せを支えることが私の一番の仕事であると決意した。

結婚披露宴はどうにか無事に終わった。5人ほどの妻の家族が残り、その他のゲストの皆様は披露宴会場を後にした。

私はほっとして、ようやく椅子に腰かけたら、底抜けに腹が空いていた。

私は3年前の回想録を読み終え、

（明日、書き貯めた『愛優記』の原稿を翻訳者の萩原さんに送信しよう）

と考えながら床に入りました。

深い眠りの夢の中で、何か異変を感じた私は、

（愛ちゃん、愛ちゃん、優ちゃん、優ちゃん）

と呼びかけました。

（J u mさん、二人を頼んだよ）

（春男、娘が日本へ行ったら面倒みてくれよ）

（オツチャ、最後まで親不幸な息子でご免！）

12月12日（日）夜明け、クアラルンプールの街は多くの建物が崩壊し、あちらこちらで煙が立ちのぼり、消防車や救急車のサイレンが鳴り響いていました。

神の審判は家族の絆を引き裂き、私の夢を消し去りました。

（第四章 遺言 完）

第五章 幽霊？ 女

女湯

夕方、家族を乗せた車は岩木山麓の『いわき荘』に到着した。途中、道路が除雪され、人家の周りや屋根に雪がない所が目立ったが、そこは一面が銀白色の雪景色になっていた。

優花は車から降りると雪の中に入り、両手で雪を舞い上げている。愛花は雪を拾って、おにぎりを結んだ。そしてそれを優花に向かって投げつけた。

優花も雪玉を作って愛花に投げ、それが愛花の背中に命中した。愛花は振り返って笑顔を見せる。10年ぶりの愛花の笑顔であり、生後5ヶ月の頃よりも豊かな表情になっている。

優花も笑っているが彼女は10年前と表情が変わらない。

（愛ちゃん、優ちゃん、仲良く助け合って生きてゆけよ）

雪玉をぶつけ合う二人を見て、俺は自分が子どもの頃の情景を蘇らせた。

俺が雪玉を投げたら、たまたま通りすがりのおじさんの頭に命中し、

「コラー！誰だ」

と怒鳴られ、謝りもしないで俺は走って逃げた。

礼儀知らずの悪がきだったが、故郷は俺を遊ばせてくれ、寛容だった。

でも、故郷を出ると職場も社会も寛容ではなかった。怪我をするくらい硬い雪玉を投げつけられ、そして都会の冬に心も凍った。

俺は自分に負けて嘘や不正や裏切りを繰り返し、時には自己嫌悪に陥り、自律神経失調症やうつ病を患った。人は孤立すると正常ではいられなくなる。そして、故郷が無性に恋しくなる。

Jumは『いわき荘』を見て、13年前の楽しい記憶が蘇っただ

ろうか？

あれは夏。Jumは『いわき荘』で知らないおばさんから温泉の入り方を教えてもらい、お湯や人に心を癒されたみたいだった。温泉の前後、Jumは桃やメロンや岳キミ（とうもろこし）の甘さやうま味に驚き、瞳を大きく見開いた。今回もいろいろと楽しめるだろうか？

春男は受付で2つの部屋のキーを受け取ったが、女4人が一つの部屋に泊まるらしい。

「夜7時にJumさんの部屋で飯にしよう。それまで温泉に入ろうか」

と春男がさくらに伝え、キーを一つ渡した。

俺は春男と一緒に温泉に浸かることにした。

が、待てよ。家族水入らずの混浴も悪くない。客が少ないし、家族だけの時間が取れるのであれば、俺も女湯に入ろうか？

（女湯に入ってもよろしいですか？）

と俺は神様に尋ねてみた。

「家族だけならよいぞ」

なんとご寛大な神様であろう。俺も正式な信者になって、真面目に生きよう。いや、死のう。

「信者になりたいなら、別の試験を受けるがよい。合格すれば、裁判官や行政官にもなれるぞ」

また試験か。試験と聞いただけで俺は頭が痛くなる。

（今の試験が終わってから検討させて頂きます）

裁判官や行政官になって頭痛の種を増やすよりも、天国で平凡に暮らした方が楽でいい。

あっ！Jumと娘たちが浴衣姿で現れた。

女湯には他に誰もいないし、今がチャンスだ。

俺は女湯の湯船に浸かって家族を待った。もしも他の客が入って来たら、露天風呂の裏から男湯に回り込めばいい。

（♪上野発の夜行列車降りた時から ♪青森駅は雪の中 ♪北へ帰

る人の群れは誰も無口で…)

俺は『津軽海峡冬景色』を口ずさみながら、10年間で凝り固まった身体をほぐした。そして俺はJumの背中の温もりを思い返し、煩惱を蘇らせた。

浴室の扉がガラガラと開いた。

(Jumさん、久しぶり…)

あっ！ いけね。二十歳の女のおっぱいもあそこも丸見えだ。なんでさくらが先に来ちゃったんだ？

まずいぞ、これは犯罪だ。神様に叱られる。

あっ！ 息子がいきり立っている。大きいおっぱいを見て、煩惱に油が注がれた。

念仏もここでは場違いだし、こうも元気になると湯船から出るのが恥ずかしい。

あっ！ Jumが入ってきた。ちょん切られる！

俺は湯船から慌てて飛び出し、露天風呂の方から男湯に逃げた。

癒し

男湯には春男と数名の客がいた。

春男は露天風呂に浸かって、灯りに照らされた山の木々や積もった雪を眺めている。

何を考えているのだろうか？

何も考えないで自然と一体化するのも温泉の楽しみ方ではある。そして、温泉は地獄のような世の中で数少ない癒しの場でもある。

春男は10年前よりもかなり痩せ、小太りになった。兄弟だから痩せると俺に似ている。

今年58歳になって、いまだに独身で彼女もいないに違いない。

俺は結婚する前、独りの生活が寂しく、いつも空しさを感じた。

そして、毎晩のように女が欲しくて悶えた。俺が欲しかったのは女の裸体ではなく、愛である。

俺は時々、女を買い、女の柔らかい肌や絡み合いから偽りの愛を感じた。買って抱いた女に、

「I love you」

と言ったことも何度もあった。心から愛していたはずはないが、心は愛に飢えていた。

金や時間が足りなければ、女を想像し自慰を繰り返した。

苦しい人生の中では、ひと時であろうと癒しが必要である。しかし、そこに愛が無ければ、直ぐに癒しが空しさに変わる。

47歳で俺はタイ人のJumと結婚し、精神的にも肉体的にも解放され、ようやく待望の愛を得た。

(Jumさん、ありがとう)

俺は春男にも幸せになってほしいと願い、タイ女性を紹介しようとした。しかし、春男は、

「結婚するなら日本人。外人と結婚するくらいなら独身の方がましだ」

と聞く耳を持たなかった。

独身には自由があり、責任が軽く、楽に生きられる。それも人生の選択の一つである

だが、結婚という形にこだわる必要はないが、誰でも愛がほしいはずである。

男女の愛とは限らない。友情や家族愛や人類愛もある。猫を愛する人も多い。猫から愛されているとは限らないけれども…。

愛が無い人生は空しい。俺は孤独で空しく、辛く苦しい人生を長く過ごした。

春男は人生をどう考えているのだろうか？

春男は愛が無い生活に対する適応能力が俺よりも高いようだ。それは自己防衛システムの働きによって、愛に鈍感になるということかもしれない。敏感すぎて現実には愛が無ければ、人は生きてゆけないのかもしれない。だから俺はマレーシアの職場で、犬のアイチャンやアイチャンの息子のゴジラを5年近くも可愛がった。

俺が死んでもゴジラはあちらこちらに恋人がいたから心配しないが、去勢したアイチャンは俺がいなくなって寂しい思いをしたかもしれない。可哀そうに…。

愛に鈍感になっている春男が俺の娘たちを愛してくれているのは有り難い。

（春男、娘たちにりんごジュースを与えてくれて、ありがとう）
女湯の露天風呂から子どものはしゃぐ声が聞こえる。愛花と優花に違いない。

（愛ちゃん、優ちゃん、かぜを引かないで）

俺の故郷が愛花の心を少しずつ癒してくれている。

俺は娘たちの笑い声に安心してか、風呂場でうとうと眠ってしまった。気がつくと外は暗くなっていた。

J u mがいる部屋を覗くと、家族3人が既に床に入っている。

春男の部屋に入ると、春男とさくらがそれぞれ浴衣姿でビールを飲み交わしている。

「愛ちゃんは余りしゃべらないし、優ちゃんみたいに笑うこともないね」

「愛ちゃんは友達と喧嘩したみたい」

喧嘩？「いじめ」の原因が明らかになるかもしれない。

第五章 幽霊？ 欲情

子犬

「愛ちゃんはお父さんを知らないの？」

「ん、覚えていない。赤ちゃんの時にマレーシアで死んだの」

「へえー、タイの人じゃないの。マレーシア人？」

「お父さんは日本人よ。マレーシアでお仕事をしていたの」

「愛ちゃんと優ちゃんはタイにいるのに、お父さんはマレーシアにいたの？」

「そう」

「お父さんが子どもと一緒にいないのはよくないよ」

「どうして？」

「子犬はね、産まれて直ぐに親と離されると、精神が変になるの。だから、犬も人間も親子は一緒にいて、愛情を注がないといけないのよ」

「そうなんだ」

「一緒にいないのは愛情不足よ」

「…」

「愛情が足りなかった犬は、人に噛みつくんだから」

「私のお父さんは愛情があるよ」

「だったらどうして一緒にいなかったの？」

「お仕事だからしょうがないでしょ」

「子供より仕事が大事なんて変よ。愛情が一番大切なのよ」

「私のお父さんは誰よりも愛情があって優しい人よ！」

春男とさくらの会話を整理すると、愛花と友達との間に以上のやりとりがあり、愛花が友達の腕に噛みついて、驚いた友達が転んで怪我をした、ということらしい。

怪我をした友達を周りの子どもたちがかばって、愛花が孤立した。

その後、愛花の心が荒れて、

「馬鹿!」、「のろま!」、「あっち行け!」

と皆に意地悪に接するようになった。

愛花や優花が産まれてから5ヶ月間、俺は仕事を優先し、娘たちと一緒にいる時間が少なかった。そして、ひと月後に一緒に暮らせるはずだったのに俺は死んでしまった。

父親として深い愛情があれば、仕事を休んでも娘たちとずっと一緒に過ごす方法があったかもしれない。それに、タイにいれば死ぬこともなかった。

そうか、「愛情不足」の父親、と友達に言われて、愛花はショックを受けたのか。

それにしても愛花は、犬の真似をして噛みついたというのはジョークのセンスがある。

「愛ちゃんはお父さんが大好きなのよ」

とさくらが言った。

(愛ちゃん、ご免よ。お父さんは愛ちゃんが大好きだよ)

内もも

ビール瓶が3本空になって、春男もさくらも顔が赤い。

「酔ったみたい。部屋が回っている」

さくらの浴衣がめくれて餅のように白い内ももがちらりと見えた。その時、女湯で見たさくらのふくよかな乳房が俺の脳裏に浮かび、俺はさくらの浴衣の中を想像した。

春男は二十歳の色気たっぷりの女が内ももをちらつかせても平気でいられるのか?

平気なわけではないと思うが、自己防衛システムが働いているのかもしれない。

俺ならば酒でシステムが麻痺し、

「さくらちゃん、私は今、心が病んでいます。助けてください」

と懇願し、生つばをゴクンと飲んで、さくらの手を握る。

酒でほぐれたさくらは、ためらいつつも心と身体を開き、俺を優しく包み込む。シャンプーの甘い香りと柔らかな肌の感触と舌の絡み合いに二人は酔いしれ、やがて男がオアシスの園に足を踏み込む。そして、俺はさくらとともに初めはゆっくり、徐々に激しく、ついには天国に昇りつめる。

おっと！俺の煩惱が酔い気分で暴走している。

女への欲情は、愛の欲求だけではない。愛する人以外の女とのセックスを求めてしまう。

男の本能というべきか、それともどら焼きも食べたいがチーズケーキも食べたいということと同じことなのか、俺には解釈が難しい。感情の問題だから理性で考えてもかみ合わない。

確かなことは、息子の教育は俺の手に負えないということである。ただ、欲情があるからといって、品性を疑われても困る。それではほとんどの男は品性がないことになってしまう。Jumはそう思っている節がある。そうではなく、欲情を実行に移したか、それとも防衛システムで実行を回避したかによって、品性を判断するのが筋である。

結婚して約一年後、俺はJumに欲情について正直に告白したことがある。

「俺たちが3ヶ月以上離れて暮したら、俺は欲情を我慢できないかもしれない」

言葉では「3ヶ月」と言ったが、内心は1ヶ月、いや数週間である。もしも美人から誘惑されたら、数週間どころか一瞬にして理性は吹っ飛んでしまう。それが男であり、俺である。

その告白以来、Jumは俺が出張で外泊した時に気を揉んだに違いない。出張中は毎夜、Jumから必ず電話がかかってきた。

「泰ちゃん、What are you doing?」

とチェックされるので、俺はクラブに行くこともなく、大人しくホテルにいるしかなかった。

また俺を疑っているのかと思いつつ、それがJumの愛情表現だと割り切るしかなかった。

家族は、できることであればどちらかの故郷と一緒に暮らした方がいい。愛する女と一緒にいれば他の女を欲しくなることはないし、その程度の節度は俺にもある。しかし、離れて暮らしたら、男は防衛システムがいつか麻痺し、野生化してしまう。

それに愛花の友達が言ったように、親は子のそばにいて愛情を注ぐことが大切である。

でも、社会のシステムは家族と一緒に暮らすことをなかなか許してはくれない。運良く一緒に暮らせたとしても、仕事や受験や家事で忙しく、家族の心がばらばらになるリスクが高い。

10年前と今では社会のシステムや風潮が変わっただろうか？

「日本の夜明けが遠い」と俺は『愛優記』に書いたが、予測が外れていることを望む。もしも変わっていなかったら、日本人も家族も随分と苦労しているに違いない。

ただ、10年で故郷の風景や建物は少し変わったが、『いわき荘』の温泉は癒しの湯として何も変わっていなかった。それはそれで有り難いことである。

その癒しの湯において、俺はいつになく欲情が盛んである。3ヶ月どころか、10年もJumと離れていたのだから当然であり、心身の健康を祝いたいくらいである。健康とは言えないけれども…。

俺は手に負えない息子とともにJumに寄り添って寝るために、春男の部屋を出た。

その後、38歳差の春男とさくらとの間に何が起きたとしても、俺は驚かない。それは独身の二人の厳しい人生の中で、極上の癒しの思い出になるかもしれない。

しかし、さくらが俺の娘の愛花や優花だったら、俺は正気ではないられないはずである。相手がどんなに素晴らしい男であったとしても、嫁入り前の娘が身を許してはいけない。

大体、坂本龍馬や星の王子様のような男が今の世にいるわけがな

い。今の世とは10年前のことだが、人々の表情を見てみると、実際の今も10年前と変わっていない予感がする。

（愛ちゃん、優ちゃん、悪い男に騙されないで、心を見るんだぞ）

J u mと寄り添う前に、俺は愛花の寝顔を覗き込んだ。

（愛ちゃん、喧嘩したのか？ 噛みついたのはよくないけれども、お父さんをかばってくれてありがとう）

愛花は「お父さんは誰よりも愛情があって優しい人」と言ってくれた。それをJ u mから聞いたのか、それとも『愛優記』を読んで感じたのか、どちらにしても真実とは違うが俺は嬉しい。

（お父さんは愛ちゃんを愛しているよ。どこのお父さんにも負けていないぞ）

これは真実である。俺は愛花や優花のためなら自分の命も惜しくない。既にないけれども…。

俺は愛花の掛けふとんが濡れるのもかまわず、涙をぽとぽと落とした。

第五章 幽霊？ 平和

葉

薄暗い部屋で、愛花が突然目を開けた。

何かを察したのかと思い、俺は顔を引いて愛花を見守った。

愛花がふとんから手を出して起き上がる時、ふとんが濡れているのに気づいたようだ。愛花は上半身を完全に起こし、

「お父さん」

と小声で言って首を左右に動かし、部屋を見渡した。

（お父さんはここにいるよ）

愛花の隣には優花が寝て、優花の向こうにJumが寝ているが、二人とも気づいていない。

愛花は右手を開き、手のひらを上にして俺の目の前に差し出した。そこで俺は自分の指先で涙を拭き、それを愛花の手のひらに着けてやった。愛花は手のひらに着いた俺の涙を見て、

「お父さん、コンバンワ」

と手を合わせ、おじぎをした。

（愛ちゃん、こんばんは。愛ちゃんはちゃんと挨拶ができるいい子だね）

愛花はふとんから出て、俺の前を通ってトイレに行った。

愛花がトイレにいる間、さくらが部屋に戻ってきた。浴衣や髪の毛がなかったので極上の出来事はなかったかもしれない。春男はおせち料理並みのご馳走を前にしてもったいないことをした、と思う俺は下品なのだろうか？

俺はJumに寄り添って安らかに寝ようと思ったが、隣にさくらのふとんが敷いてあり、また煩惱に悩まされると困惑した。

愛花がトイレから戻ってきたし、娘の前で馬鹿なことはできない。俺は酒も飲んでいないし、俺にも節度がある。それよりも何よりも

恐ろしいのは、J u mに見つかったらちよん切られる。

そこで、俺は煩惱を消すために藤川君からもらった睡眠薬を飲んで寝ることにした。

俺はJ u mの方に身体を向けているが、脳裏に浮かぶのはやはり後ろのお方の乳房であり、小粒の乳首も鮮明に映し出される。そして、恥部さえも想像で出てきてしまう。俺は悶える。

(J u mさん、助けて、J u mさん、J u mさん…)

俺は10年ぶりにJ u mの乳房を左手でつかみながら、薬が効いて意識を失った。

平和

ジャー、ボタン、ジャー。

その音で俺は目覚めた。

俺はどれほど眠っていたのだろうか？

藤川君からもらった睡眠薬がよほど効いたのかもしれない。

それに、ここはどこだろうか？

ちよっと前にも同じ思考をしたような…。

あっ！思い出した。ちよっと前は墓だったが、ここは『いわき荘』のはずだ。

えっ！隣に女が寝ている。さくらよりも若いけれども…うーん、色気がない。

部屋の中には何人かの乙女が寝ていて、一人は起きて洗面所で顔を洗っている。

昨夜、俺は若い女がいる部屋に忍び込んで夜這いでも試みたのだろうか？

俺の節度もこの程度かと自分で呆れてしまう。だから、地獄行きの審判が下ったのだ。

窓の外も明るくなったし、高校生ほどの子どもを相手に俺も息子もその気にはなれない。

ちょっと待てよ！愛花と優花は俺が眠っている間に高校生になった…？

もしかしたらと思って、俺は乙女たちの顔を再びじっくり見た。あり得ない。愛花も優花ももっともっと可愛らしい。こんなもんじゃない。

俺はJumの所に戻ろうと部屋を出た。ところがどこへ行けばいいのかが分からず、迷子になってしまった。睡眠薬のせいで頭が変になったのかもしれない。

ロビーの受付に行つて、俺は愕然とした。

『本日12月20日』。空白の8日間。俺は随分長く眠っていた。10年よりは短いけれども…。

『いわき荘』の中を搜索したが、家族はどこにもいない。春男の車もないし、もう埼玉か東京に戻つて、場合によってはタイに帰ってしまったのかもしれない。

俺は見ず知らずの人の車を次々に乗り換えて、埼玉に向かった。次の日の昼、俺はさいたま市の春男のアパートに到着したが、そこには他人が住んでいた。

俺は春男を探すために、電話帳とか、パチンコ店とか、オートレース場とか、いろいろ考えても決め手が浮かばず、途方に暮れた。が、まもなく最も確実な搜索方法を思いついた。

（神様、お願いです。家族のいる場所を教えてください）

「浅草でおみやげを買っておる」

（ありがとうございます）

神様は全知全能の偉大なるお方だ。神様こそが世界を平和へと導きになるに違いない。ただ、俺の裁判もそうだったが、のんびりと時間をかけすぎている気はするけれども…。

世界平和まであと50年くらいか？それとも100年か？行政改革が遅れたら、200年かも？

俺は再び車を乗り継ぎ、電車も使つて浅草に向かった。

途中、銀座線のテレビ画面で中東紛争にて犠牲者が出たと報道さ

れていた。人の世の暴力は無くならない。地下鉄の乗客は笑顔がなく、疲れた顔の人が多かった。やっぱり、天国がいい。

100年後に娘たちや家族全員を連れ、天国から4泊5日の温泉旅行を兼ねて、人の世の様子を見学に来てみたい。そのためにも今回の受験は必ず合格し、天国へ行って早めに予約しておくことにしよう。

あっ！Jumと娘たちが仲見世通りで布小物や人形を手にとって、品定めをしている。

愛花は俺の故郷で心が癒されたようで、優花とはしゃいで笑っている。母子3人の空間には平和があり、俺がいなくても結構幸せにやっている雰囲気がある。家族の幸せは何よりも嬉しいけれども、俺だけ置いてきぼりにされているみたいで寂しい気もする。

でも、今はいいかもしれないが、人の世は一寸先に何が起こるか分からない。核を搭載したロケットや300年に一度の超巨大地震はまだ日本に来ていないのか？

（神様、巨大地震はいつですか？）

「秘密じゃ」

一刻も早く、家族は東京を離れた方がいい。俺はいやな予感がする。

「愛ちゃん！優ちゃん！」

と、10mほど先からさくらの声が聞こえてきた。春男も一緒である。

えっ！二人が手をつないでいる。まるで親子だが、俺には二人の関係が読めない。もしかしたら、介護の関係だろうか？

「Jumさんと優ちゃんは明日何時の飛行機？」

と春男がJumさんを見ながら、さくらに訊いた。

「成田11・30発だから、家を7・00に出れば余裕ね」

何故、春男は愛花の名前を言わなかったのだろうか？

家族は春男の車で都内の日暮里の春男が住むアパートに到着した。アパートの建物はやや古いが、部屋は2LDKでかなり広い。春

男にここの家賃が払えるとはとても思えないので、もしかしたら念願のジャンボ宝くじが当たったのかもしれない。

家族はホテルではなく、ここに宿泊していたようだ。節約家のJumらしい考えであり、それも娘たちへの教育の一環に違いない。いや、ただもったいないという理由だけかもしれない。

（春男、面倒をみてくれてありがとう）

俺は春男の寝室やもう一つの部屋を覗いてみた。そして衣類や化粧品や飾られた写真を見て、俺は驚きの、いや奇跡の事実を知った。春男に女がいる！

第五章 幽霊？ チーム

援助交際

なんと、春男とさくらとは同居人であった。

春男は58歳の運送業の会社員であり、さくらは20歳の東京医科歯科大の学生である。

まさか38歳差の夫婦だろうか？

そんなはずはない。二人は『いわき荘』では別々の部屋に泊まっていた。

もしかしたら、援助交際をしているのだろうか？

でも、春男が女に毎月小使いを渡す余裕があるとは思えない。思考が貧弱な俺には、やはり宝くじ3億円が当たったとしか考えられない。3億円が手に入ったら、何でもあり得る。もしも俺だったら、あれとこれと美女を…。

下品な想像はやめて冷静に考えれば、その大金のために精神や自己防衛システムが暴走し、むしろ不幸になる場合が多いとも聞く。しかし、不幸のリスクが高いと分かっても、俺も3億円を当てたかった。

家族とさくらとの会話から、意外な事実が明らかになった。春男とさくらとは、やはり援助交際をしている。ただし、下品な男の想像とは少し内容が違っていているけれども…。

それから、愛花は日本の小学校に入学することになった。愛花は日本語を1年前から勉強し、少し話せるらしい。愛花は優花と違って会話が少ないので、俺は気づかなかった。

一方、優花とJumは明日の航空便でタイに戻る。

双子の愛花と優花とが離れて暮らすことは絶対に反対である、と俺は初めに思った。しかし、愛花本人の希望であり、一時的な経験ということであれば、父として認めてやろうと考え直した。俺の意

志が反映される余地はないけれども…。

1年前の計画では春男が愛花を名目上扶養し、実際はさくらのアパートに愛花を住ませ、Jumがさくらに愛花の家庭教師代や生活経費を支払うつもりだった。

ところが、さくらには一つの問題があった。彼女は部屋の片づけができない病気を患っており、春男はそれが愛花にとって衛生上よくないと心配した。一般的にタイの女性は、1日に少なくとも2回のシャワーを浴び、日本人と同様に身体を清潔に保つ民族である。Jumも例外ではなく、おそらく愛花も優花もそのように習慣づけられている。

数ヵ月前、春男はさくらの部屋を綺麗に掃除してやった。その綺麗な部屋の状態をさくらが維持できるかどうかを試すつもりだったらしい。

掃除という共同作業を通じて二人は意気投合し、現在の新しいアパートで同居し、愛花を受け入れることにした。

春男とさくらとは、掃除をしてやるとか、食事の支度を分担するとか、話し相手になるとか、お互いの生活を補完し合う関係が気にいっているらしい。表現は不正確かもしれないが、セックスレスで小使いなしの援助交際である。

ただ、春男もさくらも愛花に良好な生活環境を提供したいと考えたに違いない。愛花が日本に來なければ、38歳差の男女が同居することは、普通ではあり得ない話である。

（春男、さくらちゃん、ありがとう）

チーム

お金や労力に関しては3者が負担し合って、お互いに無理がない。家賃は春男とJumとで折半とし、さくらは0である。春男は一人でアパートを借りるよりも負担が少なく、Jumは愛花のために相応の負担であり、さくらは家賃代が浮いて得となるが、その代わり

に優花の家庭教師をする。

孤立して生きるのは俺の経験からも地獄である。同居の3人は日常的に会話や相談をし、苦楽を共有し、心身ともに健康的な生活を送ることができるかもしれない。

故郷を追われ、家族の絆が壊れがちな現代だから、歳の差や国籍別や地域や性別などの垣根を越えて共同することも生活の知恵であり、人それぞれに個性があるように多様な生き方があってもいいはずである。

実際、俺も47歳で16歳差の国際結婚をして幸せをつかんだ。残念ながら、3年で終わってしまったけれども…。

春男、さくら、愛花の3人のチームは、老若男女、日本、タイ、英語、算数、愛の力を結集して、学校や職場や社会の厳しさと闘っても簡単には負けないと思う。

それに、さくらは小学生の頃にのんびり屋で遅刻の常習者だったが、幼稚園児の頃から『日本の歴史』を読み、小学校では『世界の歴史』を愛読し、歴史の「最強オタク」として友だちや先生からも一目置かれていた。そして彼女は精神科の医師になって、心を病む人を救いたいという志を持っていた。医学生になったさくらは、その志を持ち続けているようである。彼女の知力や志もチームを支える確かな力になるに違いない。

さらに無敵の最強チームを組織するには、他に二つを補強したい。それは料理とセックスである。

俺はどうしても発想が下品な方向に行ってしまうが、セックスの力を馬鹿にはできない。男は好きな女のためにひと肌脱いだり、火事場の馬鹿力を発揮したりする。少なくとも俺はそうだ。

そういえば、NHK『てっぱん』のあかりはどうなったのだろうか？

あかりも赤ちゃんの時に実の親に先立たれ、育ての親と離れて独りで広島から大阪に出てきた。しかし、彼女にはおばあちゃんもいたし、同じ住宅の下宿人や近所や職場の人たちとのつながりがあっ

た。あのチームは料理の力も加わって、最強のチームだったかもしれない。きつと、あかりは幸せになったのだろう。ドラマだから当然か。

こっちはドラマではない。でも、愛花も孤立していないから、きつと幸せになれるはずだ。

（愛ちゃん、独りじゃないよ）

（春男、頼む）

しかし、二十歳の色気のある女性と同居して体を求めないのは、節度のない俺には考えられないが、春男にはそれができるのだろうか？

もしもそれができるとすれば、誠に不思議な男である。もしかしたら…。

でも、愛花が不思議な関係の二人の中に入って、健全に育つだろうか？俺は心配である。

あと11日間、俺も3人と同居して、彼らの様子を観察してみることにした。

それに、愛花を「改心」させる試験に合格するために、その間に何か手を打たなければならない。

それにしても、春男が人生の最終コーナーを回って、ようやく少しでも幸せを感じることができるとすれば、俺は家族として嬉しい。愛花は春男を幸せにするためにタイから来た天使のように思える。

（春男、幸せになれよ）

（愛ちゃん、時々、春男やさくらのお手伝いをしなさい）

（さくらちゃん、ありがとう。春男と愛花をよろしく。Hな想像してご免ね）

ただ、俺は記憶を脳裏から消せない。誠に下品で節度がない男である。

うさぎ

現代は人の記憶を文書や写真に移し替え、それをパソコンやメモリーに保存し、それを未来に活用することが容易になった。俺はその技術を活かして写真入りの『愛優記』を書き、それを10年後や50年後の家族への贈り物にしようとした。結局、遺言書のようになってしまったけれども…。

俺は『愛優記』や俺を含めた家族の写真がどこに残っていると信じていた。

Junはノートパソコンをタイから持参していなかった。春男のノートパソコンは10年前のモデルではなく、新機種であり、その中味を調べてみても『愛優記』が見当たらなかった。

『愛優記』を探し出すのは困難であり、俺は愛花の「改心」のためにそれを読ませる作戦をあきらめることにした。あきらめるといふよりも、必要がないと判断した。なぜならば、愛花は『愛優記』の少なくとも前半の6話までを、既に読んでいると確信したからである。

というのは、春男の部屋のリビングの棚の上に白いうさぎの人形が一つ置かれている。俺は『愛優記』の6話で2羽のうさぎの人形の写真を貼り付けた上で、「純白のうさぎさんたちは二人が物心つく頃には汚れているかもしれませんが、うさぎさんから人の優しさを感じ取ってください」と書いた記憶がある。その2羽のうさぎは、武田さんの奥さんの手作りの贈り物なのである。

お寺巡りが好きだった武田さんや親切な奥さんは、今も元気だろうか？

『愛優記』を読んでいなければ、うさぎの人形を10年間も大切に取っておくはずがない。1羽は優花がタイで保管し、もう1羽を愛花が日本に持ってきたに違いない。

愛花は『愛優記』の中の教えを素直に受け止め、「人の優しさ」を忘れないように人形を自分のそばに置いていると思う。

うさぎの隣に木製の龍やねずみや2匹の虎の小物品が置かれている。浅草の仲見世通りで買ってきた品かもしれない。家族の干支で

あり、一番弱くて食べられてしまいそうなねずみが笑っている。俺にはそう見える。

俺はうさぎとねずみをじっと見つめ、愛花の優しさと寂しさを感じた。

第五章 幽霊 ? さようなら

教え

俺は愛花の「改心」のための作戦を変えることにした。しかし、なかなか最善手が思い浮かばずにもやもやしていると、春男が寢室から何か冊子の束を持ってきた。俺の小学校や中学校時代の卒業アルバムや成績通信簿である。

俺は願ってもない展開になったと期待した。

「数字の5は成績がいいということかしら」

「そう、5が最高で3が中間で1が最低」

「泰ちゃんは数学がいつも5で、他も5や4が多いし、勉強家だったのね」

「家で勉強したのは見たことないな。昔は学校の授業をちゃんと聞いていれば、試験もそれなりの点数を取れたよ。田舎には学習塾も無かったし、学校から戻って来たら、子どもは皆、遊ぶかテレビを観るかだったね」

俺も春男も親に勉強しろと言われた記憶は無いが、その後の世代は親や社会から尻を叩かれ、塾や受験勉強で苦労し、可哀そうに思えた。ところが、彼らは前の世代よりも勉強をしているはずなのに、優秀な若者が増えているとは俺には感じられなかった。学業に集中しすぎて、心を育てることが疎かになったのだろうか？

俺は学業よりも心が大切だと考え、それを伝えるために『愛優記』を書き始めたつもりだったが、書いているうちに娘たちを賢く育てたいとも思った。そのために俺は、娘たちに算数の練習や手足の運動やゲームをやらせ、脳内神経のネットワークを発達させようと考えた。Jumは俺の代わりにそれらを実行したかもしれない。俺は競争社会を生き抜くためには知力も必要だと思ったのである。

その知力は、誰と競争し、誰を負かすために必要なのだろうか？

負けた人は不幸になっても仕方がないのだろうか？

学業の成績が良い方だった俺は、知らず知らずのうちに子の尻を叩き、心を疎かにする親になっていたかもしれない。

愛花は算数が得意らしいが、いじめをする人間になったとしたら、『愛優記』を書いた意味がない。俺は、心や人が大切であり、人が幸せになるための知恵を学んでほしい、と愛花に伝えたい。もはや伝える機会はないかもしれないけれども…。

「これは中学校3年生の時の通信簿ね。音楽と体育は4で他は全て5よ。凄いわね。ここに『われ以外みなわが師』と書いてあるけど、先生が生徒に贈る言葉かしら」

（来たー！大当たりリーチ！）

と俺は天国モードになったと興奮した。

（主よ、愛花を導きたまえ）

「3年生の後半は高校受験があったから、兄貴は学校でちゃんと勉強して、成績が上がったんじゃないかな。その後、高校へ進学して勉強しなかったから、成績が中の中に下がったって、兄貴から聞いたことがあるよ」

春男とさくらとの会話は時々英語に訳され、Jumや娘たちに伝えられた。しかし、なかなか肝心の話にならないので、

（春男、さくらちゃん、恩師山上先生の『われ以外みなわが師』という心の教えを愛花に解説してやってくれ！）

と、俺は会話の腰を折って何度も叫んだ。が、その教えはそれっきり話題にはならなかった。

そこで、俺は会話の流れを引き戻すために、家族にメッセージを書こうとペンを探したが、

「それは反則じゃ」

と神様をご通告なされた。

俺から人に伝えられる手段は、涙だけなのだろうか？

汗や小便も同じ水系だから手段になり得ると思うが、

「汚い」

と神様が不快感をあらわになされたので、俺は試してはみなかった。
結局、その日は万策尽きて、「改心」の作戦をあきらめざるを得なかった

夜が更け、通信簿やアルバムが片づけられ、家族もさくらもふとんの中に入った。

（愛ちゃん、優ちゃん、おやすみなさい）

俺は『ベンザリン』と『ロヒプノール』という睡眠薬をゴミ袋に押し込み、うさぎに監視されながら、Jumに身体をくっつけて寝た。

深い眠りの夢の中で、何か異変を感じた私は、

（愛ちゃん、愛ちゃん）

と呼びかけた。

巨大地震が東京を直撃したわけではなく、愛花がトイレに行ったのである。

別れ

ピッ、ピッ、ピッ。

その音で俺は目覚めた。

家族やさくらが起きて、まもなく全員が車で出かけた。

俺は置いてきぼりにされなくて、ひと安心した。

成田空港に到着し、Jumと優花は航空券の手続きを終えた。

あと数十分ほどで、俺はJumと優花との最後の別れをしなければならぬ。

Jumは愛花に何かを話しかけていたが、途中で言葉を詰まらせた。

優花は笑顔だが、Jumの腕をつかむ彼女の小さい手に、俺は彼女の耐える意志を感じた。

赤ちゃんの時、優花は大きな瞳のびっくり顔で皆を愉快にさせた。

それにJumのように我慢強く、しっかり者との評判で、ぐずつても大声を出すことはなく、直ぐに泣きやむ子だった。

優花が愛花との別れを寂しくないはずがない。心で泣いても表情や声に出さない優花が愛おしい。

（優ちゃんは優しく強い子だね）

俺は優花ほど強くないので、床に涙を落した。が、誰もそれに気づいてはくれなかった。

俺はよっぽどその場で小便をしようかと思ったが、娘たちから下品なお父さんと思われたくないので、優花を見習って耐えた。

娘たちにはかっこいいお父さんだけを見せたいと思ってしまう。

だから『愛優記』には下品で節度がない俺や、嘘や不正や裏切りで汚れた俺を書くことができなかった。

娘たちは、大人になれば世間の汚れた部分や男の性を知って、お父さんの実態に勘づくかもしれない。

でも、俺はJumと結婚し、愛花と優花とを授かり、父として人として変わらなければならないと考え、『愛優記』10話では「10年後、私も愛花も優花も賢く成長しているといいですね」と書いた。家族と一緒になら、俺も成長できると思ったのである。

娘たちは10年間で期待通りに心身ともに成長したが、俺は全く成長していない。俺は10年間も寝ていたが、『寝る子は育つ』は嘘に違いない。そもそも、俺は子どもではないけれども…。

（かっこいいお父さんでなくて、ご免よ）

Jumと優花がパスポートや航空券を持って、出発口へ向かった。愛花、春男、さくらが手を振って見送っている。Jumと優花が振り返ると、Jumは泣きべそをかき、優花も笑顔が消えていた。

「優ちゃん」

と愛花が呼んだ。

その時、ジェットエンジンの音が空港内に響いた。

「愛ちゃん！」

と優花は右手を振って、エンジン音に負けない声で返事した。大き

な瞳が潤んでいる。

俺は優花に一度もお父さんと呼んでもらえなかったので寂しいけれども、それはお父さんがいなくてもしっかり生きていくという優花の決意にも感じる。

（優ちゃん、あなたは強い人だから、泣き虫のお母さんをいつも守ってください。頼んだよ）

J u mは右腕で優花を抱きしめ、左手で何度も涙を拭いている。

（J u mさん、ねぎ入り納豆ご飯と一緒に、J u mさんの豚生姜焼きをまた食べたかったなあ）

俺は両手を合わせ、深々と頭を垂れ、床にぽとぽと涙を落した。

（I！ L O V E！ Y O U！さようなら、コップンカップ）

俺の涙で濡れた床に、誰かの一滴の涙が落ちた。

第五章 幽霊 ? 愛情

酒

J u mと優花との今生の別れは辛く、生きた心地がしなかった。俺の最高の宝物を失うくらいなら、死んだ方がましである。俺はせめて愛花との最後の生活を大切に生きようと思う。でも、俺は既に死んでいることに気づいた。

俺が幽霊として愛花と過ごせるのは、大みそかまでの10日間だけになってしまった。

新チームの3人は空港から春男のアパートに戻り、その後、春男は独りで車を運転して出かけた。さくらと愛花は一緒に徒歩で買い物に行った。俺は女の買い物には付き合いきれないと思い、独りでアパートに残った。

俺は弘前から東京への旅の疲れや宝を失った脱力感で、うつ病を患ったかのように何もする気になれず、昼間から酒を飲もうと思つて、台所で冷蔵庫を開け、食器棚の中も探った。

アルコール類は350m?ビール6缶があるだけで、それを飲んだら春男がさくらを疑うと思ひ、俺は外出して酒屋を探し当て、青森産の吟醸酒一升や柿ピーやするめを買ってきた。万引きしたら試験が不合格になると思ひ、代金は酒のあった場所に置いてきた。何しろ、神様は「全てをお見通し」なので慎重に行動しなければならぬ。

10年ぶりの酒はうまかった。オツチャと違って俺は酒が弱いが、最初の1杯だけは好きであり、2杯目以降は惰性で飲み、日本酒ならコップ3杯が俺の限界である。それ以上飲んだら吐いてしまう。学生寮時代には怖い先輩に無理やり飲まされて、トイレをよく汚したものだ。

そういえば、俺は10年ぶりに目覚めてから今日まで10日間、

何も飲み食いしていない。幽霊は、オツチャの酒のつまみの定番であるナマコよりもエネルギー消費量が少ないようだ。

腹には何も残っていないから、酔いすぎても吐くものがない。それにいざという時、涙を流して愛花にサインを送るためには、多少の栄養や水分の補給も必要である。俺はそんな理屈をこねて、柿ピーとするめをつまみに酒を飲んだ。が、理屈はどうでもいいことで、うまいから2杯目も一気に飲んだ。

いつもならここで気分が悪くなり、身体が酒を受け付けなくなるはずだが、今日はなぜか苦しくない。逆に気分が高ぶり、演歌を歌いたくなった。

いつも演歌ではかっこ悪いから：うーん、友人の広川さんの18番である『千の風になって』を歌っちゃおうかなあ。ん、爽快な酔いごちで、うまく歌えそうだ。

♪私のお墓の前で泣かないでください ♪そこに私はいません ♪眠ってなんかないません！

わ、リアルすぎて涙が溢れ出る。選曲の失敗だ。

これは酒を飲んで気を紛らわすしかないか。でも、いい曲だから続けよう。

俺は3杯目を飲みながら、

（♪秋には光になって畑にふりそそぐ ♪冬はダイヤのようにきらめく雪になる…）

と続きを歌うと、あれ、窓の外でダイヤのような雪が降ってきたぞ。

（神様、サービス、ありがとうございます）

「礼には及ばぬ」

もうすぐクリスマスか。娘たちと一緒にケーキを食べたかったなあ。Jumはバナナ入りチョコレートケーキ。俺はもちろんチーズケーキ。娘たちはどんなケーキが好きなのだろう。いや、やっぱりショートケーキではなく、円形の大きいケーキがいい。結婚披露宴でJumと俺とが共同作業したように、今度は愛花と俺とが一

緒にナイフを持ってカットする。優花はカットした中から一番大きいを選び、Jumはイチゴが乗ったのを「これはお父さん」と言
って俺に気を使う。そこには家族団らんがあつて、俺の究極の夢が
…。はあ…ふう…。

（酒だ！酒だ！）

悲しいけれども、4杯目も5杯目も今日の酒はいける。一升瓶の
ラベルには『田酒』と書いてあるが、有名な酒なのだろうか？最高
にうまいなあ。

酒といえば、オッチャはアルコール依存症で弘前の『藤代健生病
院』に入院したことがあった。家族や周りに大きな迷惑をかけても、
酒をやめられないオッチャを俺は見下した。しかし、俺はオッチャ
が正気でいることが苦しいから飲むのだろうと同情もした。

どうも、苦しいという理由だけで飲むのではないみたいだ。1杯
目の酒のうまさは俺も知っていたが、今日は何杯飲んでもうまい。
こんなにうまいものは理屈なしでやめられない。

俺はオッチャの気持ちを理解したつもりになって、悲しい酒を飲
み続けた。

愛

♪ひとり酒場で飲む酒は ♪別れ涙の味がする…。

そのメロディーで俺は目覚めた。

俺はどれほど眠っていたのだろうか？

それに、ここはどこだろうか？

前にも同じ思考をしたが…。

あつ！うさが俺を見ている。そうだ、ここは春男のアパートで
ある。

チームの3人がテレビで華やかな歌謡番組を観て、画面では桜吹
雪が舞い、若い踊り子が跳ねている。綺麗な脚だな…。

おっと！うさぎの隣で龍がこっちをにらんでいる。

「愛と恋は違う？」

と愛花が恋愛の歌を聴きながら、問いかけた。

「両方とも好きということだけど、全然違うのよ。愛はね、自分のためじゃなく、相手のために頑張れるってことよ。春ちゃんはどう思う？」

「昔、I love youを“死んでもいい”と訳した人がいるって聞いたね」

「つまり、愛はあなたのためなら死んでもいいほど好きってことかしら」

とのさくらの説明を聞き、愛花は歌が終わった直後、

「恋はeasy、愛はdifficult」

と結論付けた。

俺は愛情深い人になってほしいと思って愛花と命名したが、考えてみれば難しい願いだったのかもしれない。家族を愛することはできても、他人を愛することなどできるのだろうか？

それはさておき、さくらは優秀な家庭教師ぶりであり、俺は厳しい時代を生きるための共同作戦が今のところ成功し、微笑ましい家族団らんの生活が営まれているように思えた。

ついこの前まで独りぼっちだった春男は、幸せを実感しているのだろうか？

その団らんの中に入って、俺も皆と一緒にテレビを観ていたら、『紅白』という文字が目に入り、俺は嫌な予感がした。

うっそおう！NHK紅白歌合戦！今日は大みそか！？試験最終日ではないか。

俺は夢に違いないと思ってほったをつねったが、痛くはなかった。幽霊だから痛いわけがない。夢でも何でもなく、今日は大みそかであり、俺は9日間も眠っていたことになる。

酒も睡眠薬も二度と飲まないぞ、と気張ったところで時間は戻ってはいない。

愛花を「改心」させることができれば、俺は天国には行けず、

地獄に落とされるのである。人生50年十幽霊歴20日間の中で、俺は最大のピンチを迎えた。

マレーシアで工場が火事になった時も、日本で炉が目の前で爆発した時も、フィリピンで強盗に追いかけられた時も、タイで飛行機が乱気流に巻き込まれた時も、心臓が止まるほど度肝を抜かれたが、それらに勝るとも劣らない衝撃の瞬間である。

残りの数時間でどうしたら愛花を「改心」させられるのか？

俺は人生で何度も期限ぎりぎりでも難局を打開してきた。それは褒められたことではなく、ぎりぎりまでさぼっていたというだらしないの所以なのだが、俺は火事場の馬鹿力で最後の勝負に挑んだ。

俺は人生の土壇場では、坂本龍馬ならどうするか、と問うた。龍馬は人の心を大切にし、とくに女に小まめであった。龍馬ならきっと…三味線持って歌い…そして、深く考える。

家族団らんから独り抜け、俺は龍馬になりきって「改心」についての真理を熟考した。

んー、人をいじめることが悪いことだと、愛花が知らないわけではない。愛花に限らず、10歳にもなればほとんどの子どもは知っている。もしも知らなかったとしても、『愛優記』や『われ以外みなわが師』の教えや人を思いやる道徳などで知識を伝えたところで、人がいじめをやめるとは俺には思えない。

人は知識によって行動するのではなく、愛情や感動によって心が揺さぶられ、それによって行動できるのではないか。愛情が枯れて心に栄養が不足すれば、人は動けなくなるか、それとも荒れて暴走する。実際、俺も孤立し、栄養不足で病気を患った。

愛花の友達は「愛情が足りなかった犬は、人に噛みつく」と言っていたらしいが、俺はその言葉に真理が隠されているような気がしてき

た。
あゝ、難しくて頭が痛くなった。血の巡りを良くするためにトマトジュースが欲しい。

待てよ、龍馬は暗殺された後、幽霊になって出てきて、妻のお龍

に「I love you」の英語を教えていた。ん、これだ、と俺はひらめいた。

第五章 幽霊？ 判決

花

結論は愛情と感動だ。つまり、家族に愛されている、とくにお父さんに愛されている、という実感や感動を愛花に与えることが肝心である。

俺の声は愛花に聞こえないので、俺は歌の力を借りる作戦をひねり出した。そして、俺は新聞で紅白歌合戦のプログラムを調べてみた。

ひえー！知らない歌手や歌ばかりだ。あっ！Jumの友人の娘さんの倅田さんがいる。

いや待てよ、懐メロ特集の中に『世界に一つだけの花』がある。曲名に『花』があって、愛花は自分や優花の名前を連想するかもしれない。

（さくらちゃん、この曲が流れたら愛花に分かるように通訳してくれ！）

32年前、いや42年前に故郷を出て以来、NHK紅白歌合戦を家族と一緒に視聴したのはJumと結婚した3年前、いや13年前の一度きりである。いつもいつも独りぼっちで、寂しい人生だった。愛するJumだけが一輪の思い出を俺に与えてくれた。

（Jumさん、ありがとう）

♪花屋の店先に並んだ ♪いろんな花を見ていた ♪ひとそれぞれ好みはあるけど…。

歌が始まった。何度聞いてもこの歌には癒される。愛に鈍感な春男の目も潤んでいる。

♪僕ら人間はどうしてこうも比べたがる？…。

俺は比べる相手を間違えたのかもしれない。

♪一人一人違う種を持つ ♪その花を咲かせることだけに ♪一

生懸命に…。

娘たちが愛という花、優という花を咲かせてほしい。

おっと！作戦を忘れてはいけない。俺は愛花の左手の甲に俺の涙をつけた。

（愛ちゃん、お父さんはここにいるよ）

うっ！愛花は気づいてくれない。俺は右手の甲にも涙をつけた。

愛花が自分の左右の手の甲を見て、首を左右に動かした。父の存在に気づいたようだ。

（愛ちゃん、綺麗な花を咲かせなさい）

俺は父の愛を涙で伝え、歌の心を理解してほしいと願った。

「愛ちゃん、どうしたの？」

とさくらが愛花に話しかけた。

（よし！愛ちゃん、歌の意味をさくらに尋ねなさい）

俺は優秀な家庭教師が「一人一人」を大切にすることを教えてくれると期待した。

ところが、

「Nothing」

と、一言で愛花が会話を終わらせた。

（何でもないって？愛ちゃん、お父さんを見捨てないで。俺だって、天国で花を咲かせたいよ）

俺が泣きべそをかいている間に紅白歌合戦は終了し、まもなく除夜の鐘がなろうとしていた。

結局、龍馬は最後にあっけなく殺され、俺も最後は作戦失敗で地獄へ行く運命だったのか？

徳川家康を師範とすれば良かったのかもしれない。

小物品の龍の隣で、ねずみが泣いている。

そうだ、そのねずみを愛花のそばに置いて、お父さんからのお別れのサインしよう。

（愛ちゃん、さよなら。お母さんにラブレターを送れよ）

（春男、よかったな）

（さくらちゃん、優しい医者になれよ）

俺は神様の元へ戻るために春男のアパートを出た。

（しくじった。それにおみやげも買えなかった）

「1時間くらいなら延長してもよいぞ」

（えっ！おみやげを買う時間を頂けるのですか）

「サービスじゃ」

サービスと言われても、おみやげを受け取るのは神様であり…？

ゴーンと除夜の鐘が鳴った。

（2021年、愛ちゃん、優ちゃんがいじめられないで、そしていじめないで、元気に楽しく過ごせますように）

俺は手を合わせ、目を閉じて祈った。

俺は商店街に行って、酒屋と化粧品屋と薬屋に忍び込み、代金を置いておみやげを手に入れた。『溪流 大吟醸』が無く、代わりに『田酒』を選んだ。そして、俺は神様の元へ戻った。

判決

（神様、愛花は心の優しい子です）

「どこの親も自分の子には甘いもの」

（愛花は改心の現在進行形です）

「何を言っておるのじゃ、もう改心したぞ」

（えっ、どういふことでしょうか？）

「お前の娘は友達みんなに詫びの手紙を送ったのじゃ。確か、お前の故郷から戻ったあとじゃ」

愛花は故郷で心が癒されたに違いない。俺の故郷が愛花と俺を救ってくれた。

（神様、試験は合格ですね）

「焦るな。明日、判決を言い渡そう」

あっ！俺はまだおみやげを渡していなかった。神様はそれを期待して…。

（神様、おみやげをお受け取りください）

「そうか、遠慮なく頂こう」

俺は『田酒』と『シャネル5番』の香水を神様の前の棚に差し出した。

「何か忘れてはおらぬか？」

俺は神様が他に何かをお求めだと思い、ポケットに手を入れると、使い残したお金があった。天国へ行ったらお金は無用だと思い、（神様、ここに20万円ほどお金があります。お布施としてお収めください）

と俺はお金を全部差し出した。すると、

「それは賄賂じゃな」

と神様が俺をにらみつけた。

（えっ！滅相もないことです。お布施でございます）

「ここにはお布施とかいう慣習はない。どう考えても賄賂じゃ」

俺は神様に何度も何度も頭を下げて誤解を解こうとした。

「お布施と言いながら、お前の心の中は見え見えじゃ。人間は金で全てが解決できると思っておる」

（ほんのでき心でございます）

「まだ試練が足りぬようじゃ。判決は不合格。鬼の棲む地獄に落ちるか、それとも人の世でもう一度地獄を味わうか、明日までにお前が決めるのじゃ」

神様がいらっしゃる部屋の扉が閉ざされた。

俺は最後の最後でしくじってしまった、

（ナスデダ、カンベステケロー！（なぜですか、勘弁してください）

とひとり残された部屋でひれ伏した。

すると、神様の部屋の扉が再び開いて、俺は（もしかして…）と期待した。

「何か忘れてはおらぬか？」

と神様が再びお尋ねになった。

俺ははっと気づいて、

（これを忘れておりました。お受け取りください）

「これ、これ、わしもあいつもこれを楽しみにしておったのじゃ。こちらでは入手が難しいのう。はっ、はっ、はっ…」

扉が再び閉ざされた。

100年後

次の日、俺は人の世の地獄に戻る決断をした。ただ、愛花が改心したことが評価され、自分が選んだ女性の子として生まれ変わる権利を頂いた。

ただし、選んだ女性が子を産むという保証はなく、もしも産まなければその女性がこちらに来るまで俺の出生は凍結される。そして、その時点でまた次の女性を選ぶ。

そんなことでは天国行きが、もしかしたら200年後になってしまいかもしれない。それまでに世界平和は達成されているかもしれないが、それよりも俺の家族の平和や団らんの方が緊急の大事である。

俺は最初に愛花の子として産まれたいと考えたが、リスクの低い優花の子として生まれ変わる選択をした。

「お前は家族を救えるかのう」

と神様が不吉なことをおっしゃった。

優花の子として産まれ、試練を乗り越え、神様がお認めになれば、俺は100年後には天国で家族と仲良く暮していただけるかもしれない。余り緊急とは言えないけれども…。

100年後の4泊5日の家族総勢温泉旅行の夢に、俺は間に合うのだろうか？

その予約を誰に託そうか？

そうだ、Jumなら幽霊にならず、直ぐに天国に行ける。

俺は手続きを終えて、一升瓶を取りだした。

（家族を救えるか？神様は、なにシャンベテルンダバ（なにをはなしているのか））

俺は自分の失敗が悔しくて、酒を飲んで紛らわすしかなかった。

（あー、キマゲル（悔しい）。クソツタレー！）

俺は気の遠くなるような前途を悲観し、『田酒』を浴びるほど飲んで意識を失った。

（第五章 幽霊 完）

第六章 再臨？ 出産

出産

オギャー、オギャー、オギャー。

その声で私は目覚めた。

私はどれほど眠っていたのだろうか？

そして、ここはどこだろうか？

私は目を開けられないので暗闇の中にいる。

誰かが私の身体をぬるま湯で洗っており、私は産まれたばかりの赤子に違いない。

私の身体には私ともう一人の意志とがあり、そのもう一人の泣き声で私は目覚めた。

周りに数名の人がいる気配があるが、彼らの言葉がよく分からない。おそらく、タイ語や英語で話しているらしい。私はタイで誰かの子として生まれ変わったのかもしれない。

私は人の手に身を委ね、身体を拭かれ、布に包まれ、柔らかに抱かれている。人は赤子に対して優しい生き物であり、人に生まれ変わった私は幸運である。

猫や犬でも食うことに困らなければいいが、飼い主から選ばれる保証はなく、他の兄弟姉妹とともに公園に捨てられ、夜露に濡れて腹を空かした一生になるかもしれない。

人だったら食えることに不自由はなく、捨てられることはないだろう。

だが遠い昔、幼い子の世話を放棄し、子を死に至らしめた母がいる、というニュースを聞いた気がする。

「マーちゃん、マーちゃん」

私の母と思われる人が私を呼んでいる。優しい母であってほしい。これから家族に大切に育てられ、大人になって美味しい酒を飲め

れば幸いである。

ところで、私はいったい何者なのだろうか？

私は日本語で思考し、津軽弁を覚えているので、前世は津軽出身の日本人だったと思われるが、津軽のどこに住んで、何をしていたのかを思い出せない。

それに私は『田酒』という一升瓶の酒を独りで飲んで、酔ったまま意識が薄れた記憶があり、それは昨日のように感じる。昨日は2021年の正月だったと思うがそれも定かではない。

実際、今日はいつなのだろうか？

私には『田酒』の他に二つの記憶がある。一つは、

「試練が足りぬ」

と神様がおっしゃった。

私は何かで失敗をし、神様のご機嫌を損ね、未熟者としてここに戻されたに違いない。

前世では酒癖が悪く、周りに迷惑をかけたのかもしれない。それにしても『田酒』は美味しかった。

二つ目の記憶は「温泉」である。「温泉」という言葉だけが記憶にあり、具体的に何を意味するのかは分からない。私は前世でほとんど温泉好きだったのかもしれない。

もしかしたら、私はあの世から温泉旅行を楽しむために戻ってきたのだろうか？

いつか、神様が私に何かをお示しになれるかもしれない。今は産まれたばかりであり、人生は長いことから、ゆっくりと時機を待つことにする。

ただ、神様が「試練」と言われたのだから、人生は楽なことばかりではなさそうである。

私はもう一人の自分に同化して、私の思考を休めた。

赤子

母の乳は優しい味がする。

私ともう一人の自分は、乳を飲み、眠って、小便やウンチを出し、昼も夜も大きな声で泣く。おむつや服を汚し、そわそわ動いて落ちて着かず、ひと時も目が離せない赤子である。

私は単調な生活を何ヵ月も繰り返しているが、母や祖母は毎日休みなく、飽きずに世話をしてくれる。時々、父もシャワーで私の身体を洗い、抱っこしてくれる。

朝や昼間には心安らかなメロディーや子守唄が流され、私には心地よく聞こえる。

私が産まれてしばらくすると、玉子の黄身やかぼちゃや豆を混ぜたご飯が出されたが、余り美味しくはない。それらよりは母の乳の方が美味しい。

ただし、おなかが空いている時は何でも食べる。でも、かぼちゃは苦手である。

当初、私は祖母の家で養育されていたが、産まれて半年ほどで父の家に移された。親子3人で暮らしている。

時々、祖母や親戚が訪ねてくる。父がいる時や訪問者が来たときはテレビを観ることが多いが、母と二人きりになるとテレビは消され、部屋には音楽が流される。テレビはにぎやかで面白そうなのに、どうして母はテレビのスイッチを切るのだろうか？

解禁日

2036年6月30日、私は1歳の誕生日を迎えた。

その日、バンコクの父の家に家族が十数人集まった。タイの祖母や親戚、それに日本から母の姉や父の両親が訪れた。

父と祖父が美味しそうにビールを飲んでいる。私も仲間に加わりたいが、今は我慢するしかない。

母の姉はアイちゃんと呼ばれ、日本に住み、父の両親と一緒にタイに來たと言っていた。アイちゃんが父の両親のためにタイ語を日

本語に通訳している。

母はユーちゃんと呼ばれ、アイちゃんとユーちゃんとは双子の姉妹である。似た顔だがはっきりと区別ができる。アイちゃんは母に比べて細身であり、メガネをかけて神経質そうな表情をしている。温和な母とは性格が違うかもしれない。

寝室には写真入りの額縁が5個ほど置かれ、祖母とアイちゃんとユーちゃんの3人が日本のきものを着て、お城と桜を背景に写っている写真がある。母が成人になる頃の写真と思われる。きものも背景も美しく、私はこの写真が一番気に入っている。いつか、私もそこに行つて花見酒を楽しみたい。

ある写真には二人の赤子と祖母と男性の4人が写っている。おそらく、この男性が母側の祖父であり、よく見るとその人とアイちゃんとは顔がよく似ている。

その人は祖母とかなり歳が離れ、50歳くらいに見えるが、病気か何かで早くに亡くなったのかもしれない。その人がいなくても祖母は明るくおしゃべりであり、誰よりも元氣に見える。

「マーちゃん、誕生日おめでとう」

とアイちゃんが日本語で話しかけ、私を抱いてくれた。

「マーちゃんはアイちゃんに似ているわね」

と父側の祖母が言った。

「マーちゃん looks like Yachan」

と母側の祖母が独り言のようにつぶやいた。

「Yachan」とは祖父と思われる人だろうか？

その人が写真撮影直後に亡くなったとすれば、母やアイちゃんは赤子だったので記憶がないと思われる。しかし、その人は祖母や母やアイちゃんに愛されているようである。

遠い昔の人なのに今でも愛されているということは、その人は家族を大切にした人なのかもしれない

私はその人やアイちゃんに似ていると言われたが、その人がどのようなに生き、何を大切にしたのかを知りたい。私はその人を参考に

家族に愛される生き方をしたいと思う。しかし、人にはそれぞれ個性があるので、同じようには生きられないとも思う。

「マーちゃんは納豆を食べて大きくなったのね」

とアイちゃんが言った。アイちゃんは、なぜか私の好物を知っていた。

その日、私は初めてバナナを食べたが、それは納豆よりも美味しいので、私の今後の好物になるに違いない。母も祖母もバナナが好きなようでいつも家に置いているのに、どうして今まで私に与えてくれなかったのだろうか？

私が柔らかくしたバナナを食べている時、父が写真を撮ってくれ、「バナナの解禁日ですね」

と言った。

タイの慣習では1歳の誕生日にバナナを食べるのだろうか？

第六章 再臨？ 優邦記

優邦記

誕生日の次の日、父がパソコンに向かって何かを打ち込んでいる。『優邦記』という題名の文書に私や家族の写真を貼り付け、その写真の下に説明文を書いている。家族の生活を記録した写真集のようである。短い説明文でも写真があるので家族の様子が分かりやすい。

「2035年6月18日、母（優花）の大きなおなかです」

「6月30日、優邦誕生」、「喜ぶJumおばあちゃんや家族」

「名前の由来…優花の優、泰邦おじいちゃんの邦。おじいちゃんや優花のように優しい人になってほしい。邦や故郷の人や自然を大切にしたい。父が命名しました」

「7月1日、優邦を抱く父、なかなか目を開けない優邦」、「集中治療室の母は歩くのも辛い」

「7月4日、優邦を抱く愛花さん、日本からの見舞い」、「優邦と母、パヤタイ病院を退院」

「7月8日、愛花さんと母の25歳の誕生日」、「優邦が大きく目を開けています」

「8月3日、父と母の結婚記念日」、「父から母に金のブレスレットをプレゼントしました」

「8月9日、儀式です。優邦の頭髪を剃って、爪を切りました」

「9月29日、カッコいい服を着る優邦、藤川さんからのプレゼント」

「10月31日、初めての離乳食を食べる優邦」、「塩分、糖分、テレビは控えましょう」

「12月4日、父の誕生日」、「モーツァルトを聴いて、すやすや眠る優邦」

「12月12日、泰邦おじいちゃんの没25年の命日」、「家族で

お寺に行きました」

「12月31日、家族で紅白歌合戦を視聴」、「年越しそばを食べ
て長生きしましょう」

「2036年1月元旦、おせち料理」、「優邦が玉子を食べて、笑
っています」

「4月2日、上野公園の桜です。綺麗ですね」、「日本はどこも清
潔で自然も美しい」

「5月2日、Jumおばあちゃんの60歳の誕生日」

「6月30日、優邦の満1歳の誕生日」、「優邦が初めてバナナを
食べました」

私が産まれる直前の母のおなかの大きさには驚いた。母は苦しん
だと思うが、母に感謝しなければならない。母は私のためにいつも
一生懸命であり、将来、母を楽にさせてやりたい。

「塩分、糖分、テレビは控えましょう」とあるが、テレビの観すぎ
はよくないという教育方針のようである。母がテレビのスイッチを
切っていた訳が分かった。1歳の誕生日にバナナを食べたことも、
教育方針と何か関係があるのかもしれない。

「泰邦おじいちゃんの没25年の命日」との説明書きの人と、寝室
の写真の男性とは同じ人だった。やはり、あの人は私の祖父であり、
早くに亡くなったのである。

父は私の命名の由来として「おじいちゃんや優花のように優しい
人になってほしい」と書いているが、どうして父はおじいちゃんの
ことを知っているのだろうか？母から聞いたのかもしれないが、母
が赤子の時におじいちゃんは亡くなったのだと思う。

そうか、おしゃべりのJumおばあちゃんは、母に「あなたの父
は優しい人」と話して聞かせたのかもしれない。きっと、おばあち
ゃんはおじいちゃんを愛していたのだと思う。

でも、愛していた人がいなくなっても、あんなに明るく元気である。
心の中にいるから寂しくないのだろうか？大人になったら、私はお
ばあちゃんに昔のことをいろいろ聞いてみたい。

「写真ばっかりね」

と母が言った。

「泰邦さんみたいには書けないよ。でも父親の責任だから、俺なりに書いてみるよ」

と父が答えた。

昔、泰邦おじいちゃんが何かを書いて、父はそれを見習って書いているのだろうか？

母はおじいちゃんが書いたものを読んで、何かを勉強したのかもしれない。私もそれを読んでみたいが、長い文を読むよりも写真がいっぱいの方が見やすくていいと思う。

父は「父親の責任」として『優邦記』を書いていると言ったが、将来、子の私に見てほしいのかもしれない。

『優邦記』を見て、読んで、私に何を感じてほしいのだろうか？

温泉

2040年4月、私はまもなく5歳になるが、バンコク市内の幼稚園に通っている。

私には3歳になる弟がいるが、弟の泰男は幼稚園に行かず、母がいつも世話をしている。

幼稚園ではお友達と日本語で会話し、皆と一緒にゲームをしたり、歌を歌ったりする。

「マーちゃんは歌が上手だね」

と私は皆に褒められて、いつも大きな声で歌う。幼稚園は楽しいところである。

私が幼稚園から戻ると、母は数や図形のパズルと一緒に遊んでくれる。そして、寝る前には絵本を読んでもくれる。絵本はタイ語の場合と日本語の場合があるが、私は『桃太郎』や『裸の王様』が好きである。

将来、私は強い男になって、家族のために悪い人たちをやっつけ

たい。

2040年8月9日、父と母とおばあちゃんは、私と弟を連れて日本に出発した。

夕方、日本の空港に到着すると、40歳くらいの女性の人が出迎えてくれた。

「サクラさん、お仕事は休みですか？」

と母が問うた。

「少し早めにお盆休みにしたのよ」

「病院の仕事は忙しいでしょう？」

「精神科は夜勤が少ないからそうでもないわ」

とサクラさんが返事して、皆を駐車場に案内した。そして、皆は大きめの車に乗り込んで空港を出発した。

サクラさんは夫が経営する病院に勤務し、10歳の息子さんがいるという。母とおばあちゃんの友人らしい。

車がサクラさんの自宅前に到着し、そこで一泊するという。家の中が新聞や雑誌や衣類で散らかっていたので、父も私も驚いた。綺麗好きの母が動じなかったのが、私には不思議である。

サクラさんの息子さんの英樹君は両親が医師であり、自分も医師になるつもりらしい。

「漫画本ばかり読んで、学校の勉強をしない」

とサクラさんが英樹君のことを嘆いていたが、サクラさんの夫の山田さんは、

「手塚治虫や白戸三平の漫画は、学校の勉強より学ぶことが多い」と息子さんの漫画好きを認めていた。

山田さんは40歳代半ばと思うが、きもの姿がかっこよく、頭の良い日本人に見えた。

英樹君の部屋は漫画本やおもちゃなどで足の踏み場がなかったの
で、医師になる人がこんなのでいいのかと私は疑問に感じた。頭が
良すぎると片付けができなくなるのだろうか？

将来、私は勉強の内容や優先順位で混乱するかもしれない。

次の日の朝、私たちは再びサクラさんの車で出発し、高速道路の『東北道』を北上した。

私も弟も車の中ではほとんど寝ていたので、どこに行くのか分からなかった。途中、福島や岩手で休憩し、さらに車は北上した。そして、車は「大鰐弘前」という出口で高速道路を下りた。

私ははっとした。なぜならば、私は産まれた時に津軽弁を覚えていたので、前世は津軽出身の人だと思っていたが、その津軽に私は来たのである。

私の家族と私の前世とは何か関係があると考えざるを得ない。私はいったい何者なのだろうか？

出生時に抱いた疑問が再び蘇った。

夕方、車は岩木山という高い山の麓にある『いわき荘』という温泉ホテルに到着した。

そこではアイちゃんが待っていて、3年ぶりに再会した。

「マーちゃんもヤツちゃんも大きくなったね」

と私と弟はアイちゃんに頭を撫でられた。

おばあちゃんとアイちゃんとサクラさんが相部屋となり、2部屋に別れて泊まった。

遠い昔、前世が津軽出身と思われる私は、このホテルに泊まって温泉に入ったのかもしれない。私は 父と一緒に露天風呂に浸かりながら、

（私はおじいちゃんの生まれ変わりではないか？）
と思い始めていた。

第六章 再臨？ ホーム

酒

私は前世を思い出そうと、かつて見たと思われる露天風呂の周りの景色を見渡した。すると、不思議にも壁の反対側の女湯の露天風呂や内湯の情景が想像された。そして、J u mおばあちゃんや母やサクラさんが入浴している様子が脳裏に浮かんた。

昔、私はここの女湯に入ったことがあるのだろうか？

私が記憶する「温泉」という言葉とここの湯とは何か関係があり、他に「田酒」や「試練」の記憶がつながっているのかもしれない。

私は父とともに湯から出て、売店に行つて商品を見回した。なんと、そこに「田酒」が置いてあつた。

私はゴクンとつばを飲み込み、

「お父さん、これなあに？」

と父に訊いた。

「マーちゃんも飲んでみたい？」

「うん」

父が720ml瓶の「田酒」を買い、部屋に戻った。

夕食時、父はその「田酒」の瓶の蓋を開けた。

「サクラさん、アイちゃんも、どう？」

「じゃあ、少しだけ頂こうかしら」

ビールを飲んでいたサクラさんやアイちゃんも「田酒」の味見をした。

「りんごの香りがして、美味しいわね」

サクラさんが気に入ったみたいだった。

「お父さん、僕も飲みたい」

「マーちゃんはまだ早いよ。お父さんより背が伸びたら飲めるからね」

まもなく、父がトイレに立った。J u mおばあちゃんが昔話をし
て皆が笑っている。私はこの機会を逃すまいと、「田酒」が少し入
ったコップを手を持った。

「マーちゃん、だめ！」

と母がコップを取り上げた。が、私は既に「田酒」を飲み終えてい
た。

（美味しい。この味だ）

私は嬉しくなって、部屋を縦横無尽に駆け回った。

トイレから戻ってきた父に叱られたので、

「ごめんなさい。もうしません」

と私は心にもないことを言い、隙があればまた飲んでやろうと思っ
た。

私は上機嫌になって、

「おばあちゃん、おじいちゃんはお酒が好きだったの？」
と訊いてみた。

「No. おじいちゃんはスキじゃないです」

とおばあちゃんが答えた。

私はおじいちゃんの生まれ変わりだと思っていたが、勘違いだっ
たのだろうか？

「おじいちゃんのお父さんは好きだったの？」

「Oh! Yes. そうです」

（そういうことか）

と私は独りで納得した。

ホーム

次の日の朝、朝食後に全部の荷物を車に積み、皆で出かけた。

車が到着したのは老人ホームのようだった。『檜』^{ひのき}という部屋の
中に4人分のベッドがあり、2人がベッドで休んでいた。そのうち
の一人がベッドから起き上がり、

「よく来たね」

と言った。

「ハルオさん、ご無沙汰しています」

とサクラさんが挨拶した。

「ハルちゃん、こちらがユーちゃんのご主人と息子さんたちよ」

とアイちゃんが私たちを紹介してくれた。

私は昨夜の家族の会話から、ハルオさんがおじいちゃんの弟だと知った。

（ハルオも私の息子か）

と私は思いながら、

「こんにちは」

と言って、手を合わせておじぎをし、ハルオさんと握手した。

ハルオさんは足が不自由で歩けない様子であり、私は顔や手の感触からハルオさんが80歳近い老人と感じた。ふっくらとした顔が母によく似ていると思った。

私は家族や周りに迷惑をかけ、神様から叱られ、その償いや「試験」のためにこの世に生まれ変わったと思われる。酒飲みの私のせいでハルオさんが苦労したのかもしれない、と私は気になった。

（ご免よ、ハルオ）

と私は心の中で詫びて、ハルオさんから手を離れた。

「最近では老人ホームが増えて、福祉や介護の制度も充実しているわね」

とサクラさんが言った。

「国の福祉政策が大きく変わったから、ハルちゃんも簡単にここに入所できたのよ」

とアイちゃんが説明した。

「アイちゃんのお陰で助かったよ。ありがとう」

とハルオさんはアイちゃんに感謝した。

日本の政治や社会に何か大きな変化があったのかもしれない、と私は思った。

「前は年金だけじゃあ、生活が苦しかったけど、今は年寄りも安心して暮らせるよ」

とハルオさんが言った。

アイちゃんに助けられ、ハルオさんが心穏やかに余生を過ごしていると感じ、私は安堵した。

(アイちゃん、ありがとう)

寺

ハルオさんと別れた後、私たちを乗せた車が『陽光院』という名のお寺に到着した。

中に入って階段を上がり2階の部屋を進むと、『佐藤家』と書かれた仏壇があった。

「お父さん、アツイデスカ？」

とおばあちゃんが仏壇の中を見て話しかけた。

「お父さん」とはおじいちゃんのことだろうか？

いつもはおしゃべりで明るいおばあちゃんが、ハンカチで額の汗を拭きながら、静かに寂しそうな表情で仏壇を見つめている。昔のおじいちゃんとの生活を思い出しているのかもしれない。

おばあちゃんは30年前に亡くなったおじいちゃんを今でも愛している、と私は改めて思った。

「お父さん、お父さんの孫が二人来たよ。マサクニちゃんとヤスオちゃん」

とアイちゃんがおじいちゃんに紹介した。

おじいちゃんは早くに亡くなって可哀そうな人だが、私には家族に愛されて幸せな人だったとも思える。きっと、おじいちゃんは天国で安らかに眠っているに違いない。

それとも家族のそばで、家族の様子を見守ってくれているのだろうか？

もしかしたら、私と同じように誰かに乗り移って、ここにいろ

かもしれない。そういえば、おじいちゃんも私の弟も愛称は「Y a c h a n」である。私は泰男の顔をじっと見つめた。

私は前世でおじいちゃんに迷惑をかけたのではないかと気になり、正座で両手を合わせながら、仏壇と弟とに交互に深くおじぎをした。泰男は不思議そうな表情を返した。

泰男から目線をそらし、再びおばあちゃんを見ると、ハンカチで汗を拭きながら、実は涙も拭いていることに気づいた。

母がおばあちゃんの右側に寄り添い、チーン、チーン、チーンと鈴を3回打ち鳴らし、両手を合わせておじぎをした。父はその様子をカメラで撮影し、それを『優邦記』に載せるつもりに違いない。

サクラさんは泰男に正座の仕方を教え、皆に仏教の由来や思想について説明してくれた。私はサクラさんに対して、弱き者を包み込む優しさや気高い知性を感じた。そして、柔らかい表情の中の輝いた瞳や、大きな胸と均整のとれた体をじっと見て、美しい女性だとはつきり意識した。

私はサクラさんに触ってみたいと思うが、これは恋という感情なのだろうか？

第六章 再臨？ 志

墓

素敵なサクラさんが運転する車はお寺を出発し、スーパーマーケットに立ち寄り、そして市内から15分ほど離れた墓地に到着した。そこには30歳半ばくらいに見える男性が待っていて、アイちゃんの夫と紹介された。

その墓地から雄大な岩木山が見え、家族は『佐藤家』と刻まれた墓石の前に集まった。墓石の下にはおじいちゃんやご先祖様の遺骨が収められ、前世の私の骨もあるに違いない。

家族は墓石の前の左右に花束を飾り、正面にはバナナやりんごなどの果物やいろいろなお菓子やジュースを供えた。お酒もあるので、私は隙があれば狙うつもりである。

お盆の2日前だが、他家の一部の墓石にもいろいろな食べ物が供えられている。

「マーちゃん、ジュース飲む？」

とアイちゃんが言うので、私はりんごジュースの缶の蓋を開けてもらって飲んだ。

「美味しい！」

果汁100%であり、りんごの濃い味や甘みや酸味がほどよかった。

「マーちゃん、このりんごは世界で一番美味しいのよ。そうよね、アイちゃん」

と母が言った。

「気温差とか、日照時間とか、気候がちょうどりんごに合うのよ」

「それだけじゃないでしょう。摘果や葉摘みのタイミングや日光の調整などで手間をかけているからでしょう。りんごは医者いらずの健康食品だし、母や夫や子どもが毎年楽しみにしているから、今年

も贈ってね」

とサクラさんがアイちゃんに催促した。

夢

墓参りの後、車で1分くらいのところにアイちゃんの家があった。
新築のようだった。

「お父さんやおじいさんの夢をアイちゃんが叶えたのね」
と母が言った。

「お父さん」とはおじいちゃんのことであり、「おじいさん」とは私のことだと思うが、おじいちゃんや私の夢とは何のことだろうか？
自分の夢を思い出せないというのは、私が認知症でも患っていたからだろうか？

（神様に聞いてみようか？）

「何じゃ」

とご返事があった。

えっ！私は神様と会話ができるのか？知らなかった。

（私の前世の夢は何だったのでしょうか？）

「新しい家を建てて、家族と一緒に暮らす、と何かに書いておったのう」

（ところで、私は誰でしょうか？）

「忘れおったか？佐藤泰邦と名簿に載っておるぞ」

（えっ！私はおじいちゃんですか？）

私はおじいちゃんの生まれ変わりだというのに全く記憶がない。

そこで、神様にいろいろお尋ねしたかったが、
（いづれ思い出すはずじゃ）

と言われて、詳しく教えては頂けなかった。

母が言うように、私の代わりに娘のアイちゃんが私の夢を実現してくれたのだろうか？

アイちゃんは吉谷さんと4年前に結婚したが、名字は佐藤のまま

であり、夫婦別姓だという。アイちゃんは夫とともに農業を営み、りんごや米や野菜を栽培しながら、佐藤家の墓や仏壇を守り続けている。ただ、望んではいても子には恵まれていないようだ。

驚いたことに、アイちゃんに子がいないので、母のおなかにいる妹をアイちゃんに委ねると父は言った。父はそれを決断する前に吉谷さんに会い、生活環境を知りたかったらしい。

その日、家族は佐藤家や吉谷家の親戚や近所の皆さんに焼肉バーベキューで歓迎された。

ほとんどの皆さんは農業を営み、部落内の共同組合でりんごを栽培し、「青森県目屋産」というブランド名で国内はもちろん、中国を中心にアジアやヨーロッパなどに輸出しているらしい。

昔は農業だけでは生計をまかなえず、出稼ぎが多かったが、今は兼業農家が少ないという。やはり、社会のシステムに何か変化があったのかもしれない。

皆さんが飲んで語り合っている隙をみて、私もビールを少し飲んだ。私が妹に代わってここに住み、毎日お酒を飲んで、人生を楽しみたい、と私は夢想した。

家族やサクラさんは、アイちゃんと吉谷さんとの二人だけが住んでいる新築の家に泊まった。そして、私はふとんの中で自分の昔の夢について考えた。

『新しい家を建てて、家族が一緒に暮らす』

私は何か平凡すぎて面白くないと思う。それは普通の家族なら当たり前に思うことで、夢としては小さすぎると感じるからである。

5歳の私、そして過去を忘れた私には社会のことはよく分からないが、今でも世界では紛争があり、貧しく住む家もない人たちがいるということを知っている。その苦しい人たちのようにおじいちゃんは、家族が新しい家で一緒に暮らす、という当たりのように思えることが困難な時代に生きていたのだろうか？

そういえば、ハルオさんは「前は年金だけじゃあ、生活が苦しかった」と言っていた。日本は昔から経済的に豊かな国だと思っている

たが、私は勘違いをしているのかもしれない。

私はおじいちゃんの子どもの頃やJumおばあちゃんと結婚する前のことを知りたい。そして小学生になったら、人間の歴史について学んでみたいと思う。

小学生

2046年4月、私はタイの日本人学校で小学校6年生になった。母は算数の教育に熱心だが、私は算数よりも歴史や音楽に興味がある。

私の愛読書は、サクラさんが日本から送ってくれた『日本の歴史』や『世界の歴史』である。サクラさんは幼稚園の時から読んでいたので、歴史に詳しく、物知りらしい。私も憧れのサクラさんを見習って小学校入学前から読み始めた。

私は勉強しすぎると部屋の片付けができなくなると心配したが、母に厳しくしつけられた。

私は世界にたくさん恵まれない人がいて、いまだに世界のどこかで戦争が続いていることを知った。私は歴史を勉強して、どうしたら世界が平和になり、人類が幸福になれるかを学びたい。そして、誰か悪い人がいたら、鬼退治をしたい。

私は父からも母からも体罰を受けたことがない。体罰を認めることは戦争を認めることだと母は言う。私にはその理屈がまだ分からないが、私は父や母を信じて勉強している。父が書いた『優邦記』が私の生き方の指針である。

最近、私は『翔ぶが如く』という本を読み始めた。私は優しいおじいちゃんの生まれ変わりだから、弱い人たちや日本の夜明けのために働きたいと思う。本の内容は難しいが、西郷隆盛や大久保利通という人が優しく強い心を持っていたということは何となく分かる。本の中で西郷さんと大久保さんとは戦争をするが、子どもには理解が難しい事情があったのかもしれない。そこから私は何か教訓を学

びたいと思うが、今はさっぱり分からない。私は家族や人類を守るために、今よりも100倍も賢くならなければならない。

弟は算数が得意であり、将棋が強い。まだ5年生なのに小学校で、いやタイで将棋が一番強いらしい。私はいつも負けるので、悔しくて将棋を余り指さなくなった。弟は大人にも負けないので天才少年と呼ばれている。

将棋では世界平和を達成できないので、私は別の道を選ぶことにした。

私は神様から選ばれ、人類を救い、世界平和を達成するためにこの世に再臨したのではないか。私は再臨の意味をよくは知らないが、それは私の決意を示す単語に思える。

友達とは遊んでばかりいるが、私は一生懸命に勉強して夢を叶えたい。もしも私が夢を叶えられなくても、私の子や孫が叶えてくれるかもしれない。ややこしい話だが、私の子とはアイちゃんや母ではなく、将来の私の子であり、母の孫である。

私の夢とは、世界平和を達成し、ドヴォルザークの『新世界』を聴きながら、「田酒」で祝杯を上げることである。それは11歳の私の志でもある。

サクラさんは小学校低学年の時、心を病んでいる人を助けるために精神科の医師になるという志を持っていた、と母から聞いた。将来、私は初恋のサクラさんに男として認められる大人になりたいと思う。そのために、今から高い志を持って生きることにする。

私の恋は誰にも話すことはできないが、父に私の志について話したら、

「優邦は偉いね」

と笑顔で褒められた。

第六章 再臨？ 恵

妹

2046年4月30日夜、志を抱いた私は6年ぶりに日本へ出発した。

次の日の早朝、母とおばあちゃんと私との三人が成田空港に降り立ち、家族は電車や新幹線を利用して津軽に向かった。そして5月1日の夕方、私たちは弘前駅に到着した。

アイちゃんが私たちを出迎え、アイちゃんの運転する車で市内から郊外へ15分ほど移動した。車は岩木川沿いを走り、信号を左折して吉川橋を渡り、部落の共同墓地を左に見て、アイちゃんの自宅に到着した。

空は薄暗く、雄大な岩木山を見ることはできなかったが、私の脳裏に6年前の情景が蘇った。

あの時、部落の人たちに焼肉のバーベキューで歓迎され、私は周りの目を盗んでビールを飲み、人生について夢想した。あのビール、いや夢想がきっかけで、私は歴史を勉強し、私の志について思考するようになった。

志を実現するためには、子どもの頃から挑戦や冒険で自分を鍛える必要があると思う。今回も私は隙をみて、ビールでも日本酒でもいいから冒険しようと考えている。

私は日本で産まれ育った5歳の妹に初めて会った。名は佐藤恵であり、めぐみと読む。

恵はアイちゃんをオカチャ、母をメー、おばあちゃんをアマーと呼ぶ。

「恵、お兄ちゃんの優邦君よ」

とアイちゃんが私を紹介してくれた。

「こんにちは」

と私が手を合わせて挨拶すると、

「こんにちは」

と妹は笑顔で返事をした。

私は前世の私の孫でもある妹が愛おしく、妹を守るために自分が生まれ変わったのではないか、とさえ思えた。

「恵、Long time never see」

とJumおばあちゃんが孫を抱きしめた。

ホスピス

5月2日朝、家族はねぎ入り納豆ご飯と、タラの芽の天ぷらや山ウドの味噌和えやふきの煮物などの山菜料理を食べた。私は、山からの恵みでアイちゃんの家族が生きていると思った。

おばあちゃんは納豆や生野菜が苦手なので、焼き魚やゆで卵に箸を運んでいた。

食後、私は産まれて初めて日本のきものを着せられ、サクラさんの夫の山田さんのようにかっこいい日本人になった気分だった。将来、山田さんとは男の闘いをしなければならない。

おばあちゃんも母もアイちゃんも恵もきものを着て、総勢5人が車で出かけた。そして10分ほどで、私たちはある病院に到着した。

「マーちゃん、ここに私の夫のお父さんがいるのよ」

とアイちゃんが教えてくれた。

私たちは『ホスピス』と書かれた病棟に入った。そこは安楽に死を待つ人が入所する病棟だと聞かされた。私は恵のおじいさんがまもなく天国に行くのだと思った。

「恵、きもの、綺麗だな」

とおじいさんが言った。

「オド（おじいさん）、イズ、ウズサ、帰るダバ？（いつ、うちに帰るのですか）」

と恵がおじいさんに訊いた。

「ンダナ、2ヶ月グライアドダビョン（そうだね、2ヶ月くらいあとだと思うよ）」

とおじいさんが答えた。

私はお別れの日が近いと察した。

アイちゃんが言うには、恵はおじいさんの昔話しや絵本の読み聞かせが好きで、とくに『ないた赤おに』や『りゅうのめのなみだ』や『キリスト物語』を何度も聞かされたらしい。きっと、恵はおじいさんが大好きなのだと思う。

「お父さん、そのノートは何ですか？」

とアイちゃんが訊いた。

「何が、カギノゴソウガド、オモツテナ（何かを書き残そうかと思つて）」

「そうですか。私が恵にも読んで聞かせますからね」

ノートの表紙には『神からの恵』と書かれ、次の短歌が記されていた。

『津軽の地 父祖^{ふそ}の血こもる りんごあり 子よ孫^{ふそ}たちよ 永久^{とわ}に幸あれ』

おじいさんは恵を愛し、恵のために命をつないでいる、と私は思つた。

満開

病院を出た家族は、弘前公園に到着した。

公園は大勢の人々にぎわっており、桜が人々を包み込んで見事に咲き揃っていた。

「ちょうど満開ね」

とアイちゃんが言った。

満開の桜の下では青いシートが敷かれ、朝から宴会が始まっている。私も宴会に加わりたいが、それよりも桜の美しさに魅了され、この世にこんな華やかな名所があったのか、と私は心を奪われた。

絶景の桜を観て、朝からお酒が飲める津軽の人々は幸せだと思う。

昔、おじいちゃん、いや私もここで暮らしていたのである。どうしてこんな幸せな地を離れて、外国に行ったのだろうか？

私たちが隙間なく咲き揃った桜のトンネルを通り抜けると、やがて目の前にお城が見えてきた。弘前城が桜の綿に包まれているように見える。母の寝室にある写真の景色が私の目の前に鮮やかに蘇り、私は何となく懐かしく、故郷に戻ってきたような気がした。前世の私も、これと同じ景色を観たに違いない。

J u m おばあちゃん、アイちゃん、母のユーちゃん、恵、私の5人は、通りすがりの人にお城を背景に写真を撮ってもらった。お城と木製の赤く塗られた橋と満開の桜を背景に、家族の色彩豊かなきもの姿やなごんだ笑顔が一生の思い出になる、と私は思った。

「I t' s l a s t t i m e f o r m e」

とおばあちゃんは今回が最後だとつぶやいた。

「I f お父さん i s h e r e, h e i s v e r y h a p p y」

と母がおばあちゃんの左腕をつかんで言った。

「…」

おばあちゃんは返事をせず、寂しそうな表情になった。

「I' m h e r e」

と私はおばあちゃんの右腕を引っぱって、ささやいた。

母の隣で恵が無邪気にお団子をほおばっていた。

その日の夜、アイちゃんの家でおばあちゃんの70歳の誕生日パーティーが催された。

アイちゃんはバナナ入りのチョコレートケーキを用意し、それを皆で食べた。

ケーキの一切れが家の中にある仏壇の前に供えられたが、それはおじいちゃんのためのケーキだと思う。

私は毎年、おばあちゃんの誕生日におばあちゃんの肩や足をもむ。今回は恵と一緒にもんでやった。おばあちゃんはおじいちゃんが

いなくても幸せな人生を過ごしていると思う。が、寂しいに違いない。

母はおばあちゃんの誕生日にいつも花束をプレゼントするが、今回は桜の刺しゅう入りハンカチをプレゼントした。おばあちゃんはハンカチを拡げてじっと見つめ、そしてそれで涙を拭いた。

私はおばあちゃんが「OK」と言っても、いつまでも肩をもみ続けた。

睡眠薬

（神様、私は何のために生まれ変わったのですか？）

「試練のためじゃ」

（なぜ、試練が必要なのでしょう？）

「罪深き者は天国には行けぬ。試練が心を浄化するのじゃ」

（心ですか？）

「お前は家族を救えるかのう」

（えっ、それはどういうことでしょうか？）

「いずれ分かる」

それっきり、神様とは音信不通になった。

私は家族に何か深刻な事態が起きるのではないかと恐れ、なかなか眠れなかった。

こんな時、人は睡眠薬を飲むのだろうか？

第六章 再臨？ 神様の涙

ノート

おばあちゃんの誕生日の翌日、家族は再びおじいさんがいる病院を訪れた。

アイちゃんと母が事務局に行って、何かの手続きをしているようである。おばあちゃんは恵の手を引いて、売店で買い物をしている。前夜、神様との会話で不安を感じた私は寝不足の眼をこすって、ロビーの椅子に座っていた。

ドーン！！ガチャーン！キヤー！

私は突然の大きな爆音と地響きに度肝を抜かれた。あちらこちらの窓ガラスが割れ、悲鳴が聞こえ、人々は慌てふためいて一斉に出口の方へなだれ込んだ。

私は神様の「試練」や「家族を救えるかのう」というお言葉を思い出し、この時のために私は再臨したのではないかと、とっさに感じた。

私は人々とは逆に爆音が聞こえた方向に走ったが、それは『ホスピス』の病棟のようであった。目の前に黒い煙が迫り、奥の方では火が燃え、そこから人々が逃げ出している。

私は燃え盛る火の向こうにいるおじいさんを助けたいと焦った。おじいさんは恵のために必死に命をつないでいる。私はおじいさんを助けることが恵の人生を救うことだと思った。そして、私は迷いを振り払い、火の中に飛び込んだ。

煙のために前方がよく見えなかったが、私は身を低くしておじいさんのいる部屋にたどり着いた。ドアを開けて中に入ったが、窓ガラスが割れ、既に部屋の中は煙で充満していた。

「おじいさん！おじいさん！」
と私は叫んだ。

「逃げろー！逃げろー！」

とおじいさんの声がした。

その時、再びドーンと大きな爆発があった。

私はおじいさんの手を引っぱったが、おじいさんを動かすことができない。

「俺をかまうな！早く逃げろー！」

おじいさんは私の手を振り払った。

「頼む！これを持って逃げてくれ！」

私はおじいさんからノートを託された。

「ごめんなさい！」

と私は言って、ノートを持ってその場から逃げ出した。

しかし、私は逃げる途中で煙を吸い込み、息ができなくなり、火と煙の中で意識を失った。

再臨

トン、トン、トン。

その音で俺は目覚めた。

俺はどれほど眠っていたのだろうか？

それに、ここはどこだろうか？

「判決を言い渡す。天国行きを認める」

と、裁判官のように黒い帽子とマントを身に着けた人が言った。

「よかったのう」

と俺は神様から祝福された。

（私は試練を乗り越えられたのでしょうか？）

「まさかあの時、火の中に飛び込むとはのう。命を粗末にしおって」

（おじいさんは助かったのでしょうか？）

「いや、死んだ。助かったとしても、あとひと月の命だったのじゃ」

（私は家族を救えなかったのですね）

「だが、お前の死体に抱かれたノートが焼けずに残ったぞ」

俺は『神からの恵』と書かれたノートを家族に残すために生まれ変わったのだろうか？

「実はそこでお前が死ぬのは想定外だったのじゃ」

（えっ、どういうことでしょうか？）

「もう少しあとにお前の家族に大きな災難が襲い、それをお前が救うシナリオだった」

（ということは、私は決断のタイミングをしくじったということですか？）

「そういうことになるのう」

（ということは、家族はこれから大変なことになる…）

「気の毒じゃが、そういうことじゃ。浅はかな行動だったのう」

俺は家族の不幸を見過ごして、のうのうと自分だけ天国へ行く気持ちにはなれなかった。

（私を人の世に戻して下さい）

「なに？ お前は天国行きを辞退するつもりか？ それは前代未聞、いや二人目か」

（浅はかな私でも家族の災難を見過ごすことはできません）

「ほお、お前も少しは成長したようじゃ」

（今でも私を想ってくれる妻が可哀そうです）

「そうか、妻のためにのう」

俺がうなずくと、

「もしも戻ったとしても、お前の妻や家族の災難を防ぐことはできませんぞ」

（せめて、泣いている妻の肩や足をもんでやりたいと思います）

「馬鹿者、そもそもお前が家族を泣かせておるのじゃ。命を粗末する大馬鹿者め！」

妻の泣き顔が脳裏に浮かび、俺は（Sorry）とつぶやいた。

その時、俺は神様の目が潤んでいるのに気づいた。

「これはいかん。わしが泣くと、どこかで洪水が起るかもしれん。こらえねばのう」

神様は目を閉じて、顔を上向きにした。

しばらくの沈黙の後、神様が目を開けて、俺を鬼のようににらみつけた。

「一つ条件がある。お前が人の世に救済者として再臨し、わしの代わりに世界平和を達成してくれぬか」

（えっ、世界平和？私にそんな大それたことができるわけがございません）

「お前が愛と優しさと正義の旗を掲げて、できそこないの人類を導いてくれればよいのじゃ」

（浅はかな私にできるのですか？）

「もう一人にも依頼しているのじゃが、いまだに勉強不足だと言って躊躇しておる。お前が先発して、やれるだけのことをやってみてくれんかのう」

俺は全く自信がないけれども、家族を救うという大事のついでに神様の依頼を引き受けることにした。それに死んだ孫の優邦の志を無にしたら、恥ずかしいとも思った。

（一つ教えて頂けないでしょうか？）

「何じゃ」

（家族の大きな災難とは何のことでしょうか？）

「本来、未来のことは秘密じゃが、わしの依頼を受けてくれるから特別に教えてやろう。まもなく、ある島国で大きな地震が起こる。それはわしにも防ぐことはできません。建物が崩壊し、大火が起こり、街が津波に飲み込まれ、多くの人間や生き物が死ぬ。しかし、それをきっかけに人間は大事なことに気づくかもしれん」

（第六章 再臨 完、最終章へつづく）

最終章 夢 ? 私欲

教義

わしは神である。

五千年前、わしは三代目の神として宇宙を受け継いだ。

初代の神は宇宙を創造し、数十億年をかけて地球を育てた。

二代目は地球に生命を創造し、生命と自然とが調和した共同体を育てた。

千万年前、その二代目が重大なことに気づいた。初代の神の計算ミスにより、いずれ地球は生命が住めない星になることを知った。神といえども全知全能ではない。

初代の神は地球に異変が生じた場合に備えて、地球と同様に生命が住める星を数多く育てていた。そこで、二代目は二つの構想を練った。

一つ。地球以外に生命を新たに創造する。

二つ。地球の生命を他の星へ移住させる。

二代目は自分が創造した生命に愛着があり、新たな創造よりも移住計画を重視し、創造の計画については三代目のわしに判断を委ねた。

問題は、生命が住める星が地球から途方も無く遠いところに存在するということである。

地球から生命を移住させるためには高度な科学技術が必要である。そこで、二代目は猿に道具の使い方を教え、その猿を千万年かけて現在の人類へと進化させた。

その途上の五千年前、二代目は科学技術の発達を加速させるために、人類に戦争や災害や様々な試練を与えることにした。人類は試練に耐え、それに対して知恵を働かせて成長し、科学技術を急速に発達させた。しかし、二代目はそれらの試練から生じる生命の苦し

みや不幸を見るのが堪えられないとして、移住計画をわしに引き継いで引退した。

わしは人類を苦しみから救う暫定的な処置として、天国という安楽地を開拓した。それによって、多くの人間は死後に天国に行けると信じ、苦しみからいくらかは解放された。

今日、科学技術が発達し、千年後には地球から他の星に移住できる目処も立ち、戦争や試練は無用の長物になった。ところが、戦争に明け暮れた人類は私欲に毒され、人を思いやる心を育むことが困難な生命に変異してしまった。そして、人類は地球の環境破壊も省みず、私欲に没頭し続け、今やわしにもその暴走を止められない。

戦争という試練を与えなくても、人類は人生を楽しむために科学技術を十分に発達させることができたはずである。人類を戦争に掻き立て、できそこないの生命に変異させたのは、二代目の神の戦略上のミスであり、そのミスに気づきながら、のんびりと時間を過ごしてしまったのはわしの怠慢に他ならない。神といえども全知全能ではない。

わしは愚かな人間どもの面倒を見なければならぬし、小さき物たちにも目を配らなければならない。地上ではわしの意志とは無関係に様々な災害や事件も起こる。そのたびに多くの人間どもは余りに多くのことをわしに問い、願い、求める。できるだけそれらに応えたいと思うが、全てに応えることはわしの実務能力を超えている。わしも苦悩しているのである。

わしは反省し、戦争をやめさせるために何人かの人間を救済者として地上に使わした。わしが救済者として選んだ人間は、家族への愛に執着する人たちであった。家族を愛せずに人類を救済できるはずがないと考え、その執着心にわしは期待した。

わしはこれまで、救済者たちに同じ話をしてきた。なぜならば、彼らができそこないの人類を正しく導くためには教義が必要であり、それを人々に語り、悟らせなければならぬと考えたからである。救済者たちは教義を愚かな人間どもにも分かるように、それぞれに

工夫をして人類を導こうと試みた。

中には「神はいない」と説いて、人類を導こうとした異端の救済者もいた。その者の戦略は一定の成果を上げたが、後継者への教育を怠り、権力を握った後継者が私欲を肥やし、人々の信頼を損ね、理想の実現は道半ばで破たんした。

神がいるか、いないか、あるいは何が真理なのか、ということは問題ではない。それは議論を楽しむための論点であり、人類の永遠の研究項目の一つに過ぎない。

問題は人類同士の無益で醜い戦争を続けるのか、やめるのかである。それは、人類が克服しなければならぬ私欲の問題でもある。どんな生命にも私欲はあるが、通常は自然との調和を乱すことはない。しかし、人類だけは例外であり、人類は私欲を制御しなければ戦争を止めることができず、やがては私欲により地球をも破壊してしまう。

生命の、いや人類の飽くなき私欲を制御し、生命と自然とが調和した共同体を再生することが、神であるわしの務めである。

救済者

あゝ、頭が痛い。血の巡りを改善するためにトマトジュースを飲みたい。

（神様、私の浅はかな思考力では、神様のご講義にとっても着いてゆけません）

「元々、お前には期待しておらぬ。お前が5ヶ月間で書いたものを読んで、珍しい人間がおると興味を持っただけじゃ。優邦として生き続けていれば、少しはものになったかもしれない」

確かに優邦は世界平和を願い、人間の歴史を懸命に勉強していた。あの純粹な心で生き続けていれば、何かを成し遂げたとしても不思議ではない、と当人の俺も思う。

「お前が死ぬ2ヶ月前、次のように書いたのを覚えておるか？」

10月13日(水)、タイの家族は愛花や優花を連れてお寺に行きました。Oaさん親子も里帰りし、お寺で合流しました。

6日から菜食週間が始まり、17日の朝食まで多くの中国系タイ人は肉や魚やニンニクなどを食べないそうです。

将来、愛花や優花も菜食週間中に母に従ってベジタリアンになるでしょう。

私は宗教上の儀式や慣習に従うことを認めます。ただし、それらに何の意味があるのかを学んでほしいと思います。何も考えないで盲従するのは賢い生き方ではありません。

菜食週間中、私も肉を控え、野菜料理を食べるように心がけます。それは自分の健康のためであり、そして家族との連帯感を共有したいからです。

私は家族の信仰の自由や価値観を尊重します。

将来、愛花や優花は宗教や思想や学問を学び、自分らしい生き方を見つけてください。そして、世界にはいろいろな文化や価値観があることを知り、それらを尊重してください。

ただし、自分の主義主張を押し通すために暴力を用いる人や組織を認めたり、加担したりしてはいけません。私は暴力も体罰も認めません。

人に対する寛容の心と、毅然として暴力を許さない姿勢とを持ってください。

でも、Jumは稀に愛花や優花に体罰を加えることがあるかもしれませんが。それは二人の幸せを誰よりも願っての行為であり、寛容の心で理解してほしいと思います。

10月18日(月)、私は10日間のタイ出張のためにマレーシアを出国しました。

私は愛花や優花に会うのが楽しみです。その時、二人はどんな服を着ているのでしょうか？私の弟の春男や品川女史やChoi夫婦など、親戚や友人の方々からの贈り物の服でしょうか？

時々、Jumは二人の身体の成長に合わせて衣服を買います。そして安価で丈夫で肌触りがよく、可愛らしい衣服を選んでいます。Jumはおしゃべりの次に服選びが好きなようです。

その費用は親戚や友人からの出産祝い金で賄われており、みなさんに感謝しなければなりません。

世界には子のために衣服を買えない、貧しい家庭もあります。そのことを無視して、自分たちさえよければいい、という冷淡な人間になってはいけません。

将来、愛花や優花が貧しい人々のために尽力することがあれば、私の教育が間違っていなかった証です。私は人に優しく、自立した娘を誇りに思い、手を叩いて嬉し涙を流すでしょう。

（娘たちはこれを読んだのでしょうか？）

「わしも、お前の娘たちも家族も読んだぞ」

「何も考えないで盲従」し、「寛容の心」が欠け、「自分たちさえよければいい」、「貧しい人々のために尽力」することもない人間が書いた文であり、俺は恥ずかしい。

「これを読んで、お前の娘たちや家族が優しく育ったのじゃ。それでよいではないか」

神様に「それでよい」とおっしゃって頂き、俺は救われた気持ちになった。

（私にはとても救済者など務まりませんが、神様のお手伝いをさせてください）

「逆じゃよ、当事者であるお前たち人類をわしが手助けするのじゃ。わしは人類や地球が減びたとしても、他の星に生命と自然との共同体を再生させることができるのじゃ」

（人類をお見捨てになるつもりですか？）

「そうしたくないから、わしも苦悩しておるのじゃ」

（私は再臨して、何をすればいいのでしょうか？）

「再臨というほど大げさなことではない。家族を愛し、隣人を愛し、

人類を愛する。愛するとは、私欲を捨てることじゃ。お前でもできるようであれば、人類はまもなく目覚めるはずじゃ。そして、お前では荷が重いが、お前の子孫が人類を導く指導者になれるかもしれない。時機が来れば、わしの隠し子を救世主として地上に送り、その子とお前の子孫と仲間たちとの共同作戦で人類を改心させられるはずじゃ」

（隠し子？）

「お前のおみやげのお陰で、わしに子ができたのじゃ」

（えっ、それはおめでとうございます。でも、隠し子とは…？）

「今、その子を教育中じゃ。それが可愛くてのう。はっ、はっ、はっ、はっ」

最終章 夢 ? 神の子

洗脳

俺は泰邦として50年間生き、10年間寝て、20日間幽霊になり、15年間凍結され、優邦として11年間生きた。再び凍結され、再臨し、そして何年間生きることになるのだろうか？

次は大事な使命を果たすために、命を粗末にはできないと思う。

神様は「愛するとは、私欲を捨てること」とおっしゃった。

再臨した時、俺はそれを実行することができのだろうか？

今の俺なら、それができるような気がする。なぜならば、俺は十分に長く生きたし、家族の幸せ以外に貪欲に求める物が思いつかない。

欲しい物が無いわけではない。それは家族とともに衣食住に苦勞せず、夢や未来について語り合える生活をしたということであり、今はそれだけで十分に思える。強いて欲をいえば、『田酒』をまた飲んでみたい。

昔、俺は3億円の宝くじを当てたいと願い、当てた後の贅沢な生活を夢想した。今は贅沢な生活とは何かがピンとこない。大きな家、高価な車、地位や名誉、どれも魅力を感じない。美女、これには魅力を感じるが貪欲に欲しいとまでは思わない。

実際に美女を目の前にした時、俺がどう感じるかは分からないけれども…。

俺は神様に人間が持つ活力や魂を抜かれ、洗脳されてしまったのだろうか？

俺は洗脳され、真理が見えていないのかもしれないが、神様は次のようにおっしゃった。

「何が真理なのか、ということは問題ではない。それは…研究項目の一つに過ぎない。問題は人類同士の無益で醜い戦争を続けるのか、

やめるのかである」

俺は神様に洗脳されていていようとだまされていていようと、神様のご助言に従い、「家族を愛し、隣人を愛し、人類を愛する」ことを実行したいと思う。

ただ、再臨した時、俺がこの心意気を持ち続けている保証はないけれども…。

隠し子

俺は恵の子として産まれ変わる手続きをしたが、それは20数年後のことだと予想される。

俺はまもなく凍結されるが、その前に神様へのいくつかの質問が許された。

（隠し子とは、どういうことでしょうか？）

神様は次の三つのことをご説明になられた。

一つ。わしは他の星に新たな生命を創造することにした。しかし、わしはその星と地球との両方を管理できるほどの実務能力を持っていない。したがって、地球を管理する者を育てなければならない。そのためわしは、わしと人間との間に子を儲けることにした。その子が将来の地球を管理することになる。

二つ。わしはある人間の女との間に3人の子を儲けた。しかし、その子たちには地球を管理できる器量がないと判断した。そこで、わしは別の人間の女に子を産ませようとした。その時にお前のおみやげが役に立ち、実際に子が産まれた。最初の女にはその4番目の子は内緒なのだ。だから、その子をつい「隠し子」と表現してしまった。

三つ。わしは親の心を知りたかった。二代目の神は生命を創造したが、わしは生命を創造したことがなく、親心を知った上で他の星に生命を創造したいと考えた。結果として、わしが子を儲けた意味は十分にあった。つまり、わしは3人の子の教育に失敗し、子を育

てることの難しさを知った。その失敗を教訓にして、わしは新たな生命を創造することができようであろう。

「4番目の子をどのように教育し、地球の管理者として育てたらよいか。わしは親として実践しながら勉強しておるのじゃ。お前が書いたものも参考になっておる」

（えっ、何が参考になっているのでしようか？）

「お前は子への教育について、次のように書いておるぞ」

私の教育方針は、人に優しく、自立した娘に育てる、ということです。そのために私は厳しい親になって、愛花や優花に煙たがられるかもしれません。

将来、あなたたちは父の散歩に付き合ってくれるでしょうか？ 挨拶やお手伝いについては、母やおばあちゃんがしつけてくれるはずです。厳しい親としては、盗む、傷つける、いじめる、嘘をつくなど、人に迷惑をかけることをしないように教育します。何故それが悪いことなのかを、私はできるだけ分かりやすく説教するつもりです。

ただ、私は鈴木さんからの助言に学び、「大きな声」で叱るとか、「親の考えで突き放す」ことはしないように心がけます。

余り悪いことをしないでください。私は愛花や優花への説教よりも、良い行いに対してたくさん褒めてやりたいのです。そして、二人にゴルフや将棋を教えたいと思っています。

Jumは「子供のしつけには体罰も必要」と主張します。私は体罰には反対です。夫婦の話し合いの妥協点として、重大な時に限り、子供の尻や足を軽く叩くことを私は容認しました。

私は愛花や優花を叩くつもりはありません。もしも私が叩くことがあれば、それは私またはあなたたちに極めて深刻な事態が起こっていると思ってください。

ところで、人は他人に迷惑をかけていても自分で気づかないことがあります。それは無知だからです。私も例外ではなく、気づかず

に職場の部下の心を傷つけ、退社に追い込んだこともあります。無知は罪づくりです。

だから、私は愛花や優花に学問を教えます。学問は無知を恥とし、人が幸せになるための知恵を学ぶことです。無知で罪多き父とともに学問に励み、母や人々に迷惑をかけない子どもに育ってください。迷惑をかけても許されるのは、赤ちゃんの時だけです。

（差しさわりがなければ、人間のご夫人はどなたか、教えて頂けますでしょうか？）

「お前も同志だから、隠さずに教えることにしよう。3人の子の母はマリリンという名じゃ」

（お、お色気があって、絶世の美女ですね）

「そうかのう。はっ、はっ、はっ、はっ」

（もう一人の愛人、いや第二のご夫人はどなたですか？）

「いつも白い木綿のサリーを着て、サンダルを履いたテレサという名の女じゃ」

（えっ！お歳を召したお方ではないですか。あつ、だから葉が…）

「できの良い子に育てあげるには母親が大事じゃ。それも美しさではなく、心じやのう」

（なるほど、ごもっともです）

「それがお前の家族から学んだ一番の教訓じゃよ」

（えっ、私の妻は桜のように美しいのに、教訓の意味が分りかねます…）

「そうであったか。何事もいろいろな見方があるものじゃ。はっ、はっ、はっ、はっ」

（ところで、天国行きを辞退されたもう一人のお方をどうなさるおつもりですか？）

「あいつか、今はわしの可愛い子らの教育係を務めながら、勉強中じゃ。いずれ、わしの4番目の息子とともに地上へ使わすことになるう」

（での悪い、あつ、失礼いたしました。可愛い他の3人のお子さんたちはどうなさるおつもりですか？）

「試練として地上に送ろうとも考えたが、心が歪んでもいけないから、今はのびのびと自由に遊ばせておる。最近は天国でテレサの手伝いをしておるようじゃ。だが、2番目の娘と3番目の息子は優しく、実務もできるから、4番目の補佐役として地上に送るつもりじゃ」

（同志が多いのは心強いですね。私も地上で同志を集めておきましよう）

「ほお、お前はそこまで決意してくれるのか。わしが思った以上に成長しておるようじゃ」

（独りでは心細いだけの話です）

「心細いといえば、将来の地球の管理者として、頼りになる子が一人居だけというのも心細い。わしは5番目、6番目の子を産ませたいと思っておる。ただ、テレサにはもう子が産めないから、第三の女を探しておるのじゃ」

（どのようなお方なら、お気に召すのでしょうか？）

「お前の娘がいいと思っておるのじゃが、親としてどう思う？」

（えっ、愛花ですか？優花ですか？）

「まとめて両方というのでもいいかもしれん。はっ、はっ、はっ、はっ」

俺は神様の節度を疑った。俺はだまされているのではないか？

最終章 夢 ? 花

解凍

2060年8月13日、日本のお盆である。

俺は14年間凍結中であり、泰邦として死んでちょうど50年が経過した。

今回、俺は凍結を一時解かれ、霊として故郷の墓地に戻ることになった。天国の仏教を慣習とする霊たちは毎年の定例行事らしいが、俺は行政官から特別な処置だと言われた。それは神様のご慈愛による計らいに違いない。

ただ、既に天国へ行った人たちに会うことはできないという。オカチャやオツチャや春男に会って昔話をしたいが、それは天国へ行った時の楽しみにするしかない。

春男が幼稚園児の頃、畑の井戸に落ちて溺れ、オカチャが慌てて救い出し、

「ワリ、ワリ（ごめん、ごめん）、春男」

とオカチャが泣いて詫びたことを春男は覚えているだろうか？

オカチャが早死にしなければ、誰よりも働き者のオツチャは、オカチャとともにりんごの木を1000本に増やし、家を新築し、いずれは俺か春男に家業を継がせていたはずである。それを夢見ていたオカチャは、自分の不注意で春男を死なせるわけにはいかなかった。

ところがオカチャは畑仕事や家事に追われ、病院への出費を惜しみ、身体の養生を怠り、不覚にも34歳の若さで病死してしまった。ちょうどJumが愛花と優花を産んだ年齢である。

俺が小学生の時にアバとオカチャが死んで、我が家はオド、オツチャ、俺、春男の4人の男所帯になった。オドとオツチャは義理の親子であり、昔から口喧嘩ばかりしていたが、そんな家族が容易に

幸せになれるはずはない。

オドは90歳まで生きたが、晩年は財産のない年金暮らしで、存命中にアバやオカチャのために墓石を建立することもできず、部落の中でみじめな思いをしたかもしれない。でも、俺や春男が中学生の頃、時々 弁当を作ってくれ、孫には優しい人だった。

弁当の蓋を開けた時、春男は焼き焦げた玉子焼きや貧弱なおかずを同級生に見られ、恥ずかしくなかったのだろうか？

やがてオッチャは酒場に出かけ、意地悪な女を家に入れ、破局し、アルコール依存症になり、糖尿病や肝硬変を患い、全盲になり、認知症になった。でも、オッチャは俺が大学を卒業するまで出稼ぎ先から家族に仕送りをし、そのお陰で家族は命をつなぐことができた。働き者のオッチャの苦悩や努力に比べれば、俺の苦しみなど屁でもないと思ったので、俺は50歳まで辛抱して生きられたのかもしれない。

オッチャは孫の愛花や優花の柔らかいほっぺたを指先で感じ取ってくれたのだろうか？

春男は愛花やさくらの世話になり、よく耐えて長生きし、晩年には心穏やかに過ごせたようだ。嫁を世話してやれたら、もっと幸せになれたかもしれないが、俺の器量が足りなかった。

俺は現実味のない家族の幸せを夢想しながら、結局47歳まで結婚することもなく、家族と離ればなれに暮らした。家族4人はばらばらに空中分解したようだった。

俺は社会の厳しさや孤独の中で、人生とは辛く苦しく、地獄のようなものだと思った。

俺の死後、政治や社会には明るい兆しも見られたようだが、世界では依然として私欲を満たすための戦争が続き、多くの人々が苦しんでいる。

俺は無謀な私欲との闘いを決意している。再臨の時まであと何年だろうか？

仮に俺が闘いの道半ばで倒れたとしても、俺の同志や子孫が世界

平和の志を実現してくれるに違いない。

証

俺はいまだに私欲でけん制し合う地上に、再び霊として戻ってきた。

吉川部落の共同墓地は、部落の中心道を外れて25メートルほどの坂道の上にある。俺は佐藤家の墓石の中から坂道を上ってくる人々を見つめた。目線をやや上に向けると、入道雲が迫る岩木山がそびえ立ち、山だけはどっしりと何も変わっていないと思った。

部落の俺の知り合いはほとんどがあの世に逝ったはずであり、周りの人々は見知らぬ顔ばかりである。中には同級生の悟に似た若者もいるが、悟のひ孫なのかもしれない。

50年前、俺は『愛優記』の中で「50年後、私の墓石に花が飾られていたら、それは私が親としての使命を果たした証です」と書いた。今のところ、俺がいる墓石には花が飾られていない。

Jumや愛花や優花は、父親としての俺に合格の花を供えてくれるのだろうか？

俺は娘たちが産まれて5ヶ月後に死んだ父であり、俺から合格の花を飾ってくれとはとても言えない。でも、優しい家族はきつと、俺のために花を持ってきてくれるはずである。俺はじつとそれを待っている。オッチャに負けまいと、俺は昔から待つことには慣れている。

（あつ、さくらだ）

優邦の初恋の人は60歳になるはずだが、きものが似合う上品な中年の婦人になっていた。

さくらはいまだに精神科の医師を続けているのだろうか？

それとも、10歳で長編小説の『橋のない川』（住井すゑ著）を読んだ彼女は、人の心を繊細に描く小説家になっているかもしれない。

さくらは右手に花束を持ち、左手にどら焼きが5個ほど入った菓子袋を持っている。

続いて愛花と優花と恵が現れ、愛花が花束を二つ、優花も二つ、恵みが三つ抱えている。花を佐藤家だけではなく、親戚の墓にも供えるつもりなのであろう。

三人の後ろから愛花の夫の吉谷さんとともに家族らしき人たちが7人ほど、たくさんの花束や供え物を持って坂道を上ってきた。若い女性が3歳ほどの女の子を連れている。

『神の恵』と書かれたノートは、吉谷さんの家族や子孫に読み継がれているのだろうか？

吉谷さんの家族が持ってきた花束も含め、佐藤家の墓石に十束分ほどの花が飾られ、白、黄、ピンク、赤、緑、青、紫の色とりどりの花が咲き揃っている。Jumなら「もったいない」と言うはずだが、俺はそれらが弘前城の満開の桜よりも美しいと感激した。

俺は『愛優記』の最初で愛花と優花との命名について、「愛情深く優しい人になってほしい……母の美しさには及ばなくとも、「心」が「花」のようにきらめいてほしい」と書いたことを思い出した。

愛という花、優という花、さくらという花がJumの美しさに劣らず、綺麗にきらめいて咲いている、と俺は思った。

(愛ちゃん、優ちゃん、そして皆さん、ありがとう)

「愛優記がようやく完結したみたいね。これから佐藤家の新しい物語が始まるのかしら」

とさくらが愛花や優花を見て言った。

「愛優記 父祖^{ふそ}の血こもる 遺言書 子よ孫たちよ 永久^{とわ}に幸あれ」

と恵が短歌らしきものを詠んだ。

「それって、季語がないから減点ね」

とさくらが恵の国語力をたしなめた。

「愛優記 父祖の血こもる……うん、果実あり 子よ孫たちよ 永久に幸あれ」

と、大学生になったと思われる恵が短歌を修正した。

（恵ちゃん、お金も教養も無くてもいいから、オツチャのように真面目に働く男を見つけてほしいなあ。口が達者で酒好きの男には気をつけて）

と俺は将来の父についての希望を述べた。でも、人生は希望通りにはいかないと思う。

何はともあれ、俺は家族の元気な様子に安堵し、

（愛ちゃん、優ちゃん、これまでよく頑張ったね。偉いよ）

とつぶやいて、父親の役目をようやく終えた気分になった。

ほどなく、俺の目の前にさきほどの3歳くらいの女の子が現れた。俺はその子が赤ちゃんの時の愛花の表情に似ていると感じる。その子が手を合わせておじぎをし、そして顔を上げてニコツと笑った。佐藤家の墓石周辺の華やかな花園に見とれたのかもしれないが、その笑顔が大きな瞳の優花にも似ている。

ふと、俺はその子が将来の俺の同志になってくれるかもしれないと感じた。

（愛ちゃん、もうひと花咲かせて、人類の宝を育ててほしい）

と俺は、世話好きでそわそわと動き回っている愛花の澄んだ瞳を見つめた。

俺の娘は恵やその子や他の子どもたちに愛情を惜しみなく注ぎ、大切に宝を育ててくれるに違いない。

最終章 夢 ? 覚醒

神鳴り

それにしても、J u mや泰男はどうしたのだろうか？

孫の泰男はお盆よりも仕事や女や生き方の模索が大事なのだろうと想像するが、J u mの安否が気がかりである。

まさか、神様が教えてくれた大きな地震の被害で、既に天国に行ってしまったのだろうか？

俺が再臨する一番の目的は、泣いている妻の肩や足をもんでやることである。俺が恵の子として再臨し、物心つく頃までJ u mには生きていてもらわなくては困る。

(神様、J u mを生かしてください)

(……)

神様からのご返事はなかった。

やがて雷が鳴り、大粒の雨が降り出した。余りにも突然の雨だったので誰も傘を用意しておらず、家族も人々も一斉に坂道を下り、墓地から人の姿が消えた。

雷は神鳴りが語源というが、それが神様のご返事だとは思いたくない。

土砂降りの雨に打たれ、俺は墓の前に供えられたカップ酒を一気に飲み干し、

(J u m、生きていてくれ！)

と天を仰いで叫び、意識を失った。

家宝

ここは50年前に住んでいたクアラルンプールのアパートではないか？

あつ、Jumが台所で料理をしている。愛花と優花を身ごもっている時の姿であり、とても大きなおなかである。

俺は凍結前の浅い眠りの中で、50年前の夢を見ているに違いない。

(Jumさん、なにをりょうりしていますか?)

「ポークのショウガヤキでえゝす」

(Before, しょうが、いやgingerがnot enough. So, more many manyがいいです)

「わかり、ました」

まもなく、いつも俺が食事をするテーブルの上に韓国産のご飯や豆腐とわかめが入った味噌汁が置かれ、続いて豚の生姜焼きやニラ入りの玉子焼きが運ばれた。

俺は納豆とからしをかき混ぜて粘りを出し、醤油を控えめに加え、Jumが細かく刻んだねぎを混ぜ、それを白いご飯の上に乗せた。そして、納豆の粘りが付いた箸を味噌汁の中に入れ、お椀を左手で口に運び、味噌汁を吟味した。それは高血圧症の俺に配慮されて、薄味になっている。

豚は生姜の辛みがまだ薄いいい味である。線切りのキャベツも欲しいところだが、マレーシアでは食の安全に対する信頼がないので、自宅で生の野菜を食べることは少ない。

Jumは毎日、朝食と夕食の用意をし、週一回程度は昼食の弁当も作ってくれた。俺はJumに気づかれないように目を潤ませ、(これが幸せということか)と噛みしめながら飯を食ったものである。一度、Jumに涙を見られたことがあり、

「テレビドラマを思い出した」

と言って、俺はごまかした。

Jumは神様が使わした天使に違いなく、神の子の祖母になると思われる人である。

天使は17歳の時に54歳の父を亡くし、悲しく辛い想いをしたので、産まれてくる娘たちに同じ想いをさせたくなかったはずであ

る。だから、俺の健康を気遣い、塩分を減らした料理を心がけていた。娘たちが生まれ、まさか5ヶ月で俺が死ぬとは夢にも思わなかったであろう。

赤ちゃんの時の愛花のように泣き虫のJumは、どれほど泣いたことだろうか？

Jumは自分を随分不幸な身の上と思ったかもしれない。でも、Jumは明るく振舞い、神様がお認めになれるほど娘たちを立派に育ててくれた。

俺はJumに（ありがとう）と感謝したかったが、墓地で会うことはできなかった。

（50 years later、Jumさんはどこにいますか？）

と俺は夢の中でJumに訊いた。

「わかり、ません。But 泰ちゃんといっしょでえゝす」

とJumは笑顔で答えた。

50年後といえば、俺が100歳、Jumが84歳、娘たちが50歳になる計算である。

年老いた二人が一緒にどこにいるというのだろうか？

Jumは暴飲暴食や喫煙をせず、どちらかといえば長寿の家系であるが、生野菜を食べなかったので寿命には一抹の不安があった。

優花はJumの健康を気遣ってくれ、温野菜をJumに食べさせたかもしれない。

今にして思えば、『愛優記』の中に健康や長寿の秘訣を詳しく書いておけばよかった。娘たちには塩分や糖分を控えるようにと書いたが、それだけでは不十分である。

（神様、いつ、私はJumに会えるのでしょうか？）

と俺は夢の中で神様に問うた。

「心配いらん、まもなくじゃ」

と神様からご返事があり、俺は少しほっとした。

ただ、神様の時間感覚は人間とは大分違うので、俺には「まもなく」の見当がつかない。それは、数日後なのか、数年後なのか、場

合によっては100年後なのかもしれない。

そういえば、俺は天国から地上への4泊5日の家族総勢温泉旅行の予約をJumに託すつもりだったが、それもまだ伝えていなかった。

しかし「心配いらん」と神様がおっしゃったので、俺はそれを信じて、果報、いや家宝を寝て待つことにする。

（Jumさん、あなたは幸せでしたか？不幸でしたか？）

Jumに会った時、俺はそれを訊く勇気があるだろうか？

俺の人生最高の宝物に…まもなく…。

俺は深い眠りの中に沈んで行った。

覚醒

ガタン、ガタン、ガタン。

その音で私は目覚めた。

私はどれほど眠っていたのだろうか？

前にも同じ思考を何度もしたような…。

藤川君からもらった『ベンザリン』と『ロヒプノール』という睡眠薬がよほど効いたようだ。

長い夢を見たようであり、数十年ほど眠っていたようにも感じる。私は救済者として再臨したのだろうか？

ベッドの近くのカレンダーを見ると、今日は2010年12月12日の日曜日である。私はいつもよりも大分遅く目覚めた。

私は現実を直視しようとベッドから起き上がり、念のために窓の外を見た。クアラルンプールのシンボルであるKLツインタワーが街の中心にそびえ立ち、街が何事もなく平和に見えた。

人々の暮らしぶりは見えないが、今朝は人々の生活の苦悩が何となく感じられる。

隣では高層のコンドミニアムの建設工事が朝から始まっており、私はその工事の音で起こされたようである。工事が進行すれば、こ

の部屋からツインタワーや街全体が一望できなくなる。

ツインタワーは見えなくなるが、まもなく私の生活の中に小さなツインタワーが新たにそびえ立つ。まもなくとは、ひと月後の1月10日である。

泣き虫の愛花とおしっこを引っかける優花には、誰も逆らうことはできない。

将来、娘たちがJumを困らせる反逆児にならないように、私は『愛優記』を書き続けるつもりである。

ただ、厳格で真面目腐った父が説教じみた文章を書くのを控え、これからは優しい父として、日常の情景や娘たちの成長の軌跡を気張らずに書きたいと思う。文章の内容よりも、私が娘たちや家族を愛しているということを伝えられれば、それで十分だと思うからである。

家族が来る当日、映画のように黄色いハンカチーフを飾って迎えるようか？

いや、その演出は故郷に新築の家を建て、妻や娘たちを迎える日まで残しておくことにする。その時、黄色いハンカチーフが風にたなびき、妻が映画のシーンを思い出して泣くに違いない。

いつそれが実現できるかは分からないが、私はそれを新たな夢にしようと想う。

私はベッドの横に置かれたCDプレイヤーのスイッチを入れた。
♪Imagine there's no heaven ♪It's easy if you try:♪Imagine all the people living for today:♪
『Imagine』（ジョン・レノン）のメロディーが寝室に流れた。

私はツインタワーの背景の灰色の雲を見つめ、

「オッチャ、まもなく孫を抱けるぞ。まもなく」とつぶやいた。

オッチャがオカチャと結婚して52年、オカチャと死別して39

年。絶望の人生だったと思うけれども、オッチャが孫の柔らかいほつぺたに触れ、愛花が大声で泣くシーンが脳裏に浮かぶ。

ほどなく、クアラルンプールでは珍しく、朝から小雨が降り出した。

♪Nothing kill or die for
♪No religion too
♪Imagine life in peace
♪And the world will be one

私はその雨が世界平和を願う神様の涙に思えた。

(完結)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8616p/>

愛優記

2011年2月23日08時25分発行